異なる世界で

のぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異なる世界で

【Ｎコード】
Ｎ０５８５Ｘ

【作者名】
のぶ

【あらすじ】
買い物してたらいつの間にか砂漠にいた！
異世界トリップという、いかにも王道な設定です。
やや腹黒い主人公が異なる地で、力強く生きていくお話をご覧あれ。

蒸発（前書き）

作者の趣味全開です。笑
文才はありませんが、ガンバルのでひとつよろしく。
ということで、どうぞ。

蒸発

『どこですかーっ、ここは?!』

私は混乱していた。だから叫んだって訳ではないんだけど。

叫んだその声は砂に吸収されて、だだっ広そうなこの地には響かなかった。

そう、今、私は、

…砂漠の真ん中にいる。

真ん中って表現が合ってるか分からないけど、四方を見渡す限り、砂、砂、砂!木も、ましてや砂漠定番のサボテンもない。そして八方を見渡しても、人っ子一人、虫一匹たりとも視界には入ってくれなかった。

事の背景を言おう。簡単に言っちゃえば、気が付いたら“ここ”にいた。ここってのはもちろん今立っている、砂漠。

てゆーか暑い。途方もなく。

寒いからと着こんでいた上着を脱ぎ、ロンTになる。それから額と首を流れる汗を拭った。

何でこんなことになったのか、とりあえず整理しなくちゃ。

三日後に大学の入学式を控えた私、榊原　寧‐サカキバラ　ネイ‐は今日引っ越しを終え、無事一人暮らしを始めようとしていた。

なのに、なのに！一体どんな状況だっての。

こんな砂漠、知らないし。いや、サバクってむしろ何ですかって話ですよ。しかも買い物袋を二つ下げて、結構間抜けな図。

中の生もの腐っちゃいそうだなぁ。

『って、今はそれどころじゃなーい！』

混乱は混乱を呼ぶだけ。だから、落ち着かなきゃ。

そう分かってても、混乱しないはず、ない。整理どころか余計分からなくなっただけだった。

「わーお、でっかい声だね☆」

『ウルサイッ！今はそれどころじゃ…ナ、イ？』

え…今どっかから声が聞こえた気が、したんだけど。気の所為か。あまりの暑さに頭イカレたのかも。

一人首を傾げる。だって、もう一度周りを見渡しても、やっぱり誰もいなかったから。

「どうして疑問形？」

…ん？やっぱり声が聞こえたみたい。そうか、ここは天国なのか。天国って花畑じゃないの？三途の川だって渡ってないのに。

いや、川はきっとこの暑さで干上がったんだな。花畑だなんて嘘言ったの誰だよ。こんな暑苦しい砂の世界じゃ天国じゃないじゃん。

やっぱ死んでみないと分からない事実ってことなんだね。

「もしも～し？何で黙ってんの。」

…空耳じゃない！確かに声が聞こえた。でも、どこから？

キョロキョロと辺りを見渡す。でもやっぱり砂漠には私以外何もなかった。

「あっ、ひょっとして僕を探してるんだね。状況把握力はなかなか悪くない。

ただし、詰めが甘いね。」

何の詰めだよ。

間延びした喋り方にイライラしてきた。だっていつの間にかこんなとこに立ってて、幻聴みたいに誰もいないところで声が聞こえてくるってのに、何が状況把握力は悪くない、だよ。

ツッコミどころ万歳過ぎて、そんな気が失せるって。

「おーい、大丈夫〜？」

大丈夫もクソもあるか！頭の配線おかしくなりそうだってのに。

「アハハ☆混乱しちゃってるんだネ！」

いちいち頭にくる言い方すんな。いくら寛容な私でも、そろそろキレたい。

「ヒントをあげよーぅ。」

語尾を伸ばすな！そして最後にちょっとだけ発音するな！

会話なんてしたくない、って訳ではないんだけど。今は会話できるような人物がこの人しかいない。

ただ、姿の見えないこの声の人物はものすごく面倒臭い人だって分かるから、ツッコミはあえて心の中でしておいた。

「周りにはいない。下は砂だからいるはずもない。あと残るは？」

…まさか。あるはずない、そんなこと。

そう思いながらも、半信半疑の中ゆっくりと上を見上げた。

『〜〜――…ッ？！』

「アハハ☆驚いてるねぇ。」

“驚いてる”の域じゃないからーっ！どうやって浮いてるの！？

てゆーか何なの、そのマヌケ過ぎる画は！

その声は見事に上から聞こえていた。

頭イカレてんのはこの人だよ。さっきは自分かと思ったんだけど、この目に見えてる状況はどうやっても真実以外の何物でもない。

…三輪車？

あろうことか空飛ぶ三輪車に乗っていたまさかのイケメンは、姿形こそギリシャ神話から飛び出して来たような神々しさなのに、見事なほどまでに残念だった。

金の髪、碧い目、纏う白い衣装。彫刻から飛び出してきたみたい。

『…あなたは誰？何で三輪車に乗ってるの？』

おずおず聞いた。声は絞り出されたように固く、低い。身体が強張ってるのが、自分でも容易く分かった。

だって頭おかしい人だったら怖いんだもん。世の中何かと物騒だしね。用心するのも当たり前。

でも、この状況でできることはこの人の話を聞くことくらいしかない。それに関しては至極残念だ。

「これは三輪車って言うのかい？小さな子供が乗っていて楽しそうだったから、ちょっと拝借してきたんだよー。この乗り心地はサイ

コーだね。

それにしても、キミは何でそんなに熱烈な視線を向けてくるんだい？あっ、もしかしてこれを狙ってるんだなぁ。そんなに見たってこの三輪車はあげないよ！」

『いらんっ！』

何この人。会話が一向に成立しないんですけど。

私は頭に手をあてて、お手上げのポーズをとるしかなかった。

てゆーか、拝借って言いつつも、子供から盗んできたってことじゃん！サラッと言ったけど、れっきとした泥棒だって。マジ、面倒臭い。

『ああ、そーか。これは夢なのか。夢なんだな。もう十分満喫したから早く目を覚ませー。』

買い物袋を片手に持って、空いた手で頬を抓って見ると。

…痛かった。

「何を言ってるんだ。現実逃避は恥ずかしいから止めなよ。」

『あんたのそのカッコの方が百万倍も恥ずかしいわっ！』

屈辱的。大人になって楽しそうに三輪車に乗ってるやつだけには恥ずかしいなんて、言われたくないっての。

ああ、全身の力が抜けてきた。死ぬのかな、私。

もう何でもいいからこの状況から逃げたかった。

「おっと、僕の許可なしに寝ようとするなんて、いい度胸じゃないか。」

知らないって。力が入らないんだもん。とりあえず、喉、乾いた。

…水。そうか、水買ったんだった。ガサガサ音を立てながらビニール袋を漁る。

あ、みっけた。

「ほー、無視するあげくに飲み物って。君、思いやりがないね。」

あんたに言われたくないわ!

じとーっと睨みつけながら、ゴクゴク喉を鳴らして一気に飲んだ。

『ぷはーッ。生き返るー。』

上から“おっさんかよ”なんて聞こえたけど、私、ぴちぴちの18歳ですから。さて、喉も潤ったことですし。

『アナタハダレデスカ?』

質問タイムと行きましょう。

「なんでカタコトなの?まあ、いいか。僕は“神”!」

Ｗｈａｔ?今何とおっしゃられた?

『か、み…さま?』

「イエス、ザッツライト☆」

やっぱり、天国だったのか…うん、意識が朦朧としてきたし、そうなんだよ。

私は完全に体を砂の上に放り出した。

「ちょっと、ちょっと!まだ話は終わってないぞ。」

『神様、ちょっと、ごめん…くらくらしてきたし、目が掠れてよく見えないんだ。』

実際、もう、太陽の光が眩し過ぎるくらいしか見えない。あとは輪郭が全部ぼやけてる。

「ああっ、しょうがない。人来ちゃったし、あとでまた会おう。僕の名前は“ジュノワール”。

いいか、“ジュノワール”だぞ。」

ほら、繰り返して、と言われて小さく呟く。

なんとも言い難いカタカナだな。とか、失礼な事を考えてみたけど、何だか焦ってるその人は、早口でまくし立てた。

「そう、ＯＫ!そう口に出して呼びさえすればすぐ行くからね。じ

や！」

あ、三輪車が去っていく。

ものすごい勢いで漕いでいる。だけど、それよりも遥かに速いスピードで進んでいた。

あれ、浮いてるし、漕ぐ意味無いよね…

力無く砂の上に放り出した身体。右手の方へと三輪車で去っていく白いものは、霞んだ目には、すでにはっきり見えていない。そして、霞んだ視界から物体らしきものが気えっ去った。

そして、私の意識も…

目覚め

『んッ…』
「おい、大丈夫か？」

あー、ダルイ。私、何してたんだっけ？

…ああ。神様とか名乗るイケメンが現れたんだっけ。三輪車とか、浮いてるとか、奇妙な事があった気が…

変な夢だった。目を覚ましたら、きっと！

きっと…？

『ここ、どこ？』

視界に入っていたそこは、白い部屋だった。

病院、とか？いや、ひらひらがいっぱい。お姫様みたいなベッドに横たわっている。

日本人には滅多にないと言う、天板付きのベッド。なんでそんなとこに寝てるんだろ？

状況を把握するために、部屋を一望しようとゆっくりと体を起こした。

「ここはデューク王国の城だ。自分の状況は、理解できているか？」

横からする声。感情の浮き沈みは無く、ただ淡々としている。

でも、少し待ってほしい。理解するには…ちょっとキャパオーバーかも。容量の少ない私の脳には、かなり厳しい状況だった。

何が、どうなってるんだ？

さっきまで砂漠で三輪車に乗ったウザい神と話した夢を見て、その後は知らないベッドの上で寝てる、と。

…あり得ない。どんな状況だよ。

私が押し黙っていると、小さく“記憶喪失か？”と零す人が一人。

『てゆーか、あなた、誰？』

寝起き特有の掠れた声。相当寝てたみたい。そういえば、酷く喉が渇く。

「ああ、自己紹介がまだだったな。デューク王国の宮廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リッキンデル・シェパードだ。」

…今日はイケメン祭？何、この格好良い人。

さっきのアホみたいな感じで夢に出てきた神様は儚げで、綺麗な感じだったけど、この人は、亜麻色の髪、意志の強そうなスミレ色の瞳。整っていて綺麗だけど、どこか野性味のある顔はもう、格好良いの一言に尽きる。

てゆーか、外国人？日本語喋ってる？上手すぎやしないか？

「おい、大丈夫か？」

ちっ、近い！

顔に一気に熱が集まってきた。

あれか、外国人特有の、スキンシップってやつか？！

私には今まで関係ないことだったから、実際にされると戸惑うって。

そう思ってたのがいけなかったんだろうね。

『だ、大丈夫だす！』

『「……」』

“だす”って、みごとに噛んだ。

余計に恥ずかしくなって俯くしかできない。

今までにないイケメンに会ったんだよ？そりゃ、少しくらいは猫を被って、女の子らしく淑やかにしておきたいものだったけど。無念、の一言に過ぎる。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかったみたいに流された。けど、有り難いから私も何もなかった体で答える。

『榊原寧。』

「サカキバラ・ネイ？どっちが名前なんだ？」

……？どっちも何もないでしょ。何を言ってるんだ、このイケメン。

いや、待てよ。目の前にいるイケメンさんは見るからに外人っぽい顔つき。外国だと反対になるんだっけ？

『ネイ。ネイが私の名前。』

やっとのことでそう言うと、クーンは優しげな笑みを零した。

と、思ったらまた眉間にしわ。元の真剣な顔つきはどこか厳しそうだった。

「ネイ、自分の状況が理解できるか？」

至極真剣な趣。私は自分が一筋縄ではいかない状況にいるんだと思うしかなかった。

とりあえず、目の前の人は信頼できる人間だと思う。勘、だけど。だから正直に話そう。

『…今から言うこと、信じてくれますか?頭がおかしいヤツだと思われることを、きっと今から言います。だけど、真実だから。』

鼻がつーんってしてきた。

混乱のせいで、普段はありえないこと、泣くなんて行為に及ぼうとしてる。

だめ、泣くな。

「…とりあえず聞こう。だから泣くな。」

顔は見えてないはずなのに、優しくかかる声。それは、涙をもっと誘うものだった。

頭の中がぐちゃぐちゃで、どうしてここに居るのか、とか、目の前の人がどうなのか、とか、もっともっと疑問は頭に浮かぶ。でも、とりあえず、話してみよう。そう思った。

『ここが何処だかは分かりませんが、さっきまで私、砂漠にいたんです。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。」

そうか。私、助けられたんだ。

あのアホ神（真実か分からないけど）が無理矢理話を聞かせようとして、炎天下の中に放りっぱなしにするからこんなことになった

んだよ。

あやうく神様に殺されるとこだった。

『でも、その前には日本って国にいたんです。』

“ニホン？”と首を傾げる。

やっぱり。私は全然知らない土地にいる。だって、さっき言われた国の名前なんて聞いたことないもん。それは自分が無知な所為かもだけど。

それにしても、どうして言葉が通じてるんだろう？私、日本語喋ってると思うんだけど。さっきも思ったけど、ホントに上手な日本語話してるんだよね。

…とりあえず、話を先に進めよう。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。

あそこでジュ…何とかっていう自称神様に出会ったんです。』

あー、事実なのに、自分でここまで喋っといて、何言ってるんだこいつって思ってるんだけど。ってことはもちろん目の前の彼は…

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

真剣な顔して悩まないでください。私だって訳わかんないんだか

ら。

「話をまとめると、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたらあの砂漠にいた、と。」

イエス、ザッツライト。神様の部分は割愛されちゃってるけど。

何度も小刻みに首を縦に振った。

信じてもらえなくても、事実は事実だもん。嘘はついてない。隣から大きく深いため息が聞こえてきた。

わかるよ。私はどう考えても頭がおかしい厄介者だもんね。

「ニホンに、神様、ねぇ。」

うん、その渋い顔、期待通りの反応だね。私だって訳分かってないもん。

『あ、買い物袋がない…』

いまさらそんな心配をしてみた。だけど、その返事はすぐに返される。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。そこに置いてあるぞ。」

あ、ホントだ！私の食材ちゃんたち！

日本人だって証拠が欲しくて、早いとこ自分が正常だって思いた

くて。必死に力が入らない身体を動かそうとした。

けど、無理なことは無理だ。

『きゃっ…！』

「危ない。」

ベッドから転がり落ちそうなところをクーンに抱きとめられた。

うわっ。筋肉しっかりついてるよ。現代男子には少数派な肉体だ！って感動してる場合かーい。

『ご、ごめんなさい。なんか動き難くて。』

すぐに言い訳をしてみた。けど、すぐに頭の中では、小さな疑問が浮かぶ。

自分で言っといてなんだけど、服が違うような気が？

視線を自分の方へ持っていくと、まさかの白いワンピースのようなものを着ていた。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えさせたに決まっているだろう？」

中世のヨーロッパか！何て突っ込みたいのに、言葉は出て来てくれなかった。

『あの、これを私に着せたのって…？』

「もちろん俺じゃない。流石に早乙女とは言っても女は女だ。そこはきちんと区別しているから気にするな。」

待て待て待て。早乙女？

辞書で引いた早乙女という意味に違いない。でも、それにしても若く見られ過ぎてる気がする。

この人、私を幾つだと思ってるんだ？

『…私、何歳だと思われてるんですか？』

「１４くらいだろう？」

ちゅ、中学生？！確かにアジア人は若く見られるって言うけど、あと二年で成人ですけど。

『私、１８です。』

そう言うと、あからさまに驚かれた。あんな綺麗な顔の表情が変わってくれるのは嬉しいけど、ちょっと複雑。

「…すまない。顔つきや身長から言って、まだ成人していないかと思った。」

うん、ストレートに言ってくれてありがとう。だけど、ちょっと傷ついたよ。

けど、笑顔を崩すことなく、気になる情報だけを聞いて行く。

『ここでは何歳で成人ですか？』

「１５だ。」

なるほど。私はここではとっくに大人になってるってわけか。

『あなたはいくつですか？』

そう尋ねると、２４歳だとすぐに返事が来た。

随分と大人っぽくいらっしゃる。身長も１８０以上ありそうだし、そんな人から言ったら、１６０？もない私は子供に見えるんだろうね。なんか、嫌だけど納得。

ぐー。

突然の大音響。その出どころは私のお腹だ。恥ずかしいにもほどがあるって。

「食事を運ばせよう。」

ごめんなさい。深く反省しておりますとも。けど、腹が減っては戦はできぬ、とも申しますし。

ここはひとつ腹ごしらえと行きませう。

その人にお願いをすると、私はだるい身体をベッドに戻した。

「大丈夫か？」

気だるそうにしていたのが気になったのか、顔を覗き込んでくる。心配そうなその目は子犬をも想像させるほど、キラキラしていた。

…ちょっと可愛いじゃないですか。

なんて思ってると、ドアがノックされた。と、続々とメイドさんたちが入ってくる。すぐに食事の用意がテーブルに用意されると、メイドさんたちは出ていった。

早業っ！板についた仕事って感じ。

それに感動していると、大きく、少しかさついてる手が差し伸べられた。

「さぁ、腹が減っているんだろう？食べよう。」

その言葉に嬉々として頷くと、伸ばされたクーンの手を借りてベッドから降りた。席についてから疑問が一つ。食事のセットが３つ。今ここにいるのは私と彼の二人。

どゆこと？

何て考え込んでいると、その様子で私が何を考えているのか分かったのか、答えを教えてくれた。

「もう一人、ここにくるヤツがいる。ネイの話を聞きたがっているから、あとで紹介するよ。ほら、待ってなくていいから食べろ。」

促されはしたけど、先に食べるのはどうも気が引ける。私が厄介

になってるものだって言うのに、我が物顔で一人先に食べてたら失礼でしょ。

だから、待つことにした。

目覚め - その2 -

「すみません。遅れました！」

…どうやらイケメン祭は現在進行形で続行中らしい。

しばらくしてやってきたのは綺麗な男の人。銀髪で青の瞳。線が細く色が白いその人は、クーンとは正反対の性質みたい。どこか中性的な感じがした。

「遅い。ネイが腹を空かせていると言うのに、いつまで待たせるつもりだ。さっさと席につけ。」

厳しいお言葉ッすね。

なんて勝手に私が待つことにしたくせに。やってきた人は私に“すみません”ともう一度言うと、席についた。

「ネイ、食べろ。腹が減ってるんだろう？」

そう言われて頷くと。

『いただきます。』

手を合わせてそう言って食べ始めた。

うーん、味薄くないですか？いや、食べさせてもらっといて言っ

ちゃあなんだが、現代っ子は舌が肥えてると言いますか。

ほぼ味が薄い料理の数々は、正直言っていくらお腹が空いてるからと言っても、食べ続けるには厳しいものがあった。

「ネイ、さっきの挨拶のようなものはなんだ？」

不慣れな手つきでフォークとナイフを使う私をずっと見ていたのか、クーンは手を動かした様子もない。さっきの言葉、つまりは“いただきます”が随分と気になってる様子。だから説明した。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そういうものたちの命を奪って人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になって私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの命を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられるって感謝するのですよ。』

そう言うと、クーンはいただきます、と口にしてから食べ始めた。もう一人の人は私を微笑みながら見つめている。視線に気になりつつも、口に運ぶフォークは止めなかった。

味気ないけど、お腹は空いてるんでね。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のもののようです。」

さいでっか。てゆーか、誰なんだろう？

疑問に思いながらも、味の薄さに幻滅していた。　これじゃあ、食べたくても食べられないよ。うーん。少し考えてから箸をとめた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だったじゃないか。」

いや、それはもう恥ずかしいから掘り返さないでください。今からでも穴を掘って入りたいですから。てゆーか、せっかく用意してくれたのに残すのは失礼だよなぁ。でも味が…

……！思いついた！

私は買い物袋をとってきて、中を漁る。突然の行動に、二人は固まっていた。

「ネイ？」

不思議そうに見つめてくる。けど、私は構うことなく自分の作業に没頭した。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

訝しげな表情。

そりゃそーだ。見たこともないものが並んでるんだから。

私は嬉々として説明を始めた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、

醤油に味噌です。』

ここに来たのが買い物帰りで良かった。何にもなかったから、必要な物をまとめて買ってたんだ。できれば普通に自分の生活の中で使いたかったけどね。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなって。』

言い訳ですけどね。味が薄いから、なんて正直に言ったら失礼極まりない。

興味深そうに見ている二人に説明しながら、使ってみることにした。

まずは…スープか。

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会う万能調味料です。』

そう言って、自分のスープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなった液体。それを口に運んで、少し嬉しい気分になった。思わず笑みが零れる。

でもやっぱり二人は不思議そうだった。

私は構うことなく、サラダにはマヨネーズをかけ、バターで和えたポテトのようなものにケチャップをかける。口に運んでみると、どれもしっくりきた。

『…食べてみます?』

あんまりにも強い視線に耐えられなくなってそう言った。すると二人はすぐに頷く。

どうやらイケメン二人は、好奇心旺盛なようだ…と心のメモに書き込んでから、行動に移す。

私はスプーンでスープを掬うと、中性的な人に差し出した。

少し困ったような表情。

あ、マナー違反?でも差し出しちゃったし。いまさら引っ込められないって。

差し出したままにしていると、ゆっくりとスプーンに口を寄せてきて、飲んでくれた。

それを確認すると、今度はもう一人の方にサラダを差し出す。さっき見ていたからか、気にすることなく口に運んでくれたので、腕は疲れずに済んだ。

あれ、反応なし?

二人を交互に見る。すると、少し止まっていた。

あらら、お口に合いませんでしたか?そう心配していると。

「「おいしい…」」

『そうですか。それは良かった。』

そーでしょーとも。

私は満足げに笑みを零すと、残りの物を胃袋に納めに掛かった。

二人が物珍しそうな顔をしてたから、私は尋ねてから同じように調味料をかけてあげる。

すると、嬉しそうに食べ始めたから、一足先に食べ終わった私はその食べっぷりをのんびりと眺めていた。

「「ご馳走さまでした。」」

食べ始めと同じように私の真似をして挨拶をすると、メイドさんを呼んでお茶を淹れてもらっていた。お茶くらい私にだって淹れられるのに。

不躾なのだろうがじーっと観察していると、お茶を淹れて空いたお皿を手に取ると、早々と去って行ってしまった。

「ネイ、本題に移らせてもらうぞ。」

改まった態度に私もキュッと体を縮こまらせて、二人を見据えた。

…イケメンに視線を向けられるのって、居心地悪い。こっちが見つめて目の保養にする分にはいくらでもいいのに。

「こっちは神官のレークサイド・マカリアスだ。」

一時間近くもずっと一緒にいて、しかも食事を共にしたのにも拘らず、漸く名前を知ることができた。

それにしても、こう、何て言うんだろう…神々しい、よね。さっきのあほ神様よりも神様っぽいし。クーンって人と並んでも見劣りしないその姿に、圧倒された。

なんか、私、ふつーだよね。

ちょっと淋しく悲しい気分になっていると、何事もないかのように話は進められていた。

「砂漠で倒れていたネイを回収したのは私だが、砂漠にいるのを視たのはレークだ。」

“私”？さっきまで俺って言ってたのに。俺って言ってた方が、見た目に合ってたからなんか勿体ない。

でもよく分かんないけど偉い立場にいるみたいな雰囲気だし、なんかしきたりとかがあるのかもしれない。

レークって言うからその人に目を向けると、ばっちり視線が合ってしまった。

にっこりと笑われると、俯くことしかできない。直視できません！

「私が盆の前に立っていると、誰もいない砂漠に倒れている貴女が

視えました。知らないと思いますが、あの砂漠は誰も通らないんです。」

…そうだったんだ。誰もいないところに倒れてるなんて、死んでたっておかしくない。

『助けていただいて、本当に有難う御座いました。』

頭を深々と下げる。状況が飲み込めなかったとはいえ、もっと早くにお礼を言うべきだった。

失礼極まりないよね。

「ネイさん、とお呼びしても構いませんか?」

そう尋ねてからレークさんは話し始めた。

「本来ならあの盆には滅多に一人の人間だけが映し出されることはありません。使えるのが私だけなので周りの人間にはバレていませんが、これが知れ渡ると大変なことになります。」

…なんかよく分からんが、大変な事に巻き込まれた?そんな感じは否めない。

二人の顔を見ても、冗談だ、とは言ってくれなさそうだった。

「鏡盆には本来、たくさんの人間が映し出されて、国や世界の状況を知らせることしかできない。」

眉間にしわを寄せていうクーンさんの表情からして、深刻な事態

なのが良く分かった。

もし何かあったら、あのアホ神、何をして詫びてくれようか。ただじゃ済まさん。

「この国の言い伝えでは、鏡盆に映った人間は、神からの声を届ける預言者だと言われている。」

もしや…？

少し俯いた状態から、目線だけを二人に持っていく。

っ！やっぱり！

「察しの通り。預言者はつまり貴方ということになります。そうなった以上、貴女が映し出された鏡盆は、最初の神の啓示があるまで使用できません。

砂漠に倒れているところを保護していることにするので、まだ上の人間には話していません。しかし、知れ渡ってしまうのも時間の問題でしょうね。」

明るい笑顔で言わないでください。まじ、厄介すぎるから。イケメンだから直視できないとか、もう関係ない。

私なんて、この前まで単なる一女子高生だったんだよ？

それが急にこんな見知らぬ土地にやってきて、おまけに神の声を伝える預言者だなんて言われて。脳内の考え事する部分の容量不足。はい、きゃぱおーばー。脳みそぐるぐる。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まった。詳しい話はまた明日にでもしよう。

ネイ、疲れているようだから、もう寝ろ。」

その心遣いに、涙が出そうになった。

「そんなっ！情報がなければ私の研究は進まないのですよ？」

歪んだ表情を浮かべるレークさんに目線だけ向けて諌めると、部屋から追い出した。

おー、強引だな。

なんて他人事みたいに思っていると、また手を貸してくれ、ベッドに戻してくれた。

「…眠れそうか？」

あー、心配してくれる姿も様になってますねぇ。漸く見慣れてきた私は、少しだけ笑顔を浮かべて。

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

そう言った。

「ネイが混乱しているのは分かっていたのに、こちらの事情で長話に付き合ってもらってしまった。礼を言うのはこちらの方だ。有難う。」

慈愛に満ちた様なその微笑みにどこかを掴まれた気がしたのは無理もない。

イケメン祭はこれにて終了としていただきたいですね。これ以上何かあると、心臓が持ちそうもないもん。

そんなことをぼーっとして考えていると、クーンさんは手を伸ばして頭を撫でてきた。

〜〜一…っ！格好良いじゃないですか。微笑みながら、頭撫で撫で、って反則でしょ。

顔に一気に熱が集まってきた。だから、顔を隠すために俯く。

本当は布団に潜り込みたかったけど、クーンさんの手がまだ私の頭を撫でていたから堪えた。

「ここ、絡まっているな。少し待ってろ。」

何の事かと思って、赤くなった顔を隠しつつ、その行動を横目で追う。近くの化粧台まで言って櫛を持ってきたクーンさんは、ベッドの上に座り、私の髪を丁寧に梳き始めた。

もちろん私はされるがままになり、身体を強張らせる。

「…綺麗な髪だな。」

髪を梳き終わったらしく、もう一度頭を撫でると、お休みと言って出て行った。

『～～―…っ！』

声にならない叫びをあげると、今度こそベッドに潜り込み、布団に包まる。心臓は壊れそうなほど強く、早く脈打っていた。

妖精

「おはようございます！」

目を覚ましたら、ベッドの傍らに女の子が立っていた。

『おはよ、ございます…？』

その元気のいいこと。にっこりとした満面の笑みに圧倒された。

「もう日も上がっています。そろそろ起きても良い頃合いですよ。」

指差された窓の向こうには青空が広がっている。差し込む光から、太陽が大分高い位置にあることが分かった。

それにしても、まずは…

『あの…どちら様でしょうか？』

生憎昨日の状況は目が覚めるまで、夢だって思ってた。結局この部屋にいることが分かったから、ちょっと落胆。で、起きた途端に知らない人。

混乱、混乱。ってなわけで。早速質問しました。

「失礼いたしました。」

きゅっと唇を結び、真剣な表情になる。そんなに畏まらないでほしーんだけどネ。こっちも緊張しちゃうから。

「今日付けでネイ様のお抱えとなりました、お世話役を務めさせていただきます、女官のミリアと申します。」

丁寧に挨拶をされ、思わずつられて頭を下げる。そんな私の行動にびっくりしたのか、ミリアは焦っていた。

必死な言葉に驚きながら、私は頭をあげる。そこにあるミリアの顔は随分と困っていた。

でも仕方ない。

こんなに丁寧に挨拶されたことないもん。そりゃ、同じように返すってのが、道理でしょう。

それに、聞きました？私がメイドさんを抱えるとか言ってましたよ！？…って誰に話しかけてんだか。なんてノリツッコミみたいなことしてみたり。

「さあ、ネイ様。お着替えいたしましょう。」

『ネイって呼んでください。私、様付けで呼ばれるような人間じゃないですから。』

さっきから歯痒かった。私、偉い人でも何でもないし。

でも、ミリアは了承してくれなかった。

「分は弁えなければなりません。」

どうかお許しください、と言ったミリアは、今度は頭を下げる立場になっていた。

そんなにこだわることなのかなぁ。きっと、この世界には階級制度があるんだろーな。

私はそんなものがある日常にいなかったから、それがどんなものかなんて分からない。でも、ミリアのこの行動にそれが垣間見えた気がした。

『…わかりました。』

こう言うしかなかった。

だって、この所為でミリアが何か言われたら嫌だもん。これからもっと打ち解けられたらいいなぁ。

「さ、着替えましょう。」

そこからが地獄だった。

どれにしますか、と言われて開けられたクローゼットの中にはまさかのドレス。

こんなの着たことないし！てゆーか、是非パーカとジーパンで！なんてのはムリみたいで。

ミリアの恰好を見ても、足が見えていないくらい長いスカートをはいている。この世界の恰好は厄介そうだ。

「きっとその白い肌には何でも似合いますよ。」

えっ？なんか嬉しそう？とか思った私が馬鹿だった。

ミリアの性格はちょっと厄介。（すみません、でも事実。）純粋に楽しんでいるから、止めてとは言えなかった。

でも、着せ替え人形みたいになってる間に、いろんなことを話せたからまだマシかな。

ミリアは２０歳らしい。大人っぽいのに、行動に幼さが見えるのはそういうことか。それにしたって胸あるし、色気が半端ない。

世の中って不公平だ。平たいわけではないのに、ミリアよりも少々淋しい自分の胸元が空しい。…目を逸らす事にしよう。

結局、争った結果、私の主張に負けたらしく、スカートが膝下くらいのものを選んだ。

本来は女性が足を出すことはないらしい。でも、あんなの着てたら動けないじゃん。私が大人しくしていられる訳がない。

…自慢げに言うことじゃないけど。

白いワンピースを着せられ、今度は化粧をさせられた。ふわふわなスカートはバレエみたいだなぁと思ったけど、口に出したら不思議な顔をされてすぐに口を噤む。

どうやらこの世界にバレエはないらしい。だから、踊りみたいなもの、と言ってごまかした。

「最後に髪を結いましょう。」

この国では長い髪を結わないのは礼儀に反するらしい。じゃあ、髪が短い人はどうするんだろう、って思うけど、髪が短い人は基本的にはいないんだって。変なの。

髪を梳かれながらボーっとしていると、後ろから唸り声が聞こえてきた。

『…どうしたの？』

「いや、この綺麗な髪を結ってしまうのは勿体ないと思いまして。編み込むと跡が付いてしまいそうで。」

気にすることでもないのに…そういえば。

『昨日、クーンさんも言ってた。』

鏡に映っているミリアは目を丸くしていた。

なんか変な事言った？

『どうしたの、ミリア？』

不安になって声をかける。ミリアは驚いた顔をしたまま口を開いた。

「…クーン魔道師さまはネイ様の髪に触れたのですか？」

『うん、どうして？』

ミリアはやっぱり驚いた顔をしていた。

クーンさんはなんかユウメイジン、みたい？それに、年ごろの女性に男性が触れることは、めったにないと言う。それって、現代日本じゃ考えられない事だよね。

「クーン魔道師さまは女性に触れることは滅多にありません。舞踏会では断れない時のみ、夜会に至っては義務でない限り出席いたしません。

生理的現象の解消の時のみ、女性に触れると有名ですね。女性たちはクーン魔道師さまが誰と結婚するのか気にしています。

人気がありますから、女性たちは競って気に入られようとしているのが現状です。」

ほー…・・あの容姿じゃ当たり前だよね。

それにしてもミリア。

『一気に喋ったね。』

当たり前です、と言って、得意げに続けた。褒めた訳じゃなかったんだけどねぇ。

「女中内でも有名なお話ですもの。女の人たちはみんな噂話が大好きですから、嫌でも耳に入ってきます。」

そうなんだぁ。まあ、女の人の性ってとこだよね。

それにしても気になることが一つ。

『“生理的現象の解消”ってナニ？』

理解できなかったことを尋ねると、ミリアは渋い顔をしていた。

なんだぁ、その顔は？

そう思っていると、大きなため息を一つ零した。

「…ネイ様はまだ知らなくてよいことです。」

そう言われちゃえばもう何も聞くことはできなくて。髪をどう結うかという問題にまた論点が向けられた。

『ポニーテールにしていい？』

そう問うと、返事を聞かないままてっぺん付近で縛った。

「うーん。」

ちょっと悩ましげ。ダメ、だったのかな。

「それはそれでネイ様の差見の艶やかさを引き出しておりますけど、髪は全てきっちりまとめてしまうのが当たり前ですし。」

そっか。なんかいろいろあるんだね。服装は妥協してもらったんだもん。ここは従っておくべきだよね。

そう思った私はそのままお団子にしていく。ミリアはピンで固定するのを手伝ってくれた。

「よくお似合いです。」

…褒められると、どんな反応していいか分かんない。

社交辞令だってのは分かってるんだけど、照れくさかった。

「失礼します。」

ノックの音と共にドアが開いた。

居候の立場で何だが、ドアは返事の後に開けて欲しい。

もし着替えの最中だったらどーすんの。私、仮にも一応女の子だよ?とは言えない。

「おはようございます、ネイさん。よく眠れましたか?」

朝から眩しいほどの笑顔。随分とご機嫌な感じがした。

『おはようございます、レークさん。』

私を見てから頷き、支度は終わったようですね、と言った。

「朝食を運ばせましょう。クーン殿も早朝会議が終わったらこっちへ来るそうです。その後の予定は、私が管理させていただきますね。」

なるへそ。そう言えば、昨日私に聞きたいことがいっぱいあるって言ってた気がする。自分の研究がどう、とか。

その時間がやってくるってことで、レークさんは目に見えて生き生きしてるみたいだ。どうやら私は貴重な研究材料らしい。

妖精 - その2 - （前書き）

明日提出の課題が終わっていない・・・
しかしこっちはサクサク進む。笑

では、続きをどうぞ。

妖精 - その2 -

「悪い、遅くなった。」

嫌な思考を遮るかのように、今度はノックもなくドアが開いた。

お前もか！と言うツッコミはもちろん言えるわけもなく。私はおはようございます、と朝の挨拶をするだけだった。

そんな姿を見かねたのか、ここまで口を閉ざしていたミリアが口を挟む。

「お二方とも、女性の部屋を訪れるのはいけないことではありませんが、ノックと返事を聞いてから扉を開けることを忘れないで下さいまし。

もし着替えの最中だったらどうするおつもりですか。」

そう言うと、朝食の準備をしてきます、と残して出て行ってしまった。

ちょっ、ミリア！言い逃げはないよ！この空気をどうしてくれようか…

紛れもなく気まずい雰囲気が部屋一杯に充満していた。

「…すまなかった。」

しゅんとして謝罪を述べてきたのはクーンさん。

どどどっ、どうしよう?!…可愛いんですけど。

美形は何しても許せる気がするのは私だけだろうか。いや、確か例外（アホ神）もいたっけ。ま、どーでもいいことは置いとこう。

『あの、大丈夫ですから。でも…着替えてるところは見られたくないので、今度からはお願いします。』

てゆーか、見たくもないもん見せられる方が可哀相だしね。見て減るものじゃないって言うけど、見られて減るものならとっくに悲惨なお腹を晒してる。

でも、そんなの見た人の方が不愉快でしょ?ってなわけでお願いに至った。

その後にレークさんも謝ってくれ、三人で朝食をとる。私が違うところから来た事を知らない人に話を聞かせることはできないため、クーンさんは人払いをしていた。

もちろんミリアも。ちょっと淋しく思ったけど、味気ない食事に日本製の調味料を加えるのにはちょうど良かった。

最早口を開いたのはクーンさん。

「ネイの立場はレークの再従兄妹＜はとこ・またいとこ＞と言うことになった。遠い土地からやって来たので、この国のことはよく知らないという設定だ。」

あいあいさ～。立場をごまかす為の嘘ってことですね。了解いたしました、と肯定するために首を縦に振った。

カチャカチャと音を立てながらナイフとフォークを扱う。確かフランス料理のマナーだといけないことだった気がするけど、生憎こっちは毎日箸を使って食べるという文化に染まってる。

今さらだけど、日常でたとえナイフとフォークを使っていたとしても、ファミレスで、とかで、マナーを習ったことはさっぱりない。

ごめんなさい、と内心思っておきながら、口にすることは言い訳じみてて気が引けた。

「この後のことはレークに頼んである。ネイは心おきなくこいつに迷惑をかけるといい。

昼と夕刻には顔を出す。それまで、この世界について知りたいことを聞き、自分の状況を把握して、俺たちに話してくれ。」

いいか、と聞かれ、大きく頷いた。昨日の私のあり得ない戯言を信じてくれているだけで嬉しい。なのに、それに加えて私を支えようとしてくれてる。

もう、感謝、の一言しか出てこない。

だから。

『…有難う御座います。』

深々と頭を下げた。座っている状態だったから、テーブルに頭が

付くぎりぎりまでだけど。

すぐに頭をあげろ、と言う声がかかり顔をあげると、気難しそうな顔をしているクーンさんと、にっこり微笑んでいるレークさんがいた。

「ネイさんは私の再従兄妹なんですから、親類に感謝の言葉など不要です。さあ、朝食を続けましょう。」

優雅に食事を続ける姿を不躾ながらにじーっと見つめてしまい、クーンさんが私のことを見ているなんて気が付かなかった。

食事が済み、昨日と同じくお茶を飲みながらのんびりとしているとノックの音が部屋に響く。それは返事を待たないまま開いた。

…ここの人たちは礼儀を知らないのか？

なんて思っていると、クーンさんに向かって似たような紺色の制服らしきものを着ている男の人が近づいてくる。片膝を立てて傍らに膝間づくと、用件を述べようと口を開いた。

「宰相殿がお呼びです。」

「用件は？」

「大臣たちが疑問の声を上げているようです。昨日のドラゴンの使用についてと、城を抜け出した件について。

早急に、とのことで、失礼ながらも朝食の時間に参りました。」

「そうか。」

二人のやり取りを顔を見ながら交互に見てしまった。映画のワンシーンみたいでちょっと格好良い。

ボーっとカップを持ちながら見ていると、足元に何かがトンッと当たった。

『……？』

ああ、そうか。あんまり見ていちゃいけないってことね。

私の座っている椅子を軽く小突いたのは、紛れもなく今も優雅にお茶を飲んでいるレークさんだった。

「わかった。すぐに行くと伝えてくれ。」

“はっ”と返事をすると、男の人は私を一瞥してから大股で出て行った。

誰だお前って目は痛かったけど、私の方こそ誰だお前って感じ。招かれざる客かもしれない。私だって不本意に訳も分からず、右も左も何も分からない状態でここにいる。

それでも、客人の部屋だと言うことを忘れて欲しくなかった。

…なんて、お世話になっといて私、勝手だなぁ。

「昼にここへ来るのは難しくなりそうだ。」

ため息と共にカップを置く音。その眉間には皺が寄っていた。難しそうな顔はそれでも画になっている。

けど、そのうち心労で倒れたりしそう。さっきの人の態度とかだと、偉い人みたいだから、板挟みとかにならなきゃいいけど。

立ちあがったクーンさんを見上げると、一瞬だけ表情を緩め、おでこを軽く撫でた。

「その服も髪型もよく似合っている。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見にくる。」

そう言うだけ言うとさっさと行ってしまった。途端に顔が熱くなる。

何その顔、何その台詞！それこそ言い逃げだって。

『〜〜……っ！』

声にもならず悶える。カップのお茶はもう温くなっていた。

「クーン殿があれほどまでに気を許しているのは珍しいですねぇ…ところで、その反応は何なのですか。」

別段気にすることなどないでしょう、と尋ねてくるレークさんの反応こそどうした、って思う！

イケメンは目に入れ過ぎると痛いことがよく分かった。学習して、次からは直視し過ぎないようにしないと！私の心臓が持ちません！

スー、ハー、と深く深呼吸。心を落ちるかせるためにはこれが一番効く。

ようやくそれを止めて目を開くと、レークさんはずっとこっちを見ていたみたいで、不思議そうな顔をしていた。

『すみません。落ち着きました。』

謝罪の言葉を述べると、もう一杯飲むために女中さんに頼んで淹れてもらうと、二人きりになった部屋で面白そうな顔をしながら質問してきた。

「随分と混乱していたようですが、どうかなさったんですか？」

どうもこうもないよ。ってのは説明にならないよね。てゆーか、そこ聞くんですか。

『いやー、男の人に触れられたことなんてなかったものですから、少々混乱してしまいました。』

「ご家族に男性はいらっしゃるでしょう？」

はい、いますとも。

お父さんがいますけど、そんなに関わりないし。

『年齢が近い男性、しかもイケメンなんて、私の周りには未だかつて存在したことなんてありません。

だからどうも緊張してしまって。』

そう言うと、また首を傾げている。どうやらここの人たちとは価値観が違うみたいだ。

「いけめん、とは何ですか？」

…あ、そこですか。イケてるメンズ、なんだけど、めちゃくちゃな日本語は伝わらないってことか。

ってゆうか、今さらだけど何で言葉が伝わってるの？

『クーンさんもレークさんも格好良い、と言えば伝わるでしょうか。うーん、顔が随分と整ってらっしゃるから、じーっと見られると、平凡過ぎる私にしたら心臓に悪いんです。

きっと二人はおモテになるでしょうから、そんなことを思って勝手に緊張している私がいけないんです。慣れてきたらきっと大丈夫ですから、気にしないでください。』

そう一気に言い終わると、一息ついて、お茶を口に含もうとする。けど、猫舌な私はふーふーと息を吹きかけて冷ます破目になっていた。

「“おモテになる”？」

あー、伝わんないんだ。今度からきちんとした言葉に直さなくちゃ。

まだ不思議そうにしているレークさんに“女性に人気で、たくさん言い寄られていそう”な事の意だと伝えると、納得したように頷いていた。

やっぱりモテるんですか。

ところで。

『私、日本語を話しているつもりなんですが、どうして言葉が伝わってるんでしょうか。』

大き過ぎる疑問。さっき、レークさんの口元を見ていたら、明らかに日本語じゃない動き方をしていた。

と、言うことは。

レークさんたちが喋っているのは日本語じゃない。じゃあ、どんな言語を喋っているの?それがどうして私に伝わっているの?疑問は膨らむばかり。

きっとそれはレークさんも一緒。

妖精 - その2 - （後書き）

今夜は徹夜だ！

閑話（前書き）

クーンサイドのお話です。

閑話

レークに言われたことは俄かに信じ難かった。鏡盆に一人の女の子が映し出されたと言うのだ。

これは単なる神話ではなかったのか？

そう疑問に思いつつも、鏡盆を除くことができない俺は、指示に従って動くこととしかできない。

誰も通らないはずのシュラスバンド砂漠に黒髪でおかしな格好をした女の子がいるはずだと言われ、俺はすぐさまに国所有のドラゴンを一匹拝借した。

その所為で今審議に巻き込まれてしまっているのだが。

「宮廷魔法師及び、騎士の一等指揮官でもある貴方であろうと、いかなる理由があってもドラゴンを自由にできるはずはないと思われるのですが？

これは吾輩の判断が間違っているのだろうか。」

…ちっ、狸ジジイめ。

先程からつらつらと告げているものを聞きながし、自分の思考に耽った。

赴いて行った砂漠には本当に不可思議な格好をした女の子が倒れていた。と、言うことは、神話が実現してしまったのだ。

あり得ない。

そう思いながら、倒れている女の子に近寄って声をかけた。

「大丈夫か？」

女であるにもかかわらずズボンを穿いている。まずここがあり得ない。それに加えて素材が分からない袋、明らかに造りがおかしな鞄。

…まさか、本物か？いや、それは少女に聞いてみてからの判断だろう。まずは取り急ぎ運ばなければ。

「大丈夫か？」

もう一度問うと。

『待ちやがれ、アホ神…』

空耳だと信じたい。

耳を疑うような神を冒涜する言葉と、口調。もしかして下級市民か。いや、それにしても格好がおかし過ぎる。

『…んっ、暑……』

本人に聞くしかないのか。そう思いドラゴンに乗せると、急いで都へ戻った。

そこからが大変だったのは無理もない。

ドラゴンを返しに行くと、飼育係に泣きつかれた。俺が責任を持つ、と言い残して、少女に目がいかないように、なるべく勤め、使われていない客室に連れていく。

レークの幼馴染みが女官を務めているのは助かった。世話を頼むと、何食わぬ顔をして常務に戻る。　その時はまだドラゴンのことはバレていなかった。

ルイス派が何か嗅ぎつけたのかもしれないな。あいつは少々厄介だ。

仕事を終え、真っ直ぐに客室へ向かう。いつにもまして終業が遅くなったため、もう目を覚ましているだろうと寝室へ向かうと、その少女は目を閉じたままだった。

…儚げだな。

見てまずそう思った。

抱きあげた時には羽が生えているかのごとく軽く、感触からして

華奢だと分かった。身長もそう高くはない。

きっとまだ成長途中なのだろう。

そう思って不躾にも見つめると、眉間にしわが寄る。

肌は白く透き通っていて、唇は果実を思わすように色合いも良い。

黒髪は艶やかさが際立っていた。

…触ってみたい。

そんな衝動に駆られてから、いくら少女だからと言ってそんなことをしていいはずがないと自分を叱責した。

それからどれだけ時間が立ったのだろうか。じっと見つめていた少女は顔をしかめる。それから小さく声を漏らした。

『んッ…』

その直後に長いまつげに縁取られた目は、少し眠たそうに開いた。

「おい、大丈夫か？」

もう一度声をかける。しかし、よく眠っていたようだし、まだしっかりと頭は働いていないらしい。

しばらくして大きな目をさらに大きく開くと。

『ここ、どこ？』

そう呟いた。その声は掠れていたが、どこか引き込まれてしまうような甘い声。少女にぴったりだと思った。

「ここはデューク王国の城だ。自分の状況は、理解できているか？」

身体を起こし、それから俺をその瞳に移した。ようやくこの場に俺がいることを知ったらしい。だが、俺が言ったことに微塵も反応しない。

もしかして、記憶喪失、とか？砂漠に倒れていたくらいだし、何かあったことは明白だが、まさか、盗賊に襲われて捨てられた、とでも言うのだろうか。

『てゆーか、あなた、誰？』

少し舌っ足らずな言葉使い。しかし不思議と不快には思わなかった。

「ああ、自己紹介がまだだったな。デューク王国の宮廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リッキンデル・シェパードだ。」

せっかくの述べたのに、反応を示さない。俺の顔をじっと見つめているようだ。

…何か付いているのか？

しかし、その魅力的な瞳に見つめられていると、どうも居心地の悪さを感じ、口を開いた。

「おい、大丈夫か？」

まさか、どこか具合の悪いところが？

ぐっと身体を前のめりにして様子を伺おうとすると、顔を赤く染める。

まさか、熱が出たしたのか？と、思ったが。

『だ、大丈夫だす！』

『「……」』

思い切り噛んだようだ。見ず知らずの男がいるわけだし、いつの間にか知らない場所にいた。混乱している上に、きっと緊張してるんだろう。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかったように会話を続けた。こう言うことは気にするべきではない。それに、何事もなかったような顔など、し慣れている。

その様子にホッとしたらしく、今度は間髪開けずに質問に答えてくれた。

『ネイ。サカキバラ・ネイ。』

「サカキバラ・ネイ？どっちが名前なんだ？」

とっさに疑問をこぼしていた。

名前の形式として、どこか不思議な音を持っているそれは、発音

し難い。そして、“サカキバラ”も“ネイ”もどちらも名字にはありそうなものだが、名前としては違和感を持つ。

少女は不思議そうな顔をしながら、考え抜いた挙げ句に答えた。

『ネイ。ネイが私の名前。』

やっとのことでそう言う姿は、真っ直ぐに俺を捉えて離さない。その瞳は澱みなく輝いているように見えた。

思わず笑みがこぼれてしまった。そして、いつになく珍しいことをしてしまったと思い、いつもの表情に戻す。それから質問の続きへと戻った。

「ネイ、自分の状況が理解できるか?」

考えている様子から、全く理解できていないことが伺える。こう言う時は急かしても無駄だろう。

『…今から言うこと、信じてくれますか?

頭がおかしいヤツだと思われることを、きっと今から言います。だけど、真実だから。』

考え抜いたのであろうその言葉に、疑問を持った。

“信じてもらえない”ことを話す?それはきっと勇気がいるのだろう。瞳には涙が集まっていた。

零れさせまいと我慢している姿は抱きしめてやりたい衝動にから

れた。それを何とか引っ込めると。

「…とりあえず聞こう。だから泣くな。」

そう言った。なるべく、感情を見せないように。

もうしばらく耐えるような表情を見せて、それから語り出した。

『ここが何処だかは分かりませんが、さっきまで私、砂漠にいたんです。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。」

別段気にすることもない、普通の話だ。それも真実に則っている。

『でも、その前には日本って国にいたんです。』

“ニホン？”

次に述べたことは、理解できないものだった。ニホン、とはどこかにある土地のことだろうか。今まで耳にしたこともない。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。あそこでジュ…何とかっていう自称神様に出会ったんです。』

分からない単語だらけだ。それにしても。

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

そう本気で心配してしまった。もしくは空想癖のある子なのか？
そうであるならば、管轄外だ。俺の手には負えないのかもしれない。

「話をまとめると、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたらあの砂漠にいた、と。
ニホンに、神様、ねぇ。」

信じがたいことだらけ。それを証明することはできないが、この少女の戸惑いようから言って、嘘をついてるようには思えなかった。

『あ、買い物袋がない…』

小さな呟きに、頭では別のことを考えながらも答える。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。そこに置いてあるぞ。」

すると、すぐさま手を伸ばそうとした。が、まだ力が入らないのか、ベッドから落ちそうになる。

『きゃっ…！』

小さな悲鳴があがる。しかし展開が読めていた俺は、迷うことなく手を伸ばした。

「危ない。」

でも。…こんな展開は予想していなかった。

腕に力を入れて抱きしめたネイは、ふわりとせっけんの香りがする。それに、抱き心地が…非常によかった。

『ご、ごめんなさい。なんか動き難くて。』

焦ったように言葉を紡ぐその姿は愛らしく、もうしばらく腕に納めたいと思ってしまうほどだった。

あり得ない、この俺が。

思考を切り替えようと、話を別へと進める。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えさせたに決まっているだろう？」

この娘が着ていて物は、うちの女中に洗わせることにした。それにしても、二人で首を傾げてしまうほどの変わった衣服は、着ていては異国の者だと気付かれてしまう。

それでも、勝手に洗っておいて返さない訳にはいかないため、乾いたら持ってくるように言っていた。

『あの、これを私に着せたのって…？』

顔はもう真っ赤だ。

俺じゃないかと心配しているのか？

疑われるのは嫌だと言わんばかりにすぐ答える。

「もちろん俺じゃない。流石に早乙女とは言っても女は女だ。そこはきちんと区別しているから気にするな。」

安心した表情をしてくれるかと思ったが、顔をしかめている。何か気に障ること、言ったか？

その答えはすぐに分かった。

閑話 - その2 - （前書き）

クーンサイドが続きます。

閑話 - その2 -

『…私、何歳だと思われてるんですか？』

女性なら本来聞かれたくないことだろう。しかし聞かれては答えるしかない。

「１４くらいだろう？」

思った通りの年齢を述べる。少し強張った顔。やっぱり失礼な事を言ったのかもしれない。

『私、１８です。』

「…すまない。顔つきや身長から言って、まだ成人していないかと思った。」

返ってきた答えに驚いて、すぐに謝った。それにしても、若く見える。

『ここでは何歳で成人ですか？』

あまりにも真剣な表情。それは普段からも若く見られがちな事を気にしている風に見えた。

「１５だ。」

そう言うと少し考えて、年齢を問われる。２４と答えると、上から下までじっと見られて、大きなため息を零した。

と、思ったら。

ぐー。

突然の大音響。彼女はさっきの顔よりももっと赤い顔をしていた。

「食事を運ばせよう。」

ずっと寝ていた所為か、水分も口にしていない。もっと早くに気にするべきだったな。食事の準備をさせるように女中に言いつけ、ネイに目を戻す。

「大丈夫か？」

ベッドに身体をもう一度預ける姿があまりに辛そうなので声をかけると、苦笑いで頷いている。何とか席に付けたようだが、身体は重そうだった。

それからレークが来ると、話をしながら食事を始める。その時にいった言葉は初めて聞いた言葉は俺とレークの心に留まった。

どう意味かを問うと、慈愛に満ちたような表情。それに惹きつけられ、思いがけず不躾にもじっと見つめてしまった。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そんなモノの命を奪って人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になって私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの力を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられるって感謝するのですよ。』

なるほど。

当たり前過ぎて気が付かないことにも感謝を述べている姿は、心を大きく揺さぶったような気がした。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のもののようです。」

面白そうな顔をしているレーク。その間も手を止めないネイの食べっぷりに満足していると、急に手が止まる。

嬉しそうにしているレークは気にしている様子もなく、少し上の空で笑顔を浮かべていた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だったじゃないか。」

腹が鳴るほど空いている様子だった。それを掘り返した所為か、また顔を赤くしている。今日は何回顔を赤くさせたら気が済むのだろうか、と少し微笑ましくなった。

「ネイ？」

何しゃべらないと思ったら、急に立ちあがり、ネイの物らしい荷物の所へ寄って行った。ガサガサと音を立てながら漁っている。

何がしたいのか分からず、見つめることしかできない。

しばらくすると、何かを抱えて戻ってきた。どん、と音を立てながら並べていく。訳の分からない容器に入っているそれらは、変な色をしていた。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

さっきまでは戸惑っていたのに、今は随分と嬉しそうだ。楽しげな笑顔をしながら、俺の質問に答えてくれた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、醤油に味噌です。』

調味料？味を整えるために使うヤツ、か。それにしても、どれも聞いたことない。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなって。』

国の味…ネイの国の味、は随分と気になった。

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会う万能調味料です。』

そう言って、スープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなった液体。それを口に運んで、思わず笑みを浮かべている。口に運んで、何かに満足したように頷いていた。

『…食べてみます？』

それがどんな味なのか、気にならないと言えばうそになる。…でも、まだ名前も知らないはずのレークに先に差し出すのは気に入らない。

しかも自分が使っていた食器を使って、だ。

少々恨めしくなり、横目でにらみ付けるように見届けたあと、自分にも同じように差し出されて満足する。

あまり、このような事に頓着しない性格なのかもしれないな。

差し出されたものを口に入れてみると自然と言葉が零れた。

「「おいしい…」」

変わった味だが、深みがある。今までに食べていたものが、薄く感じられてしまうほどに。

『そうですか。それは良かった。』

いつの間にか食べ終わっていたネイは、俺たちが興味深そうに見ていた調味料をかけてくれた。

今まで俺が食べていたものと味が全く違う。格段に美味くなっていた。これ外国の味だと言うのだろうか？

ネイが食べ終わっていた時の挨拶を言うと、女中を呼んでお茶を頼む。その作業を飽きることなくじっと見つめている姿は微笑ましかった。

一服しつつ一通りの話をしてみると、段々表情を暗くしていく。大分、情報を詰め込み過ぎたのか、少し待って欲しそうだ。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まった。詳しい話はまた明日にでもしよう。ネイ、疲れているようだから、もう寝ろ。」

そう言うと、嬉しそうに笑顔を浮かべている。それに満足した。

…満足？なぜ俺は満足しているんだ？

「そんなっ！情報がなければ私の研究は進まないのですよ？」

歪んだ表情を浮かべるレークに目線だけ向けて諌めると、部屋から追い出した。

強引だと分かりつつも、ついつい行動してしまったことに反省するべきだが、俺としてはレークに謝るつもりはない。

…正直、この時間は俺に欲しい。

「…眠れそうか？」

さっきまで長時間寝ていたはずだ。もし眠れないようなら、話相手にでもなろう。そう覚悟していたのだが。

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

ネイはそう言った。

…何故がっかりしてるのだろうか。

しかし、それをおくびにも出さずに礼を述べた。褒めて欲しいところだ。

「ネイが混乱しているのは分かっていたのに、こちらの事情で長話に付き合ってもらってしまった。礼を言うのはこちらの方だ。有難う。」

…どうして手が出てしまったのだろう。無意識にネイの頭を撫でていた。思っていたよりも細い髪はサラサラして、指通りがいい。

ん？一か所、髪が絡まっているような感触がした。

「ここ、絡まっているな。少し待ってろ。」

近くの化粧台まで言って櫛を持ってきて、ベッドの上に座り、髪を丁寧に梳く。

「…綺麗な髪だな。」

ずっと触れていたい衝動にかられたが、鏡であったばかりの娘にここまで固執しようとしている自分に驚いた。

…きっと、妹みたいだから、だな。うんうん、と頷いて、自己完結する。

もう一度頭を撫でると、おやすみ、と挨拶をして部屋を出た。

「クーン殿っ！聞いておられますかな。」

「…ええ。」

…物思いにふけってしまった。

気が付いたたら血圧が上がったような真っ赤な顔が目の前にあった。赤い顔と言っても、ネイとは全然違う。

向こうを可愛らしいと言うならば、こっちは不愉快になる顔としか言いようがない。

そう言えば、今朝の恰好はよく似合っていた。

シュエランがやって来た時に驚いた様子だったネイには謝るべきだな。あいつも返事の前に扉を開けていたからな。

ネイが俺とシュエランの会話をオロオロ見ていたのは知っていた。交互に見上げているのは小動物を連想させ、大きな黒い瞳に魅了されたのは言うまでもない。

「わかった。すぐに行くと伝えてくれ。」

先にわざと行かせる。途中退場になってしまうため、言いたいことを真っ直ぐに伝える。その時に、

結われている髪を避け、額の辺りを撫でた。

「昼にここへ来るのは難しくなりそうだ。…その服も髪型もよく似合っている。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見にくる。」

我ながら、柄にもない、気障ったらしい事を言ってしまったとは思う。だが、後悔などしていない。

…そもそも、時間が空く可能性があるのだろうか？とりあえず、ジジイにもっと血圧でも上げてもらって、普段の仕事に戻ろう。

「昨日、ドラゴンを使ってレークの再従兄妹を迎えに参りました。その際、賊に絡まれていたらしく、保護を頼まれましたので、若輩者ながら承らせていただきました。」

「どうやって賊に襲われているのを知ったのだ？っ！まさか。まさか、あの方が本当に現れたのか？！」

あほか。そう言いたいのを何とか抑える。

「大体は約束の時間に来ないことで何かがあったに違いないと分かっておりました。嫌な予感がするとのことで駆けつけて行きましたところ、襲われそうになっておりました。

その再従兄妹君には見込みがあるらしく、今回は鏡盆を見せるために招いていました。」

淡々と語る。ここ数年で無表情になることは慣れていた。何気ないことのように語るフリも。

そして言えることは、こんな奴らにはネイを合わせたくない。

実際はレークの再従兄妹と言うだけでも危ないが、異国、いや異世界からやって来た娘などと言っては、神話に沿って崇められてしまう。

そんなことをしたら、ネイは飾られたものとして神殿に軟禁状態になってしまうのが目に見えている。

そんなこと、絶対にさせてはやらん。

「そんなことっ、われわれに黙って行ってよいと思っているのか？！」

あー、うるさい。こんな時間があったら、政の一つに時間を費やした方がいいことを知らないのだろうか。

いや、こいつらにそのような事を考えるような能力はなかった。

呆れたようにため息をつくと、丸投げにもとれる発言をする。後は任せた、と言う意味を込めて。

「今回のことは宰相殿にも知らせてあった故。未来の神官候補として受け入れる前に、その素質を確かめるために黙っておりました。まだうら若き乙女なのです。

今後の幸せを考えると、中途半端な力の所為で人生を棒に振ることもないでしょう。そこの見極めのために、黙っていたことは謝罪いたす。

しかしながら、そのように判断の鈍る若さを持った乙女に揺さぶりをかけようとする輩もいましょうから、黙っておりました。」

ここまで言われては誰も何も言えないだろう。少し厄介な事と言えば、何も知らないはずの宰相殿が巻き込まれていることだ。

そして、笑顔を浮かべていることから大層ご立腹だと分かる。

…とりあえず、避けるとしよう。しかし三日と持つまい。そうなったら腹をくくろう。

そう決意してその場を離れた。

閑話 - その2 - （後書き）

クーンさん、意外と感覚だけで動いてますよね。
次回はまたネイちゃん視点です。

楽しみの時間

もうそろそろやってくる時間。

そう思った次の瞬間、ノックの音が響き渡る。

ほら、キタ。

少し身体を強張らせ、一呼吸置いてから“はい”と返事をすると、扉が開かれた。

「もう風呂は済ませたか？」

それにもはい、と答える。すると、さも当たり前かのように私がいるソファへやってきて、タオルを私の髪へあてた。

これはもう三日も前から始まっている。何で習慣づいてしまったのかはよく分からなかった。

ただ、髪を乾かしてもらうのは気持ちいいから、私は嬉しそうに私の髪を拭うクーンさんに身を任せることが身についてる。

止めた方がいいと思いながらも、どこか緊張感のあるこの時間が、実は何よりも好きだ。

昼間は最近ミリアと一緒にいて、この国について学んでいる。初日こそレーンさんは一日中地球について質問してきたが、あまりに多くの時間は費やせないらしい。

それでも、食事の時は必ずやってきて、子供がおとぎ話をせびるように、いろいろと質問していった。

それに比べてクーンさんとはめったに会えない。たまに食事を一緒に摂るけど、昼間にあったことはなかった。

レークさん曰く、忙しいらしい。

じゃ、神官は忙しくないのか、と聞いたら、今は祀り事がないから忙しくないって言ってた。

その代わり、行事の時には寝る間もないほど忙しいんだって。

で、昼間は忙しいクーンさんがやってくるのは就寝間際になっていた。時間と言っても、正確には分からないんだけど。

この国には、いや、この世界には太陽が６コ、月が６コある。おそらく一日は２４時間で、太陽も月も、一つで二時間を表していた。

朝の６時ほどに太陽が一つ出る。これは朝の６、７時を表す。二時間たつと、光る太陽が一つ増えることになっているのだ。夜はこれが月に変わるだけ。

便利にできているようで、しっかりと把握できるわけではない。しかも法則を知らないでいると、私みたいに卒倒する羽目になるだろう。

そりゃそーさ。あるはずもない太陽が６つもあったんだから。

で、月が三つ上がるころにクーンさんはいつもやってくる。そしてお喋りをしながら、タオルで私の髪を拭ってくれるのだ。

「よし、こんなものだろう。」

乾いた髪に櫛を通すと、満足そうに頷いている。私はいつものことながらお礼を言った。

すると、頭を撫でてくる。

ぐちゃぐちゃになった髪をまた梳くのもクーンさんだった。

…だったら最初からら撫でるのやめればいいのにね。二度手間だって。

そう思っても、どこかで止めて欲しくないって思ってる。結局のところ、クーンさんに甘えきっている自分がいた。

手を取られ、寝室まで連れて行かれる。ベッドに横たわると、布団をかけてくれた。まるで小さい子供に戻ったみたい。

『クーンさん、私、子供じゃないんだから自分で髪を乾かすのも、布団をかけることもできますよ?』

朝も早くから会議だと言っていた。それに帰るのはいつも深夜近く。ちゃんと眠れているのか心配だった。

「…そんなこと言うな。」

え?

絞り出された声はどこか悲痛そうで。弾かれたように起き上がると、ランプの薄明かりの中、しっかりとクーンさんの顔を見ようと努めた。

「俺はレークやミリア程ネイに会える訳じゃないから、夜のこの時間を楽しみにしてるんだ。一日の楽しみを奪わないでくれ。」

それは思いがけず、懇願だった。でも、顔色を伺えば、疲れているのは一目瞭然。目の下にはクマがある。

ってことは、現在進行形で疲れてるってことだよね、うん。

一人で頷いていると、名前を呼ばれ、意識の焦点を横の人に合わせる。

『本当に楽しみなんですか?』

それを切り口に、思っていることが溢れ出した。それはもう、堰を切らせたかのように。

『クーンさんはいつも仕事を終わらせてからすぐに来てくれているみたいですけど、それでこの時間と言うことですよね?ってことは、これからお屋敷に戻るともっと遅くなるはずです。

それなのに、朝は私が起きるよりも早く、城に来ています。そんなに働いてどうするんですか。

他に無能でも政をこなすための人数はいるんじゃないですか?

てゆーか、早朝から深夜まで働くなんて、労働基準法を丸無視してますよね。』

例えば、朝８時くらいのスタートとすると、夜の１０時位まで働いてることになる。ってことは、１４時間勤務?!

ありえない!働き過ぎ!!

どんな世界でも統治するための政治が必要だって分かってる。議員とか、ここの場合だと貴族って類のものの数が多いってことも。

レークさん、言ってた。この世界には貴族階級の人がいるんだって。その階級を持つ家の主が、国の中心である国会に参加して会議をしてるんだって。

そんな中でも、理由は教えてくれなかったけど、クーンさんは大変な立場にいるみたいで、休む暇もないらしい。

気にかけてあげて、って言ってたレークさんの言葉に、私はつい頷いてた。

…思い返してみると、夜にやってくる時も朝にやってくる時も、いつも疲れた顔、してた。もっと早く聞くべきだったのに。

「気にしてくれて有り難いが、いくらネイに言われても俺はこの時間を止めるつもりはない。」

…なに、その断言。そして、無意識ですか?その極上の表情(カオ)は。

最高に格好良く見えるその表情は、私の心臓を鷲掴みにした。き

っと顔も赤いに違いない。

ホント、格好良い人は何しても許されるどころか、むしろ公害に近いくらいに自分に負担が来る。

要するに、目の保養は行き過ぎると毒になるってこと。俯くしかできない私の意思なんて、端から叶うはずもなかった。

それでも譲れないことが一つ。残念ながら、私はその方法なんて微塵も分かりはしないから、直接本人に尋ねるしかない。

『…私がクーンさんにしてあげられることはありませんか？』

何でもいいから、何かできることをしてあげたい。だって、クーンさんは私の命の恩人だもん。あんな砂漠で倒れてる人間を助ける人なんて、いないはずだったのに。

それなのにクーンさんは国軍のドラゴン？を動かしてくれた。

レークさんにこの国のことはたくさん聞いてる。魔法が在って、不思議な生き物がたくさん居て、妖精さえもいる世界。

この世界の最高峰であるこの国のために一番働いてるのはクーンさんなんだって。

クーンさんは私が知っていることを知らないけど、私を助けた時に使ったドラゴンのことで、たくさんの人たちに責められてるみたい。なのに、私は悠々とここで生活して、尚且つクーンさんの負担になってる。

…それが、どうしても許せないの。

「ネイ、有難う。しかし、そこまで気を使うことはない。」

『でもっ…！』

違うんだ、と言ってクーンさんは首を横に振る。それは初めて私の言葉を遮った。

「ネイは俺たちの世界の人間とはものの考え方が違う。価値観が違うんだ。

それは俺に癒しを与えてくれる。今まで当たり前であったことを違うと言うネイは、面白い。俺に直接向かって働き過ぎだと言うヤツに初めて出逢った。」

クシャッとした笑顔は、今までで一番私の心を震わせた。

…ホンモノ、だって思ったの。

数少ないクーンさんの表情。大部分は無表情。その中で、今の笑顔は、間違いなく本物だった。

『私にできることを教えてください。』

譲れない。何かしてあげたい。義務感とかじゃなくで、自分の意志でそう思った。

今の笑顔が毎日、無条件で出るようにしてあげたい。それは、私にできることじゃないかもしれない。

でも、できることかもしれない。

可能性が１％でもあるんなら、私はそれに賭けて、命の恩人にしてあげられる事をしたい。

「では、この時間を、出来る限りずっと俺だけの物にしてくれ。望むのはそれだけだ。」

『そんなの、望むことじゃないでしょ！』

あっ、タメ口きいちゃった。

ごめんなさい、って呟くと、勢いが殺がれて黙る。すると、大きくて重みのある手が私の頭を撫でていた。

「今、ここから一歩も出してあげられないんだ。それを俺は謝らなければいけない。

それに、今は何とか先延ばしにしているが、これからこの国のことにおそらく巻き込んでしまう。今のままのネイでいて欲しいのに、これから起こることはきっとネイの負担になる。」

そう言ったクーンさんは少ししゅんとして見えた。

自分のことを考える暇がないくらい働いてるのに、私のことばっかり心配して！お人好しにもほどがあるよ。

私のことなんかより、もっと自分の事に気を使うべきだ。そこは、

どうしても譲れない。絶対に考えてもらうように、しなくちゃ。

『いつか、絶対クーンさんのお願いを聞いて見せますから！考えて置いてくださいね。』

結局、そんな約束を取り付けることしかできなかった。これが約束できただけいいのかもしれない。

この時の帰り際に言っていた、二、三日したら会いにくる人がいるかもしれないと言うことが現実のものとなるなんて、この時の私は想像もしていなかった。

宰相さま、登場（前書き）

お気に入り登録をして下さった人がいるみたいで。
とてもうれしいです。

これからも頑張りますので、ひとつ気長にお付き合いください。

では、続きをどうぞ。

宰相さま、登場

「それでは、箱のようなものに映像が映し出されるんですね！
でもそれは…」

勘のいい方はお気づきでしょう。私がレークさんに説明しているのは、テレビです。

いやーね、もっと上手く説明するはずだったんだけど、箱って言っちゃったわけですよ。

さらには絵心が最悪なもので、言葉を探すしか伝える方法はない。

『目に見えているものとほぼ同じ映像を映し出せるんです。』

その一言に、おお、と驚きの声を上げて、目を丸くしている。ちょっと、面白いかも。

…ああ！ちょうどナナメ掛けの鞄の中にケータイ入ってたと思う…

そう思って鞄の所へ近寄って行こうとしたら…

「失礼する！」

おう？！

何事かと思ってドアの方を見る。そこにはオロオロしているミリアと、厳格そうなおじさんが立っていた。

『どちら、様でしょう？』

明らかに怒ってらっしゃいますよね？ってくらいの雰囲気を纏っている。初対面なのに、私、このおじさんを怒らせるような事を何かしたんだろうか。

否。…記憶にない。

てゆーか、この部屋から一歩も出てないのに、むしろ迷惑をかけるって言う方が難しい気がする。

困ってレークさんを見てみると、苦笑いを浮かべて肩を落としていた。

…その反応、なに？

何が起こるか分からない状況に戸惑う。そして、どうすることもできなくて、とりあえず身構えてみた。

「宰相殿、ようこそ御出でで。もちろん、このことはクーン殿は知っておられますよね？」

何この空気。現代っ子だから、もちろんそこは読んで黙るけど…

一触即発？

でもなさそーだけど、レークさんの笑顔が胡散臭い、いや、どす

黒い…でもなくて、張り付けた様なものなのは確かだ。

「ヤツにはめられた。」

お気の毒に。

何にはめられたかはよく分からないけど、眉間のしわの深さに、何だか哀れになった。

さっきまで怒ってるみたいな感じだったのに、そうでもなかったのかな。顔つきは元々そんな感じみたいだし、この人もクーンさんと同じく疲れた顔をしている気がした。

「ミリア、あいつを呼んできてくれ。」

かしこまりました、と言うと、当たり前のようにミリアは行ってしまった。

なになに?!今から何が起こるって言うの?

それよりも、あいつでだれか伝わってしまうのがすごいと思った。

一人、訳も分からず立ちつくす。すると、おじさんの目が私を捕えて離そうとしない。

…怖いんですけど。かなり。

苦笑いするしかできなかった。

「貴女がレークの再従兄妹、かな。」

うっへぇ。本気で怖いっす。

けど、ここで委縮する訳にはいかない。クーンさんのマイナスに繋がることだけはしたくない。

『お初にお目にかかります。ネイと申します。』

ゆっくりと丁寧に礼をして見せる。顔を上げた時に部屋にいた四人は驚いているようだった。

ちょうど入ってきたクーンさんとミリアは入口のところで固まっている様子。

どこか変、だった？

一人オロオロとしていると、おじさんは急に笑いだした。ひとしきり笑った後、さっきの顔とは違う柔らかなものを浮かべている。それにちょっとだけ安心した。

それにしても、急に笑い出すなんて、ワライタケでも食べたのかな？

「実に肝の据わった娘だ。・・・気に入った。」

ん？気に入られた・・・って何事？

周りを見渡してみても、どうやら状況が理解できていないのは私だけみたいだ。とりあえずお茶にしましょう、というレークさんの言葉で、この空気は一時保留。

ミリアがお茶を入れて部屋から出ていくまで、椅子にくっついたように留まるしかなかった。

「さて、この馬鹿が丸投げした話の真実を教えてもらおうか。」

おじさんが顎で指したのはクーンさんだった。クーンさんが馬鹿だなんて、そんなこと言ったら私はどうなるんですか?!って、言いたくても言えない。

だって、ここの中で話しを理解できていないのは、私だけみたいだから。

「ネイ、設定を言ってくれるか?」

急に話を振られた私は、中身を溢さないようにカップを置き、三人の顔をしげしげと伺いながら口を開いた。

『私はレークさんの再従兄妹にあたり、一族の中でもレークさんに次ぐほど力があると言われています。

そのために神官見習いの候補生として王都を訪れようとしたところ、賊に襲われそうになってしまい、そこをクーンさんに助けられました。

現在はその休養をとるために、城の一室を借りています。』

早口でそう言うと、大きく息を吸い、同じように大きく吐いた。

間違えてはいないはず。ここ二、三日ずっと確かめられてたこと

だから。

そんな私の様子を見て、おじさんは大きくため息をついた。どうやら、聞きたかったのは、そういうことではないらしい。

「設定などではなく、事実を教えてくれ。」

なるほど。それなら、確かにさっきのでは答えにはなっていない。

ここで口を開くのは私であるべきなんだろうけど、事情を話し始めたのはクーンさんだった。

「ネイは鏡盆に映し出された。」

それだけ言えば分かるのか、妙な沈黙が息苦しい。おじさんは目を見開いたまま私をその瞳の中にとらえていた。

「この方が…」

何処の方よ?

急な態度の変化。それに、崇めるような暑い視線は、かなり居心地が悪い。私は目を逸らすと、カップを手にとり、息を吹きかけて冷ましにかかった。

「ネイは砂漠に倒れていたんだ。それでここまで運んできた。話を聞いていると、予言通り、とでも言おうか。

この娘は価値観がどうも異なっていて面白い。しかし、政に引き込まれていいような子じゃない。純粋な、良い娘なんだ。」

私に注がれているクーンさんの熱い視線には気付かなかった。それ以外の二人は何かしら悟ったみたいだけど。

「しかし、そうもいかんだろう。鏡神祭は一月後に迫っている。それまで見鏡盆が使えないことが知れ渡ったら、ただじゃ済まされない。」

そうだろう、とレークさんに問いかけるから、私はそちらを向く。目があったレークさんの表情は少し困っているようだった。

事実、らしい。確か、前にもそんな話してた気がするけど。

「その通りですが、私はクーン殿に賛成です。この乙女を政には引き込みたくない。大人の汚い世界に巻き込むなんて言語道断です。

ルイス派の人間にとっては格好の獲物となるでしょう。それに、まだ預言者＜最後の乙女＞と決まった訳ではありません。」

…私は動物か？獲物になって狩られるなんて、冗談じゃない。

それにしても最後の乙女ってナニ？

意味のわからない単語に戸惑っている私を置いて、話は進んで行った。

「一月後まで何とか隠しましょう。国王陛下には鏡神祭の後に報告すると言うことして、とりあえず乙女かどうかの判断は明日の日没後にいたしませんか？」

私のことなのに私を省いて話が進んでませんか？

ふとした疑問だが、助けてもらった時点でこの話が始まっているみたいだ。

私は一体何者な訳？ここでは稀有なものとでも言うんだろうか。さっきのこのおじさんの熱い視線の事も気になるし。

もう我慢ならない。分からない事を聞くことにした。

『口を挟んでごめんなさい。だけど、分からないんです。私はこの世界にとってどんな存在なのですか？』

それが分からないことには私の中で話は進まない。理解できないに等しい。

置いてきぼりをくった私は何とか追い付こうと努めた。

「話していなかったな。」

そう言ったクーンさんに目を向けると、少しだけ愁いた目をしている。なにか、大変な事なんだろうか。

「鏡盆には人間が一人だけで映ることはないと言っただろう？」

その問いに大きく頷く。いつか聞いた話だった気がする。

「それに一人きりで映されるのは＜最後の乙女＞と相場が決まっている。

＜最後の乙女＞とは神からのお告げを伝えることができる、預言者のことだ。

そして、最後、と呼ばれるのは、未だかつていなかった預言者のことを指し、最初で最後の乙女の意を示している。」

なんすか、その仰々しい話。私には無関係に思えるんですけど。そんな大それた存在のはずないよ。

今まで日本のどこにでもいる女の子の一人だったんだもん。

ワンピースの裾をギュッと握る。その手に柔らかく乗って来たそれは、クーンさんの物だった。

心配そうな瞳。きっと、相当酷い顔してんだろーなぁ。なんてしみじみと思ってみたり。でも、混乱してるから、そこは許してほしい。

「ネイにとっては巻き込まれたくないものだろうが、この国の神話に記述されていることなんだ。

それに、ネイが一度映ってしまった鏡盆はネイが神殿にいかない限り、使うことはできなくなって、この国の政治に関わってしまう。」

う〜ん。映らないのは困るよね。それにしても、神様を信仰して

るのかぁ。それはちょっと厄介だよね。

宰相さま、登場 - その2 -

『質問、しても良いですか？』

私が知りたいことは山ほどある。

理解できないことだけじゃなくて、私自身が気になることも。その問い掛けに頷いてくれた三人を交互に真っ直ぐ見つめる。

真剣な顔をしてるから、私の顔にも力が入った。

『この国の人たちの多くがその神を信仰してるんですか？信者の敬虔さはどのくらいですか？』

あんまりにも熱狂的だと、嫌でも＜最後の乙女＞とか言うものの立場に立たされそう。それに、もし私がそうでなくても、勝手に理由を付けて祭り上げられそうだもん。

それだけは、何としてでも確実に避けたい。

「国民のほぼ9割が信仰しておる。中には熱狂的な信者もおるな。」

難しい顔をしたおじさん、いや、宰相様がそう言った。

まじ、勘弁。今さらだけど、何としてでも避けたいよね。私、そんな面倒な事からは、回避を希望します。

『…私の居た世界にはいくつかの宗教がありました。でも、私は無宗教です。

いや、多神教って言った方が正しいのかもしれません。私の国の住人はとても自由で、それぞれの宗教に準じた催し事を行うんです。』

こう説明してると、やっぱり日本の文化って面白い。てゆーか、ここまで来ると自由すぎるよね。

「その口ぶりだと、ネイさんは神を信じておられないようですね。」

そうか。神官様から見れば、信じられない人間なのかも、私。

でも、実際問題自分がどう思うかだし、思想はその人の自由だ。

思ってる事なんだし、それを隠して本当のことを述べないでごまかすなんて、おかしい。

私は頭に、不愉快に思ったらすみません、と付けておいてから話し出した。

『私自身は基本的には神様を信じていません。もしかしたらこの世界を創った神様はいるかもしれませんが、縋り付ける神様はいないと思うんです。

だって縋りついて本当に助けてくれる存在がいれば、治らない病気なんて存在しないと思いますから。』

ここまで言っといてなんだが、みんなの視線が痛い。信仰している人から見れば何とも不愉快な話なんだろうけど、単なる小娘の浅はかな考えってことで、勘弁してほしいとこッすね。

『私のいた世界では自分の信仰している宗教を他人に押し付けて、過去にも現在にも争いが起きています。

聖職者がお金を得るために、神に助けてもらえる紙切れが出回った過去があります。

これは人間の我儘で、私腹を肥やす為にやったことで。でも、その行為は神様に結びついてしまうんです。

神様は自分に似せて人間を創ったと言われています。そう考えると、神様がいると信じると、汚い心を持っている人物を想像せざるを得なくなりますから。

それを崇めることはできません。』

ここまで言って、完全に冷めてしまったお茶を飲み干した。

…我ながら捻た考えだよね。自覚はしてるんだけど、どうも自分の考え方は真っ直ぐになってくれない。

「神様のことで争いが起きたと言っていましたが、それは本当に自分の信仰する神を信じているからなのではないですか？」

それって自分の神が一番正しい、って考えなのかな。ある特定の人物からしたらそうかもしれない。

けど、私が言いたいのはそんなことじゃなかった。

『どの神がそこに在るのかを争って戦うことは、敬虔な信者の行いかもしれません。でも、私の中ではその考え方は違うんです。

その神が真に存在するのであれば、そのことで争い合って、自分の所為で人間が死ぬことなんてないと思います。

もしいても確認もできない存在。ならばどうしてその人のために多くの命が奪われるのを黙って見ていられるのでしょうか？』

真っ直ぐレークさんを見つめて言うと、右隣から盛大なため息。宰相様は見た目よりも、本当はもっと若いのかもしれない。私みたいな統制のとれないバカがいるから、心労で髪が白くなったのかも。

…ご苦労様です。

「もしも＜最後の乙女＞ならば、随分と変わった考えだな。」

あ、ため息ついたのはその所為？自分でも変わってるのは自負してるけど、そこは個性ってことにしておいて欲しいね、うん。

『まだそうと決まった訳ではありませんよ。それと、もう一つ申し上げておきますと、私のいた世界では、科学が非常に進んでいます。その結果、人間は猿が進化したものです。

神が造ったと言われる人間が、実は環境に合わせて、時を重ねて優秀になったってことです。

この進化論は、神を崇拝している者たちからすれば、信じられな

いものなのでしょうが、事実、証明されています。』

ゆっくりと立ち上がって、お茶をみんなのカップに注いでいく。自分の席に着くと、またお茶を覚ます為に息を吹きかけた。

「ネイさんは大人しくて柔らかい空気を持っているのに、意外と意思がお強いのですね。」

…褒め言葉として受け取っていいのかな?

だんだんレークさんの笑顔が胡散臭く見えてきた。遠まわしに大人しく従ってろよ、って言われてる気がする。

『私、性悪なんですよ。だから、猫を被るのも得意ですし、人を言い負かすことに何の負い目も感じていませんしね。』

にっこり笑ってそう言うと、宰相様はまた笑いだした。

「これはネイの勝ちだな。ますます気にいった。」

ますます気に入られた?宰相様の判断基準が分かりません。

『私の世界では、一人ひとりの意志が尊重されます。言論の自由だって、思想の自由だってあります。女性に対する差別もありません。

もしかしたら、私のいた今の社会は女性の方が強いのかも。』

おじいちゃんとおばあちゃんを見たってそうだ。かかあ天下が発生してますもん。おじいちゃんってば、完全に尻に敷かれてる。

それよりも、ここから変える方法ってあるのかな。これからどうなっちゃうんでしょう。

ため息を零した直後、ここで急に空気が打って変わって、意気消沈気味にレークさんが話し出した。

「あと一月ほどで鏡神祭なので、興味深いネイさんのお話を聞きに来ることができません。」

あら、せっかくの知り合いに会えなくなるの？そうでなくても三人しか知ってる人いないし、部屋から出られないのに。あ、今日もう一人増えたんだっけ。

がっかりしていると、不思議そうな顔で見られる。何でもないって答えたけどね。

『テレビの話はもうしばらくお預けですね。次は上手く説明できるように整理しておきます。』

手をグーにして力む。脱・説明下手人間！

それにしても。

『これから一カ月も喋る人がいないのかぁ…』

みんながいるのも忘れて独り言ちる。何か役に立てることないかな？いや、ここから出たらいろいろ大変だろうし。

でも、バレない形で自由に歩き回れたら…

！！思いついた！

『クーンさん！』

思い立ったら即行動派の私は、すぐさまクーンさんに飛びつく。
もう、噛み付かんばかりの勢いでまくし立てるように言った。

『女中のお仕事させてください！』

そこにいた三人が固まってしまった。とりあえず、どんな返事が来るかワクワクして待ってると、がっくりとしているお人たち。

どういうこっちゃ？

一人理解できずに首を捻る。それを分かってくれたのか、クーンさんは代表になって話してくれた。

「＜最後の乙女＞かもしれないネイに、そんなことはさせられない。」

なるへそ…なんてこった！

せっかくいい案だと思ったのに、どうやら採用されないらしい。
でも、これができないとなると、本当に一人ぼっちで一カ月過ごすことになっちゃう。

それに、こんなお姫様みたいな生活、心苦しくて仕方ないんだ。

『そこを何とかなりませんか？働かざる者食うべからず、とも言いますし、こんなに何もしない生活なんて、あり得ません。』

私の意見が一理あるのか、三人は顔を見合わせて困っている。

…もうひと押し、だね。さっき提言したように、私の意志は強いんですから！

『もし私が＜最後の乙女＞であってもなくても、これから先、元の世界に戻れる保証はありません。

どう転んでも、いずれは独り立ちするべきですし、こう言う籠の鳥になったようなお嬢様生活なんて、私の性質には合わないです。』

女中の仕事を覚えれば、自分のことは自分でできるようになる。

それに、住む所を探せるし、もしもお給金も貰えれば何もかもこの暮らしに合わせていけるかもしれない。

だから、曲げる訳にはいかないの。

そう思いじっと三人の顔を見つめる。まず降りたのは宰相様だった。

「こう言っていることだし、何せ誰とも会わずに一月もこの部屋から出るな、とは言えんだろう。」

宰相様ったら話が分かるー！

って、抱きつきたい気分だったけど、そんな空気じゃないことは

重々承知。だから、我慢した。

その言葉を聞いてレークさんは。

「仕方ないですね。私が話相手に慣れないのは悔やまれますが。」

そう言った。

すぐさま反応してクーンさんは言葉を遮ったが、二人の重い視線にとうとう陥落。

承知をしてくれた。

宰相さま、登場 - その3 -

「ネイ、条件を付けても良いか？」

そうキタか。どうやら心配症であるらしいクーンさんは、簡単に野放しにはしてくれないみたい。逃げたりしないのに。

でも、条件を飲まずに自由を失ったら嫌だから、顔色を窺いながら小さく頷く。

それにホッとしたような表情を浮かべて話し出した。

「宰相殿か俺のどちらかの専属の女中として働くことだ。」

そうか。いろいろと知らない事だらけだもんね。

妙に納得しながら、了解したことを告げる。でも、話はそれだけじゃ終わってはくれなかった。

「お前の専属でいいじゃないか。ネイ、こいつに働き過ぎだと注意する役目を承ってくれんか？」

やっぱり。他の人から見てもクーンさんは働き過ぎってくらい働いてるんだ…

宰相様はきっとクーンさんのことを心配してるんだね。レークさんだったらこうはいかない。クーンに言いくるめられちゃうだろうから。

『了解いたしました。』

立ちあがって前で緩く手を重ね、綺麗にお辞儀をして見せた。最初の時みたいに、みんなは驚いた顔。

今日はこんな顔見てばっかだなぁ。

なんて一人暢気にそう思った。

「ネイ、お前はどこで覚えてきたんだ?先程もどこぞの令嬢のようだったし、今もその気品さは完全に消えきっていないが、女官のようにお辞儀をして見せた。

不思議でしょうがない。」

そんなこと言われても、記憶にないんだけど。でも、強いて言うなら。

『ドラマとか映画の影響かも…』

この呟きを理解できる人はいなかった。三者三様、さまざまな顔をしている。

「それは、なんだ?」

簡単に説明、できないー!どうやっても無理だよ。私、説明下手だもん。

…う~ん。困ったぞえ。

『先程レークさんには説明しましたが、私のいた国では機械がとても発達しているんです。“テレビ”と言うものがありまして、目に見えているような映像を映し出す機会があります。

レークさんは分かってくれましたが、おそらく鏡盆に映っているものを見る感じだと思うんです。

そのテレビには、たくさんの物が映し出されます。その中の一つがドラマです。ドラマとは、劇場で見られるものを何回かに分けて楽しむものです。

映画とは、それ専用の映し出す写映機を使い、大きな白い布にそれを映して見ます。例えば、ドラマが1時間を一回の物とすると、10回ほど放送して話が完結することと、映画は二時間ほどで一つのお話が完結することに違いがあります。』

たぶん、あってると思うんだけど。

大体の感じで伝えてみたから、かなり内容的には不安になる。

どうも英語は伝わらないみたいだから、スクリーンとか使えなくて困ったけど、これが私の限界です！

…自慢して言うことじゃないけど、さ。

「何となくは理解できた。ネイのいた世界は文化が発展しているようだな。」

優しさに涙が出そう。

クーンさん、明らかに眉間にしわが寄ってて、ちょっとこんがらがってます、って顔してるのに。

『はい、ものすごく。不便な事はありませんし、逆に手が掛からなさ過ぎて人がダメになっている様な気がしますが。』

「まだ便利な事があるんですかッ?!例えばどんなものがあるので…「レーク。」」

有り難い。

流石に急なテンションの高まりがみられるレークさんはここ数日で、あのアホ神くらい厄介だって分かったから。

見兼ねて止めに入ってくれたクーンさんにまた感謝した。

「詳しい話を聞くのは、事が無事に過ぎ去ってからだ。とりあえず、あと一月はネイのことを鏡神祭があるから、とごまかすことはできるだろうが、問題はその後だ。」

…確かに。ひとまずこの状況から脱することができただけいいけど、肝心の問題を後回しにしただけだって気付いた。

「明日の朝はゆっくりしろ。ミリアにすべて任せておくから、何食わぬ顔をして俺の執務室へ来い。」

そう念押しをすると、忙しそうに去って行った。

ですよね。だって、私のいる客室にくるのはいつも夜遅く。きっとそれも一日中、根詰めて働いてから。

なのに余計な事で時間を取っちゃったから、今日はもっと遅くになるんだろうなぁ。倒れなきゃいいけど。

「そう言うことならば、あとはお前たちに任せた。とにかく、もう一度考えることもあるだろうから、また訪れる。

あいつの世話はネイに任せた。頼んだぞ。」

そう言うと、宰相様も足早に去って行った。

みんな忙しい人たちなんだろうね。私なんかに構わなくてもいいのに。って、そんな訳にもいかないか。

どえらい話になってきちゃってるしね。

レークさんもどこかへ行くだろうから、一人でボーっとしてようかなぁ。って思ったのに。レークさんは立ち上がることもせずに、地球のことを聞いて止まない。

忙しいんじゃなかったの、って聞いたら、明日から頑張るからいいんだって。

あんた、それ、職務怠慢ってやつじゃないっすか。しっかり働こうよ。…私が言えたことじゃないけど。

夕食を一緒に摂り、それが終わってもレークさんは興味があることをひたすらに聞いて行った。

クーンさんが来た時にはぐったりしてたのは無理もない。

「…疲れたのか？」

それはクーンさんじゃない。顔色だって悪いのに、私の心配してる場合じゃないよ。

『夕ご飯は食べましたか？』

少し、と返ってきた答えに不安になる。それに、やっぱり働き過ぎだって思った。

私、確実に負担になってる。明日から、しっかり働いて、クーンさんに少しでも楽してもらわなくちゃ。一人でガッツポーズをする。

髪を拭いてくれているクーンさんには見られずに済んだ。

『あんまり、無理しないで下さいね。クーンさんが倒れちゃったら、心配になって私が倒れちゃいますから。』

真剣にそう言ったのに、なんだそれ、と呟いて喉の辺りで小さく笑われた。今日はいつもよりも遅い時間に来たから、本当に申し訳ないと思ってる。

だから心配したのに。なんで笑われたんだろう。いや、もしかしたら私が何か言葉を間違えたのかもしれない。

「ネイが倒れたら誰が倒れた俺の世話をするんだ？明日から俺の専属になるんだろう。」

あ、そっか。主の世話もせずに隣で倒れてるなんて、女中失格じゃん。…私、ホント馬鹿。

いや、でも、それくらい心配してるんだって、いい方向にも取れるよ。ね？とか、誰に言う訳でもなく、話を振って見たり。

『お願いですから、ご自愛ください。』

女中さんっぽく言ってみたけど、やっぱり映画とかドラマとかの真似でしかない。ミリアに聞いて、しっかり勉強しなくちゃ。

一人物思いに耽っていて、クーンさんの表情が硬くなったのには気付かなかった。

「ネイ、みんなの前ではそうして入ればいいが、俺の前では普段通りにしていて欲しい。」

でも、と口を開こうとすると、すぐに遮られる。

「そっちの方が俺の気が休まる。」

ずっと人に敬語を使われてたりとかするから嫌なのかな？クーンさんがそう言うなら、そうしよう。

了解を伝えると、髪はもう乾いていた。今度は櫛を通してくれる。その時にも話は続いた。

『…どこか、借りられる部屋を探さないと。』

「なに？」

うひょ！低い声が耳元でした。

ゾクッとさせるような響きは、何とも言えない艶やかさを持っている。なのに、どこか怖かった。

『いや、だから、えっと…』

目力強いから、余計に怖い。

イケメンは流石に迫力ありますね。って、今は顔見えてないけど。でも、顔も体格も体型も良いんだもん。もちろん声だって、極上だ。

『女中が城の客室にいるのもおかしいですし、どうなるにしろ、一人立ちしなければいけませんから。』

それもそうだな、と悩ましい声。それでも手は止まらなかった。

「女中の間はここにいるのは、確かにおかしいな。一月はここにいることは難しい…そうか。ならば、俺の家に来い。

そうすれば夜のこの時間もなくならずに済むからな。」

…なぜそうなる？！

急な話の展開についていけなかった。

確かに行くあてはないけど、どこか仲介とかで紹介してもらって、暮らすって形にならないの？

なんていう間もなく、意気揚々とクーンさんは帰って行ってしまった。

なんてこった…

専属女中（メイド）、出動

「ネイ様、おはようございます！」

『おはよー…・・』

昨日のことが気になってあんまり眠れなかった。顔、最悪だと思う。

「あら、眠れなかったんですか？」

やっぱり…

『顔、そんなに酷い？』

そう聞くと。

「ええ。」

なんて、すぐに返事が来て凹んだ。

自分で聞いておいてなんだけど、ちょっと包み隠して欲しかったぜ。とか強く思いながらも、脱力した。

「早く顔を洗って来て下さい。きっと目が覚めますから。」

返事をすると、バスルームに向かった。水で軽く顔を洗い、顔を拭う。

鏡に映った顔は…

『お化け…？』

そんな残念過ぎる私は歯を磨いて、ミリアがいるであろう寝室へ向かった。

「あ、目は覚めましたか？お召し物の準備はできてますよ。」

そう言ってベットの上に広げてあったのは、簡単に言えばメイド服。

『フリフリ…』

まじで勘弁してほしい。

「お城の女中服は可愛らしいですから、きっとネイ様に似合いますよ。」

うん。…嬉しくないけどね。

それに、こんなに長い裾って…ありえないっしょ。

『ミリアの服の方が可愛いと思う。』

そんなちっちゃな呟きはミリアに届くはずもなく。さっさと着ろと目線で催促され、のろのろと着てみた。

「よくお似合いですわ！」

うそだ！キモいだけだって！！

『ミリア、これいじっちゃダメ？』

眉だけを綺麗に動かして見せるその様は、訝しげな様子をそのまま表していた。換えはありますけど、という言葉を聞いて、ハサミを貸してもらう。

生き生きと刃先を鳴らすと、ちょっとだけ引かれた。

「もしかして…」

そのとーり！ふふふ。楽しませていただきまっす☆

息を大きく吸うと、刃を動かした。

『ミリア、ペチコートある？』

そう言うと、少し興味が出てきたのか、渡してくれる。それを付けると、スカートよりも少し短めに切って、軽く縫いつけた。

『編上げのブーツ、履いてもいい？』

こっちの世界に来てから、お願いして茶色の編上げのブーツを履かせてもらって言った。でも、こっちの女の子はブーツは履かないらしい。勿体ないよね、可愛いのに。

流石に髪はまとめて、化粧をしてもらう。

完成です！

「いい。すごくいいです！」

そう褒められて私の鼻は高くなる。

スカートは足首まであってウザったかったから、膝が見えるか隠れるかの所まで切った。そして編上げブーツ。肌がたくさん見えるのはダメらしいから、ちょっと緩めの靴下をはいて、極力見せないようにした。

ゴスロリに近くなったけど、足首まであるよりマシ。これで大分動きやすくなった。

「可愛らしいですけど、きっと上の方々が見たら憤慨なさるわね。」

『別に怒られてもいーよ。自分がいた国とは文化が違うんだって言えばいいんだから。

あ、でも、そうするとクーンさんに迷惑かけちゃうかなぁ。』

そこが一番のポイントだよね。

でも、この世界の服は本当にあり得ない。動きやすさなんて皆無。確かに地球の衣服の文化は露出が激し過ぎるかもしれないけど、ここはいくらなんでも布が多過ぎだ。

私だって足を出したがらない女子高生だったけど、流石に膝は出てたもん。ま、ここじゃそれを配慮して膝も出てないんだけどね。

これでも譲歩した方だって。それに、何だったらパンツ履いて仕事したっていい。いい加減、ジーパン履きたいんだよね…

ズボンは男の人しか履いちゃいけないらしいから、当分はムリだろう。

「あら、こんな時間！ネイ様、クーン魔道師の所へ急ぎましょう。」

そう言われて、少し戸惑った。カスタム女中（メイド）服のままだったから。

でも、面倒だからいっか。

なんて、ミリアが忘れてるみたいだから、しめたもんだと思って、黙って着いて行った。

「クーン魔道師様、ネイ様をお連れしました。」

ほー…・でかい部屋。

ノックをして開いた先には机が一つ。それしかなかった。

そこに着いて仕事をしている様子のクーンさんは、切りがいいところまで行くと顔を上げる。

それからちょっと驚いた顔をした。それに気づいたミリアははっとして私を見る。それからやっちまったって顔をしていて面白かった。

…睨まれたからすぐに止めたけどね。

「随分といじったようだな。」

はい、申し訳ありません。とか謝って見たり。でも、実際は口だけで、反省なんてしてないけど。てゆーか、部屋にいた時だってこれくらいの丈だったし、誰にも文句は言われなかったもん。

気にするほどじゃないと思うんだけど…

『これ、そんなに変ですか？』

裾をちょっと上にあげてそう聞くと、目のやり場に困るから下ろせ、と言われる始末。今さらだけど、ここの文化とは合わない気がする。

「似合っている。まぁ、それでもいいだろう。」

助かった。長い丈だと転んじゃうだろうしね。怪我だけは勘弁ってなことで。

「仕事の仕方はミリアに聞けば大抵わかるだろう。それに、俺はあまり世話が掛からないだろうから、そこに居てくれるだけでいい。」

それだけ言われると、私はミリアに続いて部屋を後にした。

城は迷路みたいになっている。しっかり暗記しないとまずい。道を覚えがてらに、それじゃ私の意味がないんじゃない、ってミリアに聞いたら、それだけで十分すぎるんだって言われた。

「これは私から話せることじゃありません。しかしながら、宰相様に少しは言われたでしょう？

クーン魔道師はこの城では厄介な立場に居ます。仕事をし過ぎないようにネイ様が注意して下さるだけで十分ですよ。」

なるほど。みんなクーンさんが働き過ぎだって思ってる訳ね。

ワーカホリック？いや、働いてないと落ち着かない訳でもなさそうだし。何か理由があるんだろうねぇ。

話してもらえない限り、私には理解できない。早く話して欲しいなんて思っていると、女中部屋に着いた。

ミリアはここで着替えているらしい。ここから、調理場や洗濯場など、城内を案内してもらった。

それにしても広すぎ…

ミリアはもう慣れたって言ってたけど、私は当分無理そうだ。たいていの所を案内してもらって部屋に戻ると、第一城人発見。

一瞬ぎょっとした表情をされて、言わんことがよく分かった。

あ、やば。

どう考えても視線は私のスカート。早速怒られると思ったら、おばさんは豪快に笑い出した。

「あんた、クーン魔道師様に聞いた通りの子だねぇ。」

クーンさん、何か余計な事言った?!自己紹介でもしますかね。

恐る恐る口を開いた。

『お初にお目にかかります。クーン魔道師様の専属女中となりました、ネイと申します。

以後お見知りおきを。』

昨日のように手を軽く前で組み、丁寧にお辞儀をしてみると、今度は目を丸くしていた。忙しい人だ。

「奇抜な格好をしてると思ったら、教養があるみたいだねぇ。」

あ、そこですか。大概の人に教養があることを驚かれるのはどうしてだろう。やっぱり幼く見えるのかな?

「私は女官長のマーサ・マキンズ。たいていのことは私が管理している。それにしてもその格好は?」

早速キタ。やっぱり言わなくちゃダメだよねー。

『私のいた国では、足首までスカートがあることは滅多にありません。それに、あれだけ長い丈だと、転んでしまいそうだったので。』

すみません、と頭を下げると、また笑い声が聞こえた。

「あんまり気にすることはないさ。でも、ここの連中にはそれをあまり良くないと思うものもいるだろう。それでなくても、“あの”クーン魔道師の専属なんだから、目をつけられるかもしれない。

怪我をしないように気をつけな。」

そろそろきな臭くなってきた。そんなにクーンさんは大変な人なのかな。

「まぁ、その格好をしていると逆にクーン魔道師の専属だと分かって、そこら辺のお偉いさんに小間使いにされずに済むだろう。」

豪快なおばさんと、いや、マーサ女官長と握手をすると、ミリアと一緒に厨房へ向かった。

専属女中（メイド）、出動 - その2 -

「ここで、お茶の準備をします。何度かお茶を淹れてるのは見ましたが、正しい入れ方をお教えしますね。」

残念な事に、私は言われてすぐに覚えられるたちじゃない。だからエプロンのポケットからメモ帳とボールペンを出す。

その二つに不思議そうな眼を向けてきたけど、質問されなかったからあえて答えなかった。

「おっ、新人さんかい？」

陽気な声。明るくおはよう、と声をかけられ、私はさっきと同様に丁寧に挨拶をした。

「ははは。俺にそんなに畏まることはない。お、お譲ちゃん、随分と軽そうな格好じゃねーか。」

はい、キター。本日二回目の服装チェック。

『本日よりクーン魔道師様にお仕えいたします、ネイと申します。

この格好は動きやすさを重視いたしました。私は人よりどんくさいらしく、長いスカートだと、上手く動けないのです。これは転ばないための配慮ですので、どうかご勘弁を。』

「…ミリア、この方はどこぞのお譲さんかい？」

おっと。何か間違えた？

不安になってミリアを見ると、しょうがない、と言った様子でため息をついた。呆れられたみたいでちょっと悲しい。

「いえ、新人さんですから、きっと緊張してるんです。」

あ、なるほど。わかったぞ！さっきのはお偉いさん方に使う言葉。ここでは少しだけ丁寧に喋ればいいってわけね。

「そーか、そーか。そんなに緊張することはない。

ここは気取ってる調理場のヤツらじゃないから、安心して何でも聞けばいいさ。

俺はミハエル・ユース。みんなにはエルって呼ばれてんだ。ここでコックをしてるから、昼食なんかは注文してくれていいぞ。」

あら、良い人そうで安心。気取った人だったらどうしようかと思った。

さっきのマーサ女官長といい、エルさんといい、優しい人が多そう。なんか、こういうのってたいていは新人が虐められたりハブられたりするのがオオドウじゃない？

あ、ドラマとか本の読み過ぎか。

私はよろしくお願いします、と言うと、ミリアに連れられてクーンさんのお部屋に戻った。

ら。大変な事になってましたよ。

クーンさんが夜中まで仕事してる理由が分かった。

部屋見戻ってみたら、書類の山、山、山！

さっきまで平穏だったのに、びっくりするくらい人が出入りしてる。

部屋が広い理由はここにアリってか。

「驚くのはまだ早いです。こんなのはまだマシな方なんですよ。」

ウソっ。こんなの、仕事って量じゃない。もはや、うーん、そう！簡単に言っちゃえば戦争に近い。

クーンさん、必死に書類の山と戦ってるから。

『クーンさんってドM？』

「なんです、それ？」

『マゾってこと。苦痛を喜びに感じる人のこと。』

二人で部屋の隅に立ちながら立ち話。

クーンさんが働いてる時に何やってんだってお叱りの言葉を得るかもしれないけど、生憎人がせわしなく動いてるせいで、ミリアは

もうしばらく仕事に行けそうになかった。

「もしそうなら、気持ち悪いですね。でも、仕事に関してはそう言えるかもしれません。

日常はどちらかと言うと違うようですけど…闘い方で言えば、守るよりも攻めるほうが得意だとお聞きしました。」

『Sってことか…』

今度は不思議そうにSの意味を聞かれて、私は丁寧に説明した。

「ネイ様のお国は不思議な事や物、文化がありますね。ここまで知らない事だらけだと、むしろ面白いです。」

そう、なのかな。まあ、確かにここの文化は驚くことが多い。それに不便なことだらけだし。

今のところ、電気がないのが一番痛いとこだよね。エジソンは偉い人だよ、ホント。

「では、私は仕事に戻ります。お昼時になりましたらお迎えに上がりますね。」

丁寧に礼をして、出て行ってしまった。一段落した部屋は静かで、書類を捲る音と、ペンの音だけが響く。

こりゃ、話しかけられない。

「ネイ。」

うおー。クーンさんの方から話しかけてきた。

何でしょう、と言うと、手は休まず、顔を上げないまま言葉を続ける。

「同じ職場の人間にはもう会ったか？」

こんな時まで私のことなんか気にして。ものすごい仕事の量なのに…

『はい、マーサ女官長とエルさんとは会話を交わしました。お二人ともとてもいい人です。』

「そうか。あの二人に気に入られたのなら大丈夫だな。」

そうなのか？いや、クーンさんが言うならそうなんだろう。あの二人はどう見てもリーダー気質だったし。

『あの、クーンさん。余計なことかもしれませんが、これ、手伝えませんか？』

国家の機密書類だとかだとまずいと思うけど、そうでなければ何か手があるかもしれない。

『さっき行き来している人たちの話が聞こえていたんですが、ここには省がたくさんあるみたいなのに、書類は皆さんバラバラに置いて行かれました。

それを分類するくらいなら手伝えると思うんです。』

そう、さっき実はちょっとイラッとした。だって、どこの省の誰かは名乗るのに、どうしてそのまま書類を重ねてくんだって。誰がどう考えても、効率的じゃない。

「…ネイがやることじゃない。」

その突き放された冷たい口調。こんな重苦しい空気を纏っているクーンさん、初めて見た。
怖い。

けど、私の心配ばっかりしてる人には言われたくない。

『私はクーンさんが私を心配してくれるように、クーンさんのことを心配してるんです。どうか、ほんのちょっとしか手伝えませんが、やらせて下さい。』

お願いします、と付け加えて頭を下げる。必死の懇願だった。

「ネイ、その“お願い”はずるい。」

苦虫をかみつぶしたような顔。どこかずるかったらしい。よく分かんないけど。

『じゃあ、手伝わせてくれるんですね?』

そう言うと、小さく渋々と言った感じだけど、了解の返事が戻ってきた。

やったー、と喜んで置いてから疑問が一つ。

私、こっちの字読めるのかな？って、かなり根本的な事を今さら！アホ過ぎる…

恐る恐るゆっくり書類を手にしてみると。

『あれ？』

私の呟きにどうした、と心配そうな声がした。

『読める…』

書いてある字は明らかに日本語じゃないのに、普通に読めた。疑問だらけ。言葉も分かるし、字も読める。違う世界に居るはずなのに、こんなのってアリ？

「大丈夫か？」

そう聞かれて現在に帰ってきた。

呆けてる場合じゃない！少しでもクーンさんの仕事の負担がなくなるように手伝わなくちゃ。

うし！両頬を叩いて気合を入れる。

それから女中部屋に戻った。

ちなみに、廊下は一切走ってません。このスカートの丈でさえ怪

しげな顔されるのに、走って置いてお転婆だと思われたらなお悪い印象しか与えかねないもん。

でも、最後の方は早足になって、女中部屋に飛び込んだ。

お目当ての人がいて安心。すぐに声をかけた。

『マーサ女官長様。』

「マーサでいいよ、ネイ。どうしたんだい？」

飛び込んできた私に驚きながらも、普通に対応してくれた。流石、大人！

『少し大きめの机をお借りしたいのですが、どこかに宛はありますか？』

クーンさんの机に積み重ねてある書類を整理するためだと話すと、着いて来るように言われ、また城の中を歩く羽目になった。

やっぱり覚えられそうもない…

専属女中（メイド）、出動 - その3 -

「久しいね、リュクス。」

着いたのはお城のすぐ近いところにあるスポーツの練習場みたいなところ。でも、そこで繰り広げられていたのはもちろん陸上競技なんかじゃなくて、見るも見事な剣技だった。

「あれ、マーサさんじゃないですか。どうしたんです？」

どうやら二人は知り合いらしい。赤毛の青年はそばかすのある頬を上げ、無邪気に笑っていた。

随分と爽やかそうな人。私はじっと見つめてしまった。

「あれ、後ろの人は…初めて見る顔だね。」

私の視線が熱過ぎたのか、話題に上がってしまった。早いとこ戻りたいのにぃ～。

「この娘は今日からクーン魔道師の専属の女中になったんだ。ネイだよ。ネイ、こっちは騎士団第二軍長官のリュクス。クーン魔道師の部下さ。」

ほー。若いのに立場的には高い所にいる人なんだ。さすが、こう

いう仕事だと実力主義なんだね。

『初めまして。』

そう言うとにこやかな挨拶の返答。それからお約束になった私の格好の説明を終えて、机の件に話は移った。

「と言う訳で、クーン魔道師の部屋に運んで欲しいんだよ。お願いできるかい？」

マーサさんの話を聞いたリュクスさんは、嫌がるどころか目をものすごい勢いで輝かせた。

…犬？

耳と盛大に振られてる尻尾が見えた気がして目を擦ってみると、そこにそれは存在してなかった。

でも、なんかリュクスさんって犬っぽいなぁ。

「お任せ下さい！そんなお願いならいつでも聞きますよ。」

誰かの名前を呼ぶと、リュクスさんはその人に事を説明する。その人もやっぱり嬉しそうにしていた。

クーンさん、みんなに人気なのかな。イケメンは男女問わず人気が高い、って心のノートにメモっておいた。

場面は変わりまして、現在は私はお城の廊下を、机を運んでくれている騎士団の方と歩いております。二人は人懐っこいらしく、奇抜な私も簡単に打ち解けていた。

クーンさんは騎士団の長官だって聞いてたのに、言われるまで記憶の奥底に仕舞ってあったみたい。完全に忘れてた。

「クーン魔道師は俺たちの中じゃ人気が高いんだよ。年寄りのお偉い方には嫌われているが、貴族の娘たちの間でも人気が高いな。」

ああ、それは言われなくても分かる。

『あの容姿ですから、若い娘たちは放っておかないでしょうね。』

きっとアイドル状態。顔、スタイル、完璧。てゆーか、何頭身ですか？足、長いよねぇ。

私は…うん、見なかったことにしよーかな。

残念過ぎる私の容姿の説明はパスと行きますよ。

「おや、ネイは興味ないのかい？」

からかいを含んでるその瞳には、わざと空気を読まずに一刀両断。

私はそう言うことには関与しないで、傍らで話を聞いてる役が性に合ってるし。

『私、クーン魔道師さまに命を助けていただいたんです。ですから、その恩を返すために誠心誠意お世話させて頂くまでですよ。』

笑顔でそう言うと、そう言う意味じゃないんだけどなぁ、なんて呟きが聞こえた。

わざとですよ、わざと。からかいに対することを言わなかっただけで、さっきのは私の本心だしね。

それ以外は何も口を開きません！

「それにしても、クーン魔道師にお目にかかれるのはいつ振りかな。」

名前を聞き逃した騎士さんは熱っぽくそう言った。本当にクーンさんのことを慕ってるんだって感じる。

それにしても、会うの久しぶりなんだ。あんだけデスクワークしてれば当たり前っちゃ、当たり前か。

「今の地位に就いてからは練習場にいらしてないんだ。ネイは見たことないかもしれないけど、魔術だけでなく、あのお方の剣は迫力があるんだよ。」

ほー。それは一度お目にかかりたい。

現代の地球じゃ本物の剣なんて闘う道具じゃないだろうし、日本

で持ってたら銃刀法違反で即逮捕だもんね。

『一度でいいから見てみたいです。』

きっとあの格好良さが引き立っちゃうんだろーなぁ。目の保養を通り越して、毒になるはず。その時には卒倒しないように気をつけなきゃ。

「俺は一度もあの人に勝ったことがないから、久しぶりに是非手合わせ願いたいなぁ。」

リュクスさんの目は、さっきとは違う輝きを持っていた。何て言うか、ギラギラしてる。

勝ちたいって思ってるのか、闘いに飢えているのか。どっちにしろ、今の私にはまだ非現実的な話だ。

…およよ?また人が出入りしてるみたい。

朝ほどではないけど、何人もの人が書類を抱えてクーンさんのお部屋に入って行く。出てくる人はみんな何も持っていなかった。

ってことは、全部あの部屋に収まってるのか。

…量、多過ぎませんか?いくらなんでも仕事量がありすぎ。あんなことずっとやってたら、クーンさんそろそろ倒れるよ。

「中に運び入れるのか?」

縦にゆっくり頷く。すると、ちょっとどいてろ、と言われ、机を

そこに置いた。

「サイモン、中の調度いい所にこの魔法陣を置いてきてくれ。」

サイモンさんって言うんだね。

ここで名前をようやく知ることができた人、サイモンさんは、リュクスさんが持っていた紙を持って中へ入って行った。

詳しいことは後でクーンさんに聞こう。魔法なんて空想上の物が実在してるだけで興味津々。だけど、ここでは当たり前らしいから、変な反応を見せたら疑問に思われる可能性大。

置いて来ました、と帰って来たサイモンさんが言うと、お礼を述べてからリュクスさんは右手を横えた。

どんな方法を使うのかと思うと。

「≪転送≫」

そう言ったと同時に指を鳴らした。

案外シンプル。なんちゃらかんちゃら、呪文みたいなものは掛けないみたい。少しだけ夢が削がれた気がした。

ほら、杖を使う、とか。長い呪文を唱える、とか。

某ファンタジー映画、みたいなのをイメージしてたから、ちょっと残念だった。

でも、やっぱり驚く。目の前に合ったはずの机とその上に乗せられた魔法陣の紙は、あったはずの私の目の前からごく自然に風景に馴染んで消えていくかのようにスッと見えなくなったから。

『リュクス様も魔道師だったのですね。』

本当、ありえない世界だよ。とんだファンタジーだらけの所に来ちゃってたみたい。

「様付けなんてするなよ。柄に合わない。」

あらら、照れてる？

リュクスさんの顔はその髪ほどではないけど、赤くなっていた。照れてるかどうかを尋ねると、照れてない、何て頑固な返事。そんなの肯定してるもんだよ。

面白い人はっけーん！

私から逃げるかのようにクーンさんに挨拶に行くと告げると足早に部屋に入り込んで行った。慌ててその後を追う。

私とリュクスさんが廊下で立ち話をしている間に一段落ついたのか、人通りはまた途絶えていた。

中に入るとサイモンさんがもうクーンさんと話している。本当に久々だったみたいで、少し分かりにくいけど、クーンさんは喜んでるみたいだった。

「クーンさん！」

あ、犬が飛びついて行った。やっぱり全力で振られる尻尾が見える。

ホント、懐いて…いや、慕ってるんだねぇ。

「ネイ、机を運んできたのか？」

はい、と返事をして、お茶のワゴンに近づく。手を動かす前に謝罪を入れた。

『勝手な事だとは思いましたが、このままではこちらが書類で溢れてしまうと思いましたので。

しかし、これからはクーン魔道師さまにお伺いを立ててからにいたします。』

丁寧に礼。それからお茶を淹れはじめた。

さっきの手順を思い出す。ミリアに言われた通りに、ミリアに言われた通りに…　心の中で何度もそう呟いて、お湯を注ぎ、蒸らし時間を計るために砂時計をひっくり返した。

本当に女中だったんだ、なんて呟いてリュクスさんの言葉は聞こえなかったフリをしときましたよ。

温めたカップを三つ用意して、砂時計の中の砂が完全に落ち切ったタイミングを見計らってお茶を注ぐ。それが終わるとトレーにそれを乗せて、丁寧に三人の所まで持っていった。

うん、置くところがない。

当たり前だけど、クーンさんの机の上は書類だらけ。

こんなにすぐに役立つとは、ね。

私は運んで来たばかりの机の上にカップを三つ並べた。有難う、と言われると嬉しくて笑顔が零れる。

『初めて淹れたので、味の保証はできませんが、どうぞお飲み下さいませ。』

「ネイも一緒に飲もう。」

味の感想を待っていると、クーンさんは唐突にそう言った。

いや、それはいかんでしょうが！

『私はクーン魔道師さまの女中なのですから、それは困ります。』

初仕事のウキウキはどこへやら。

リュクスさんたちの目の前でなんつーことを抜かしてんの！

うろたえる私、主張を揺るがさないクーンさん。二人のやり取りを二人は目を丸くして見ていた。のにも拘らず。

「“魔道師さま”なんて呼び方は外だけでいい。少なくとも俺に直接そう言うのはやめてくれ。」

もー！！！無理難題ばっか、押し付けないでよ。ってか、そこの二人、助けてー。

なんて手を伸ばそうとしたら、クーンさんの妨げによってそれは達成されなかった。

専属女中（メイド）、出動‐その４‐

「クーンさんとネイはそういう関係なのか？」

リュクスさんっ、訳の分からん事言うな！てゆーか、クーンさんは否定くらいして！

「ネイは賊に襲われていたところを俺が助けたからと、身の回りの世話をすると言って聞かないんだ。」

何それ～。半分以上嘘じゃないですか！

とは言えず。私はぐっと押し黙った。

「確かに身のこなしは貴族令嬢のそれですね。もしかして、そうなのですか？」

サイモンさん、話を膨らませないで。そして、そうか私に弁解の余地を！

「それは…」

クーンさんはここで黙って私を見る。その所為で視線は私に集まった。ひじょーに居心地が悪い。

「ネイ、そうなのか？」

リュクスさん、そんなの知ったこっちゃないですよ。大体から言って全部初耳だし。

言葉に困って黙ったままの私。こんな微妙な空気の中、口を開く勇気なんて無い、って思ったのは四人中三人。

空気なんてお構いなしに口を開いたのは、さっきまで見えてた尻尾（比喩）を下しているリュクスさんだった。

「まさか、賊に襲われたのが原因で記憶を失ったのか…?！」

急な展開に耳を疑う。眉を顰めて。

『…はい?』

なんていった所為で勘違いはさらに続いてしまった。

私のおバカー！

「悪かったな。思い出せないのに無理に聞き出そうとして。」

泣いた！なんてこった。大の男が泣いてますよ。

『あの…「いいんだ！」

はひ?今ので伝わったはず…

「何も言わなくていいんだよ。」

…ないよね～。

『リュクスさん、何か勘違いしてるんじゃ…』

ガシッと肩を掴まれて言葉を遮られる。思わず飛び上がったのは無理もなかった。

「辛いことが分からない状況下にいるんだな。クーンさん、俺、ネイみたいな娘を増やさないためにも鍛錬を行い、見回りをしてきますっ！」

……

行っちゃったよ。

私の手と口はリュクスさんを止めようしたところで固まっていた。

「ネイ、何かあればいつでも相談に乗る。では、私もこれで失礼します。」

サイモンさんは礼儀正しく挨拶すると、やっぱり勘違いしたまま行ってしまった。

伸ばしていた手を空中から力無く下ろす。

それから、さっきから聞こえてくる、聞き慣れたクーンさんの喉

の奥で笑う小さな声がする方を睨みつけた。

『…クーンさん、遊びましたね？』

笑ったところでそれは確定してた。大体、意味深に黙りこくった時点で可笑しいとは思ってたんだよね。

「…すまない。あいつらと会うのは久しぶりだったから、つい懐かしくなってな。」

貴方はいつもそんなことして部下をからかってたんですか！私なんていい餌にされちゃいましたよ。

「リュクスの勘違い癖は治らないみたいだな。」

そう言ってまた笑った。

『リュクスさん、いつもあんな感じなんですね…』

こんなこと言ったらダメだろうけど、会う度に疲れそう。それにしても、この世界に来てから、必ずって言っていいほど最初は話を聞いてくれない人が多い。

「驚いただろう？少し前までは毎日会っていたから何とも思わなかったが、久しぶりに見ると面白かったよ。」

明るい微笑みを浮かべたかと思いきや、いきなり陰った。それが何だか自嘲気味な笑顔に見える。

『クーンさん？』

顔を覗き込むと、また笑顔を作ろうとしてる。私は咄嗟にそんなの嫌だって思って、やめてください、と口にした。

『無理に笑わないで。そっちの方が見てて不安だよ。

私、クーンさんの手伝い頑張るから！協力し合えばきっとリュクスさんたちと会う時間ができるよ。』

ぐっとスカートの裾を握っていた。皺ができてるだろうから、きっと後でミリアに怒られるだろうなぁ。

なんて、今はそんなこと気にしてる場合じゃなかった。

「普段の口調はそっちなのか？」

はっ！勢い余ってタメ口に！

『ごめんなさい。』

目上の人は敬わなくちゃ。日本人として、これ、常識なり。

「いや、気にしていない。むしろ、いつもその口調であって欲しいくらいだ。」

それはできませぬ故。丁重に辞退を申し出た。

『リュクスさん、言ってました。クーンさんと手合わせしたいって。クーンさんもその顔だときっとそう思ってますよね？』

ぐっと押し黙った。ってことは図星なんだね。勝手にそう解釈して話を進めた。

『クーンさんは騎士団の方々から人気があるみたいですし、貴族の娘さんたちからも人気があるって聞きました。そんな人が部屋に篭ってるなんて、勿体ないですよ。』

「リュクスのやつ、余計な事を。」

ありゃ、情報源がばれてる。聞いちゃいけなかったみたいだから、リュクスさんは後で怒られてください。

『私もクーンさんがリュクスさんと手合わせしてるとこ、見てみたいです。』

そう言うと一瞬動きが止まる。不思議に思っていると、手が伸びて来て…

「失礼します！」

「な、なんだ！」

きゃー！し、心臓ひっくり返る！

その手が私に触れる寸前にドアが開かれた。

「書類のお届に上がっただけなのですが…」

私は急いでカップを下げる。クーンさんも何もなかったかのように、受け答えをしていた。

顔、あっつい。

クーンさんの目があんまりにも真剣だったから。目、逸らせなかった。

あーっ、もう！考えるとまた顔が赤くなるでしょーが。

自分を叱責して、ワゴンを端に寄せてから、クーンさんのところへ向かった。

『クーンさんって、この書類をチェックするだけが仕事じゃないですよね？』

「ああ。法律改定の嘆願書や、城下の制度についての様々な書類がここにはある。

各省ごとに内容は異なるが、認可して議会へ行くものは宰相のところ、不可の場合はその省へと逆戻り。

その場合、添削をして戻している。必要があればそこまで行って、説明を行っている。」

コレ、全部？うひゃー、クーンさんすごい。私なら一日も持たないと思う。しかも全部一人でやってるみたいだし、天才、いや秀才さんなんだねぇ。

これ、私なんかが手伝えるのかな？

って、ダメダメ！やるって決めたんだから、やる前から尻込みし

てちゃいかんでしょー。

『机の上にある書類はどこの省のものかはバラバラなんですよね？』

聞くところによると、説明をしてくる人がいてそれを聞いてる間に置いてく人が多いんだって。分類する暇もないらしい。

そんでもって夜遅くまで仕事してたら、きっと対策を用意する暇も労力もないはず。

女中さんとか従者さんを付ければいいのに、ミリア曰く、クーンさんは周りに人を置くのは監視されてるみたいで嫌らしい。

『まだ手を付けていない書類を分類します。ほとんどは手を付けてないですよね？』

そう尋ねてから、着々と分けていく。省の名前は日本のものと何ら変わりなくて、ちょっと面白かった。

「…ネイは働いていたことがあるのか？」

なかなかの手捌きだったのが意外だったのか、その声はちょっと驚いている。

心外だなぁ。

『仕事じゃなくて生徒会の役員をやっていたんですよ。』

分からないだろうと、生徒会の説明をした。

『…と、まぁ、社会に出た時のための訓練ですね。社会の人間関係を教え込むには、学校を一つの組織のように見立てて運営するのが、口頭で教えるよりも簡単ですから。

…よし、終了！』

サクサクと仕分け完了。

「早いな。」

お褒めいただき光栄です。はい、次行きましょ、次。他にやることは…

ゴーン、ゴーン、ゴーン…

低い鐘の音。私のやる気になっていた脳は、完全に思考を遮られた。せっかくやる気になってたのに。

『これ、なんの鐘なんですか？』

「昼時になったら鳴るんだ。」

なるほど、お昼休みか。そう言えば小腹が空いた気がする。

いつもはあの部屋から出られなかったから、ミリアが運んできてくれてレークさんと一緒に摂ってた。

でも、今日は勝手にしてもいいよね。よく分からないから、ミリ

アがいると思われる女中部屋にいったん戻ろう。

『クーンさんはお昼ご飯はどこかで摂るんですか？』

「…いつも食べない。」

はい？今、何とおっしゃった？

私は耳を疑った。

信じられない言葉が聞こえてきた気がしたけど、気の所為だよね、うん。

なんて思ってもう一度聞いてみたら、その“まさか”の答えが返ってきた。

『食べない？！いつも？！』

念を押すように聞くと、やっぱり肯定された。

し、信じられない！私なんて美味しいご飯のために頑張ってるってのに。

「そんな時間はないんだ。終わらせるのが遅くなると、省長にも迷惑になる。少しの間も勿体ない。」

なんちゅー男じゃ！食べ盛りの２０代、それでいいんだろーか。

『…食べる時間がないだけで、食べる気がないわけじゃないんですね？』

「ああ。」

なるほど。これは専属女中（メイド）の出番ですね！ご主人様のためにも一肌も、二肌も脱ぐ覚悟でございます。

「ネイ、だから俺のことは気にしないで食べに行け。」

でも、って食い下がったのに、クーンさんの意志は固かった。

将来は頑固親父になること間違いなし。いっその事、ここに居座ってやろうかと思ったけど、腹が減っては戦はできぬ、とも言いますし。

闘うことなんてないんだけど、一時退散と行きましょう。

『すぐに戻ってきますから！』

そう宣言して駆けだした。

自分の格好に奇異の目を向けられてるとか、廊下は走っちゃいけないとか関係ない！（いや、関係あるだろう。）

私は我が主のために頑張ります！

『たのもーっ！』

バンッ、と思い切り扉を開けた。そこにはたくさんの女中さんたちが、当たり前だけどいらっしゃいまして。すごい数の視線を集めてしまった。

やっちまったぜ！

知った顔の方に目を向けると、二人とも頭を押さえていた。

「…ほら、あんたたち！さっさとご飯食べないと午後の仕事に間に合わないよ。」

その度胸に感服。マーサさんの粋な計らいで何とかそこにいた女中さんたちは私を気にして酷く後ろ髪を引かれてるような感じだったけど、女中部屋からは出て行った。

「もう！急に飛び込んで来てはダメでしょう？

そうでなくてもネイ様は目立つのに。」

はい、怒られてます。

反省?御覧の通り、もちろんしてますよ。ほら、ちゃんと正座。

てゆーか、ミリアって怒ると怖いんだね。今度からは怒られないように気をつけなくちゃ。

『ごめんなさい。』

「まぁ、いいじゃないか。それにしてもすごい勢いで入って来たね。何か用事があったんじゃないのかい?」

はっ!そうだった!

『クーンさんがいつもお昼を摂ってないって言うじゃないですか!どういうことです?!』

さっき思ったんだけど、お昼はあの部屋に運べばいい。それくらいの余力はこの城にいる使用人の多さから言えばあるはずだもん。

「う〜ん。それを私の口から言うのはお門違いってヤツだ。

まぁ、見たってことになれば誰の責任にもならないかもね。」

少し考えるように間をとってから、マーサさんは視線をミリアに向けた。

「ミリア、一緒に行きな。紅茶のワゴンを持ちにクーン魔道師の部屋に、ね。」

マーサさん、好き！

ばっちりとウインク付きで言われた言葉に感動した。

こう、ドーンと胸を張って言われるから、何となく安心できる。

「でも！クーン魔道師さまはネイ様に一番知られたくないと思っているのではないのですか？」

「でも、も何もないよ。あの子は人に頼らな過ぎるんだ。味方はこんなにもいるのにね。」

大きなため息。この時のマーサさんは、まるで母親みたいに見えた。

どうしようもない息子を心配してる母親。

…きっと、クーンさんのこと、大切に思ってるんだね。

「私はネイに感謝してるんだ。あの子が自分の傍に人を置くようになったことだけでも大きな進歩じゃないか。」

なんだか複雑、みたい。ややこしいなぁ。知りたいことは教えてもらえないし。変な改定願いなんて山ほどあったし。

ここの政治は大丈夫なのかねぇ。

実はさっき、仕分けしながら、いけないとは思ったんだけど、内

容をちらっと、ね。

ほら、ダメだって思うことほど反抗的にやってみたくなるって言うか。立ち入り禁止って書いてある所ほど立ち入ってみたくなっちゃうって言うか。

国の重要書類とは分かりつつも、ついつい見てしまったわけで。

私、天邪鬼なのかも知れない。

「…わかりました。ネイ様、行きましょう。」

お、ミリアが折れた。流石お母さん的存在のマーサさん。

それにしても。

『同じ仕事してるんだし、“様”付けするの止めよーよ。』

ずっと気になってたんだよね。

言うタイミング逃してたから今まで言わなかったけど、私は単なる女中だし、ミリアは女官だよ?立場が上の人に様呼びされちゃーね。周りにいる人だって変に思うよ、きっと。

「それだけはなりません!」

ちぇー。

結局言い合いになって、マーサさんから私たちに雷と言う鉄槌が下されました。

ってことで、話は一時保留。

私とミリアはそそくさとクーンさんの部屋に向かった。

それはドアを開ける寸前に、聞こえてきた話。冷静なんて言葉を頭からふっ飛ばすくらいのものだった。

「ほう、噂の専属とやらはおらんのか。見物に来たと言うのに、時間の無駄になってしまったではないか。」

ゆったり、いや、ねっとりとした纏わり付くような話し方。虫唾が走る。

「申し訳ありません。昼食を摂りに行かせました。」

クーンさんが謝ることないのに！てゆーか、そんな見物する時間があるんだったら仕事しろよ。

「ほう。主人を差し置いて昼食に行くとは生意気。とんだ忠誠心だな。」

余計なお世話だ、コノヤロウ！

口が悪いかも知んないけど、腹が立つもんは腹が立つ。いや、段々腸が煮え繰り返ってきた気がしてきた。

私は何とか握り拳を作って耐える。しきりにミリアが心配そうな

視線を送って来た。

「…クーン魔道師さまにとっては日常茶飯事のことなのです。ですから、頭にくるとは思いますが、辛抱なさってください。」

その小声が耳に入って来た時、思わず手を握り締めるのを忘れていた。

日常茶飯事って、こんなねちねち言われるのが日課になってるってこと?ありえない。

「戯れ事、戯言だと思って気にしないのが得策です。

あんな肩書だけで生きている、無能な税金ドロボウ貴族の狸ジジイの言うことなど、気にしなければいいのですよ。

さてと、お耳汚しはここら辺で終わりにしていただきましょう。」

ただ呆然として部屋の扉の前で立ち尽くしていた。

…ミリアって毒舌なんだ。

ちょっとのショックとかなりのダメージを受けながら、私はミリアの後に続く。何事も聞いてなかったみたいに入ってく姿に、もう完敗だ。

「失礼いたします。」

堂々と歩く姿は格好よくて。どこまでも姐さんについて行きます、って心の中で誓った。

「宰相様からの伝言でございます。“騎士団員育成法の改正案はまだか”、との催促です。」

はつみみー。いつの間に宰相様と会ったのかなぁ。

てゅーか、私、ちょっとあの人苦手なんだよね。昨日会った時、若干怖かったし。しかも急に笑い出すから、心臓が何度もびっくりしちゃったんだよね。

「了解した。午後一番に届けるとを伝えてくれ。

お前は今後、午後の仕事に支障が出ないよう、ひるやすみをしごとに当てなくてもよい。宰相殿にもそう伝え、すぐに休憩をとってくれ。」

畏まりました、と言うと、ミリアは出て行ってしまった。

「他人の心配をしている暇などお前にはないはずだが。

それにしても、この女中が噂のお前の専属か?足を曝しよって、品位が疑われる上に、お前の母親を連想させる。

少し幼い気はするが、顔と身体は中々よいな。もしや愛玩用か?」

愛玩用?それは一体何ですか?

訳の分からないことを言うオッサンを睨みつけながら、貶されてることは確かだと雰囲気から察した。

「…聞き捨てならない事をおっしゃる。それはあなたには関係のない事だ。

それに、その娘は愛玩用などではない。…人を計りかねると、そのうち己の身を滅ぼしますよ。」

最後の一言は、私の背筋にも何か寒いものがぞっと来た。ってことは、このオッサンはクーンさんのその迫力を一身に受けてるはずだから、なおさらだろう。

案の定、狸ジジイは顔を真っ青にして、部屋からそそくさと出て行った。

「…すまない。」

オッサンが出て行ってからはしばらく、どちらとも口を開こうとしなかった。

私は詳しい事を聞いていいものか悩んでいたし、クーンさんはきっと私に話そうかどうか迷ってたんだと思う。

『どうして謝るんですか?』

クーンさんは悪いこと、一つもしてないのに。むしろ、謝って欲しいのは訳の分からない御託を並べて、明らかに私の事を見降ろしてきたあのオッサンだよ。

喋り方がねちっこかったその人は、イメージ通りの体型だった。

良く言って恰幅がいい、悪く言ってメタボってる。撫でつけられ

た茶色の髪は、見事なまでの七三分けで油ギッシュだった。

なんか、失礼だとは思うんだけど。…巨大な豚さんが質のいい服着て歩いてます、って感じ。

『クーンさんは何も悪くない。』

大体から言って、あのおじさんが訳わかんないことばっかり言うのが悪い。そんな中途半端だと却って気になるってくらいのささやかな情報。

あー、ホント気になるっての！

…ま、聞かないけどさー。あんな顔してちゃ、聞けない。

さてと。私はご飯でも食べに行こうかね。

『クーンさん、私ご飯食べに行ってきます。』

一礼して、お茶のワゴンを押しながら部屋を後にした。ミリアがきっと待っててくれるはずだから、急がなくちゃ。

私は走らない程度に急いで、女中部屋に滑り込んだ。

「お帰りなさいませ。」

涼しい顔をして礼をしてくれるミリア。しかし、その裏側はいかに、って感じ。

さっきちょっぴり怖かったしねぇ。

「どうしてそんな目で見るのですか？」

私の顔に何か付いてますか、なんてベタなこと、聞かないでください。心苦しいですから。

『んーん、何でもない。お腹空いちゃった！食いっぱぐれる前にご飯行こー。』

腕を引っ掴んで何とか回避。私はそのまま使用人たちの食堂へ連れて行ってもらった。

辛口ミリアとサンドイッチ - その2 -

ほー、広いねぇ。

流石はお城、高校の学食とは一味も二味も違う気がした。

ずらっと並べてある長机とベンチには人が集まって座っている。

それでも、もう昼休みが終りに近い所為か、人は疎らになりつつあった。

要するに、ちょっと雰囲気がヨーロッパ的な食堂ってとこかな。

トレーに自分の分を乗せるみたいだし、多分システムは学食とかと同じだと思う。

あ、見知った人たちはっけーん！

『マーサさん、リュクスさん、サイモンさんにエルさん！』

声をかけるとすぐに振り向いてくれたみんなは、明るい笑顔を向けてくれる。さっきまでの黒い気持ちはどこかへ行って、安心感が胸一杯に膨らんだ。

「おう、ネイ。今しがたリュクスに聞いた。…お前、記憶がないんだってな。」

なにー?!

いきなりテンションが低くなるエルさん。それぞれの顔色を覗ってみると、みんな暗い顔をしてる。ってことはそう信じてる訳で。

りゅ、リュクスさんのおバカー!何でさっきの今でもう話してんのよ。

まぁ、忠犬だろうから、悪気はないんだろうけどさぁ。

『いや、あの…それは、ですね…「いいんだ!」

またこのパターンか!いい加減飽きてきたぞ。

「俺、何でもするからな。ネイがやりたいことはなるべく叶えてやる!だから、記憶が戻るまで、何も心配することはねえ。安心しときな。」

はい、また弁解できないままですよ。

エルさんは涙を拭いながら厨房の方へと駆けて戻って行ってしまった。

「何がどうなってるのかは分かりませんが、とりあえずお昼を摂ってしまいましょう。」

ミリアの言葉は有り難かった。何とも勘違いが激しい人たちだ。私にはこのまま止めることはできないんだろうなぁ。これからはミリアに任せよう。

私は無視を決め込むことを決意した。

「ネイには複雑な事情があるってことは聞いてたけど、そう言うことだったんだね。」

う〝っ！マーサさん、首、絞まってます！！

何やらマーサさんまで勘違いしちゃったらしく、私は首元を締め上げるかのように抱き締められていた。

「マーサさん、ネイ様を放してあげて下さい。そのままでは花畑を見ることになってしまいますよ。」

冷静に、しかも食べるのを止めないままミリアは言った。

助かったけど、やっぱりミリアは裏が存在するのね。誰にだって裏側はあるのかもしれないけど、ミリアの場合は普段が明るくていい子だからか、ちょっと、いや大分怖い。

ミリアだけは敵に回さないようにしよう。これもまた心のノートにメモっておいた。

解放された私は、食事に手を付ける。

『うん、素材そのものだ。』

頷きながら食べる。ミリアはもう慣れていたようだけど、マーサさんはそれが不思議だったみたいで尋ねてきた。

『私の食べ慣れていたものとは味付けが違うのです。』

「そうか、記憶をなくしても身体は覚えてるってやつだね。」

勘違いは続行中で、私はもうそれでいいと思って、記憶喪失なんかじゃないと言うのは止めておいた。

ミリアに続いて食べ終わると、お茶を飲みながらため息をひとつ。午前中の間にいろいろありすぎて、ちょっと疲れちゃった。

人と接するのが苦手って訳じゃなかったはずなのに、この短時間で会った人たちはみんな個性的過ぎて。その強烈なキャラにクタクタだった。

もしかしたら、しばらく決まった人以外と会話を交わしてなかったから、急に人がたくさんいるとこに出て来て、人酔いしちゃったのかなぁ。

「大丈夫ですか？」

マーサさんは仕事に向かったらしく、目の前には心配をかけてくれる人が一人だけいた。

大丈夫、と小さく零すと、お茶を一気飲み。それをトレーに置くと、ミリアが片づけに行ってくれた。

さてと。これからどうしようかな。

とりあえず、私の中でクーンさんの仕事時間短縮計画を進めるために必要な事を考えなくちゃ。

「どうしました？そんな怖い顔して。」

急に声がかかる。聞いたことがある声。

『レークさんっ！』

声がした方を向くと、ここ数日一番一緒に居た人がいた。

「服を大胆にいじられましたね。“ニホン”では手足を出すのが批判的には捉えられていないため、当たり前なんですよね？」

ひたすら話してたから、クーンさんは地球についての知識を、今じゃかなり持ってる。ニコニコしながら話す姿に、はい、と答えると、その瞳はキラキラしていた。

「よくお似合いですよ。人形のように愛らしいですね。」

う～ん、嬉しくない。人形って…子供じゃないんだから、違う褒め言葉にして欲しかった。

ん？てゆーか、褒め言葉だったのかな？

レークさん、異世界の研究が進まないからお昼にでも話をしようって昨日言ってたけど、それを本当に実行するとは。確かお祭りの準備で忙しいはずなのに、大丈夫なのかなぁ。

「あー！神官様発見！！」

“げ、見つかった”、そう呟きましたね、今？逃げ出してきたんかい！

あれよあれよと言う間に、レークさんは白い服を着ている人たちに引きずられて行ってしまった。

何だったんだろうか？

呆然と立ち尽くしてると、ミリアが帰ってきて言った。

「私は仕事に戻りますが、ネイ様はどういたしますか？」

おそらく一部始終を見てたはずなのに。全く動じてないし…

『うーん、とりあえずクーンさんの仕事時間を短縮させる方法を考える。っと、その前にご飯持ってこうかな。』

私も気にするのを止めて、意識を別のことに持っていく。

「厨房の方に行けば、エルさんがいますから、相談すれば何とかなると思いますよ。

それと、クーン魔道師さまの仕事時間を短縮する方法は、私も考えてみます。」

ミリア万歳！

私は嬉しくなって飛びついた。

『ありがとう、ミリア！』

ミリアは固まったままだった。

ちょっとくらい反応して欲しいんだけど…無反応だと対応できない。

「…ネイさまは感情の表現が豊かですね。」

遠慮がちに言われたけど、そうは思わない。感情表現が一番なのは、多分リュクスさんあたりだ。

『ごめん、五月蠅かった？』

「いえ、そういうことではありません。」

少し言葉を濁す。そんな事されちゃあ、余計に気になるってのが、人間の性。

でも、ま、時間も無いし、そんなことしてる場合でもないんだけどね。

「とにかく、何でも協力しますから。ネイさまはそのままでクーン魔道師さまに接してあげて下さいな。」

了解、と残すとエルさんに会うために厨房まで行ってみた。

すごいお皿の量。まず最初にそう思った。

洗い甲斐があると言うか、何と言うか。それはそれは半端ない数の、使用済みの皿が山積みになっていた。

「お、ネイじゃねーか。どうした？」

困ったことでもあるのかい、と聞かれ、その表現にさっきのことを思い出す。

結局私は記憶喪失ってことになったままなんだよね。って言っても、もう弁解する気は更々ない。

人間ってのは学習するモノですからね。いい加減、何を言っても私が気を使ってるっていう風にしか捉えてくれないって分かってるもん。

それに、さっき思った。このヘンテコな設定は使える。だって、さっきのご飯もよく分からない野菜がいっぱいあった。

って、ことは、だ。

記憶喪失で全ての記憶が無ければ、きっと知らないことだらけでも変には思われないはず。

そう納得して、本題に入った。

『クーン魔道師さまが時間が無いっておっしゃるから、何か軽いも

のでも作って行こうかと思って。協力、してくれませんか？』

ゆっくり、見上げて懇願するように言った。

策士とでも何とでもお言い。私、腹黒いですからね！

「あ、ああ、もちろんさ。」

イエス！作戦成功ってことで、目的の実行はサクサク行きましょ。

辛口ミリアとサンドイッチ - その3 -

「何を作る気なんだ？」

そう、問題はそれなんだよねぇ。一応記憶が無いってことになってるから、テキパキ作るのはきっとまずい。

てゆーか、バレる。

そこまで記憶の所為にできるかが問題。エルさんが気にしない人だったらいいんだけど。

純粋に、私が記憶喪失だけど、体が覚えているから作れる、とか、純粋に信じてくれたら尚いい。

…よし、ここは気にしないで進めることにしよう。

エルさんにお願いして、パンと卵と野菜と油と酢を用意してもらうことにした。

「野菜は何がいるんだ？あと、たまごは何のたまごを使う気だ？」

ずらっと並べられたものに驚いた。すごい数。で、気が付いたことが一つ。

ここは城内の厨房、つまりたくさんの食材が詰まってるってこと。

そりゃあ、種類を尋ねられるほど有り余ってますよね。

自分で選べって言われたらまずい。ってことで、先手を打ちましょ。

『レタスとトマトとキャベツ。あ、あとニンニクもあったら。それとハムとベーコンとチーズもあれば嬉しいですね。』

エルさんって本当にいい人だよ。言ったものを全て聞きもらさずに、すぐさま用意してくれましたから。

それに、挙動不審な私を疑いもせずに…　心が少し痛みます。

でも、それにしたって。…用意した量が多すぎると思います。

トマトは一籠、ベーコンとハムとチーズは塊。油に至っては、瓶が一ダース。何人前よ?

それにしても、見かけないものだらけ。恐る恐る手にとって、黄色い葉っぱをかじるとレタスの味!白いのはキャベツ。

この液体、まさか…ほんのりピンクがかった液体は酢だった。

全部味は同じでも、色や形が違う。これから、食べる度に違う色のものを口にするのね。複雑。

「ネイ、だから卵はどれにする?」

そう言って見せられたのは、さっきの量の多い卵。よく見ると、３０種類以上あるみたいで、色や形が違った。手前にあったのを手にとって、とりあえず器に割り入れた。

『これ、黄身が緑!』

驚愕の事実！てゆーか、食べる気すらしない色だった。

「それは黄身じゃなくて緑身だ。」

うっそー、まっじー？ジョーダンやめてよっ！…いや、至極真面目だ。

エルさんは不思議な眼の色を隠しもしないで、私を見つめている。それからハッとして、愁いを帯びた目に変わった。

「ネイ、やっぱり記憶が薄れてるんだな。これからは何でも言え！おじさんが何でも相談に乗ってやるからな！！」

ハイ、って言いつつ、後ろめたくなって心の中で謝った。いくら腹黒い私にも、流石に良心は存在する。

本気で心配してくれているエルさんに、全てにおいて嘘をついてるのが心苦しかった。

そんなこんなで一段落ついて。

「ネイは黄身の卵が欲しいんだな？」

論点は元に戻った。

説明されたことによると、鳥の種類によって卵の中身の色が違うらしい。

黄身のものは原種に近くてあまり好まれないらしい。黄身が緑とかピンクとか黒とか、ましてや青とかより個人的には断然黄色がい

いと思うけどね！

ま、それは個人の自由だから一端置いといて。

『まずはこれを茹でます。』

それから、それから。やっぱりやることがあるのは嬉しくて。向こうに居た時よりも手早く料理を始めた。

卵の黄身と酢と油を使ってマヨを作る。

これはやっぱりサンドイッチには必需品だよね～。

そう思って掻き混ぜていると、初めてこれを見た時のクーンさんたちと同じように、エルさんは不思議そうな顔をしていた。

『ちょっと舐めてみます？』

それに頷いて小指にちょっとだけ付けて舐めた。すると、みるみる表情が変わる。

「う、うまい！こんなに美味いもの、今まで味わったことがない！

ネイ、どうやって作ったのか、もう一度説明しながらやってくれないか？」

その興奮とキラキラした目に圧倒されつつ、ちょっと面白かったから、企業秘密ってことにしといた。

今は時間がないし、また次回に乞うご期待！早くクーンさんに食

べてほしいから。

それからの作業はもっと早く進んだ。エルさんが手伝ってくれたしね。

ベーコンをカリカリに焼いて、ハムとチーズをスライスしてくれてる間に、私はパンにバターとニンニクを混ぜたものを塗って、フライパンで焼いた。

卵は潰してマヨネーズを加える。キャベツの千切りにもマヨネーズ。

本当はマスタードも入れて和えたかったんだけど、その、色が、ね。まさかの青だったからやめた。

青って！食べるものに青って！！食べる気失せないの？！

…とにかく、見事過ぎるお色でした。

ここまで用意したらサンドするのみ。私は三種類を考えてる。ＢＬＴサンド、たまごサンド、もう一つはハムチーズサンドのキャベツ入りだ。

あんまりにも熱い視線を送ってくるエルさんに、一種類ずつおすそ分けした。

さすが料理人。初めて見る食べ物に興味津々だ。手伝ってくれたお礼くらいにはなるよね。

そして、毒味係でもある。

酷いとか言う言葉は受け付けません。興味がありそうだし、私が作ったんだから毒の心配もない。

ま、食材が初なもの（見た目）だったってことで。

じーっとエルさんが咀嚼する音に耳を傾けて、感想を待った。

「う、うまい！今まで味わったことのない味だ！ネイ、料理の才能があるんじゃないか？」

ありがとうと言い、後片付けを簡単に済ますと、新しくお茶の用意をしてクーンさんの仕事部屋へと向かう。

その間もクーンさんの仕事時間の短縮方法を考えた。

でも、そんなに調理場から遠くなくて。そこにはすぐに着いてしまった。

朝とは違って人通りはない。ゆっくりと息を吸いこんでから、ノックして部屋に入った。

「ネイさん！元気にしていますか？」

開けた瞬間に満面の笑みが迎えてくれた。

『レークさん！』

なんでここにいるの？てゆーか、さっきのことを思い出すと、逃げてきましたね？懲りない人だなぁ。

なんてちょっと呆れちゃう。どうせまた引っ張り戻されるか、怒られるかのどっちかだと思うんだけど。

「実は頼みたいことがあるんです。」

さっきの笑みは未だ絶やしていない。ずっと思ってたんだけど、レークさんとクーンさんってホント対照的だよね。

って、今はそんなこと考えてる場合じゃなくて。お願い、だっけ？

あんまり好ましくなさそうだけど、レークさんのお願いとあっちゃあねぇ。聞くしかないでしょ。

同時進行でお茶を淹れることに許可をもらって、手を動かしながら耳を傾けた。

「私が神の声を聞くには、一度ネイさんに鏡盆に触れていただく必要があります。そうしないと、私は存在を感じられないのです。

式典の準備が進むにつれ、誤魔化すことが難しくなってきました。このままでは事実が発覚し、＜最後の乙女＞の存在が疑われてしまうでしょう。」

そんな事態になっていたのね。無意識に難しい顔になってしまう。

その人物を二人の男性が眺めていることは、当の本人も気づいていない。

『…それは、私の存在を隠すために必要なんですね？』

嫌だ、そう思う。

私はこの国の人の心を助ける存在かもしれないのに。でも、やっぱり私には何の力もないと思うから。

だから、その人たちの象徴として崇められるなんて、絶対に嫌だ。

無責任な事、したくないし言いたくない。それを回避するためなら、協力は惜しまない。

心の中でそう決心し、レークさんたちに向き合った。

『…わかりました。ご協力させて頂きます。』

身体を綺麗に曲げて頭を下げる。これは女中としての礼じゃない。私自身の決心。

辛口ミリアとサンドイッチ - その4 -

『それより、今時間ありますか？クーンさんにサンドイッチを作って来たんですけど、たくさんあるのでレークさんもいかがですか？』

二人は初めて調味料を見た時のような顔をした。それのお陰で、説明が必要なんだと分かる。

『私の世界の食べ物です。いや、挟んだだけだし、料理って言うほどのものではありませんけど。

クーンさんが食べる時間もないとおっしゃるので、手で掴んで食べられるものを用意しました。』

そこまで説明すると、どうぞ、と二人に促した。

本当はお米食べたいよね。でも、ここではパンしか見かけないし。

私みたいな東洋系の人がいるみたいだし、エルさんに聞いてあるか確かめてみよう。

今となっては本当に恋しいよ、焼き魚と米とみそ汁。日本人には必要不可欠な味だよね。

『お口に合うか分かりませんが、そんなに食べれないものではないと…

「うまい！」

「おいしい！」

二人の声はほぼ同時。見たことないものを食べるのを訝しがってるのかと思いきや、もう口に運んでいたようだった。

二人と勢いよく食べてる。そんなにお腹空いてたのかな？

二人の食べっぷりに満足しながら、お代りの紅茶をカップに注いだ。

お皿はあっという間に空っぽ。清々しいほどの食べっぷりにまた満足した。

「ごちそうさまでした。」

例に習って、いつもの挨拶。日本の挨拶、定着してる？

どうやら食に関しての深い考えを、一言の言葉で言い表していることに二人は感心したらしい。

私にとってはもう当たり前のことだったけど、文化も宗教も違うし、珍しい考え方なのかもね。

手を合わせて挨拶している二人を、不躾にもじっと見てしまった。

…いかん、いかん。ここ数日でいい男を見慣れてしまった。

これじゃ目が肥えちゃうって。

「さて、私はそろそろ戻るとします。今頃部下たちが血眼になって私を探してる事でしょうから。」

分かってるなら、もっと早く帰ってあげて下さい。

さっきから聞こえないふりしてたけど…レークさんを呼んでる声がずっとしてる。

半分泣きそうな声色からしても、ずっと探してたんだね、ってちょっと可哀相に思えた。

「では、日時は改めて。また明日もこの時間に参りますので。」

そう優雅に挨拶を残すと、さっとクーンさんの仕事場を後にした。

『レークさんの部下さんたち、可哀相ですね…』

思わず独りごちる。それに一言、気にするな、と言う言葉が返ってきて、何事もなかったかのように、レークさんを呼ぶ部下さんの声は途絶えた。

心の中で部下さんたちにエールを送ると、目の前の紙の束に意識を向ける。

こっちもこっちで大変なのだ。…主にクーンさんが。

手伝えることがないか考えなくちゃね。

一度食器を下げ、その途中で気付いたことがあり、ミリアに紙と書くものを受け取って、足早にクーンさんの元へと戻った。

「…何を始めるんだ?」

忙しいはずなのに、私を気にしてくるクーンさん。それじゃ意味無いって。

だって、仕事を効率よく回す為に私がいるんだよ?なのに、私のことをいちいち気にしてたら、タイムロスでしょ。

ま、そうは言っても、いきなり何か始めたら気になるってもんだよね。ってことで、説明しながら手を動かすことにした。

『この部屋を訪れる方々は、書類を自由に置いて行かれるようなので、あとで分けるのが面倒にならないように、あらかじめ置いて行く場所を指定するようにしようと思ったんです。

こうやって紙に省名を書いておけば一目で分かるでしょう?』

私は書類とにらめっこしながら、お手本どおりに名前を書こうとする。けど、どうも上手くいかない。

…うわっ、曲がった!

「…そうか。」

あ、今私の書いた字、ちらっと見ましたね!そしてあたかも見なかったフリするの、止めてください。余計に傷つく。

下手なら下手って言ってくれた方がまだマシだって。てゆーか、問題はペンと紙にある、と思う。

羊皮紙は凹凸激しいし、羽ペンはペン先がさけてるから自由に動いちゃう。

それに加えて、なんで読めるのか分からないこの国の文字はくにゃくにゃしてるし。きっとこの国の識字率は悪いと思っちゃうほど、ヘンテコな字だ。

格闘することおそらく３０分。私はようやく全ての省の名前を書いて、札のようにすることができた。

午前中に仕分けした分をそこに並べていく。

次は厚手の大きめの封筒に、これまた３０分ほどかけて名前を入れていく。次はさっきよりもうまくかけた気がする。

「それは？」

伸びをしている私に、見計らったように声をかけてくる。

『これはチェックが終わったものを入れる封筒です。』

チェック？と聞き返され、英語は伝わらない事を思い出した私は、確認の事だと伝えた。不便だと思う。

だって、日本語英語って結構普及してたから、日本語に直すのって結構難しいんだよね。

『もし私が省への道のりを覚えたら、私が届けに行く事も可能になりますし、その方が回転率が上がると思ったんですけど…』

最後の言葉を濁したのは、途中で自信がなくなったから。逆に迷惑かけるようなら止めた方がいいかも、って思えてきちゃって。

それに、クーンさんの無機質な目線の意味が気になった。

なんか、嫌だった？一度うろたえ、それからクーンさんを見る。視線があって、一瞬で逸らした。

…目力強いですね。切れ長の目は、私を捉えて離さないようだった。

『あの…』

無言の空間がきつくて、自分から声をかける。でも、やっぱり視線を真っ直ぐ交わすことは難しかった。

「ああ、悪い。ネイが他のヤツに知られると思うと、少しイライラしてな。そうでなくてもこの城内でネイはもう有名人になっていると言うのに。」

驚いて視線を上にあげると、その瞳に捉えられる。さっきと同じように逸らすことはできなかった。

『お、おお、お茶の用意をしてきます！！』

何とかそう口にすると、そこから飛び出した。

何これ！心臓が、痛い。活発に働き過ぎ！

胸の辺りを押さえるように、昼休みの比にならないほどのスピードで廊下を駆け抜けて、侍女部屋に飛び込んだ。

「ネイさま！あれほど飛び込んではいけないと…ネイさま？」

その場にへたり込んで心臓を押さえる。

冷静に慣れ、自分！

「お顔が真っ赤です。熱でもあるのでしょうか？」

心配してくれるミリアを余所に、私は自分のことで精一杯。おでこに手を当てて熱を計ろうとしてくれてるけど、原因は分かってる。

何だか知らないけど、クーンさんの言葉にドキドキしてるからだ。

『ねぇっ、ミリアっ！クーンさんって天然タラシ？』

「は？」

例によって、私はミリアに詳しく話す破目になった。

天然タラシ

現在、午後のお茶の準備をしております。

侍女部屋に飛び込んだ時、そう言う訳でちょうどミリアは私を呼びに行こうとしていたらしい。

「で、何があったんですか？」

テキパキと手を動かして聞いてくるミリアとは違って、私は動揺を隠せない。

いきなり核心を突いてくるのがミリアらしいと言いますか、うん。遠回りする時間はないって分かってるんだけど。

『あの、ですね…』

そう切り出した。何で敬語なのか聞かれたけど、それはなんか雰囲気だよ。

『クーンさんのお仕事を手伝おうとして、書類を私が配達してはどうかと提案してみたんだけど…そう言ったらクーンさん、私を他の人に知られるとイライラするって。』

あの時の目があんまりにも真剣だったから、他意はないんだって分かってるけど、ドキドキしてしょうがない。

自分一人の動揺はそのせいだ。

「ま、仲がよろしいんですのね。あの方にしては、分かりやすい行動に出るには随分と早い展開です。」

納得したように頷いてますけど、ミリア、私良く分かんない。置いてかないでよ。

どう言うことか話してくれるように懇願すると、言葉を選ぶようにして話し始めた。

「そのままの意味です。ネイさまはそのまま受け取ればよいと思いますわ。」

『それって、私の存在が迷惑で知られたくないってこと?!』

ま、まさか、そんな風に思われてるとは!ああ、でも確かに、私ここに来てから迷惑しかかけてないし…

てゆーか、突然ポッと湧いて出た私に親切にしてくれ過ぎてるし、いい加減そう言う扱いしてる事に気づけよ、って話?

「何でそうなるのですか!」

さっきまで平静だったミリアは、いきなり声を大にして言った。

でも、そう言う結論に、なるでしょ?

『だって、私はこの城内じゃ有名だって言われたよ?この奇抜(らしい)な格

好の所為でしょ？それに、ここに来てから迷惑かけてばっかりだし…』

私の今の気分はどん底だ。迷惑かけないようにするにはどうするべきか、悩みどころ。

「その意味、私分かりますわ。」

ため息をついて、手を休めて私に向かって言った。

「ネイさま、ご自分の容姿についてどう思われていますか？」

自分の容姿？今そんな話だったっけ？

不思議に思いながらも、ミリアの質問に答えた。

『指して特徴もなく、平凡な感じ？あと、残念な足の短さしてるよね。』

この国の人たち、みんな背が高くて足が長い。しかも、女の人たちなんかボン、キュッ、ボン、な体形してるから、私が最初早乙女って言われたのにも、今さらだけど頷ける気がする。

私の答えにやっぱり、と独りごちると、ミリアは口を開き始めた。

「ネイさまが1日で有名になられたのかは、たくさん理由がありますが、原因はその容姿ですわ。」

なに？！そんなに見るに堪えぬほど酷い？ニホンに居た時はそん

な事もなかったはずなんだけど…

「的外れな事をお考えになっているところ失礼しますが、ネイさまはご自分の容姿に自信を持った方がよろしいですわ。

大きく神秘的な黒い瞳はぱっちりしておられますし、艶やかな黒髪は印象的なほど美しいです。それに加えて透き通る白いお肌。

身長は平均よりも低いかもしれませんが、華奢な身体に細い手足。それなのにお胸はしっかりおありになって、総合的に見ても人の目をとても惹く、愛らしい存在です。

最初にクーン魔道師さまがおっしゃられたように、物語の森の妖精のように愛らしいんですもの。

クーン魔道師さまはきっと誰かにネイさまを取られるような気分になって、嫌なんだと思います。」

は、早口！一体どこで息継ぎしてたの、ってくらい早口だった。

「お分かりになりまして？」

そう言われれば、頷くしかなかった。

「それで、“天然タラシ”とはどういうことですか？」

どうもこうも、そのままの意味。日本人にはかゆい台詞を真顔で言ってくるんだもん。

『妖精だとか、私の髪を梳くのが楽しみの時間だからそれを奪うな、だとか。

なんか、こう、ここら辺がかゆくなる言葉をたくさん言われてるような気がしておりまして、ですね…』

そう言って、私は自分の胸の辺りに手を置いた。

「まぁ、クーン魔道師さまはそんなことをおっしゃられているのですね。意外ですわ。」

え?そうなの?私の記憶によりますと、しょっちゅうそんな事言ってる気がするんだけど。

もしかしたら、ここの人たちにとっては普通のことなのかもしれない。ほら、外国人ぽい感じだし、お世辞を言うのが当たり前とか。

私がいちいち気にし過ぎてるだけなのかも!そう納得。

『そか、そうだよね!お世辞なんだからいちいち気にしてちゃダメだって!』

わはははは、と大声で笑っている隣。

ミリアが頭に手をやって、悩ましげにため息をついたのは言うまでもない。そして。

「お気の毒に。」

そう呟いたのを、大声で笑っているネイが聞きとれるはずもなかった。

閑話？（前書き）

クーンさんサイド、再びです。

閑話？

はぁ、と一つため息。

先程飛び出して行った少女に声をかける事も出来ないまま、開け放たれた扉を閉めた。

さっき自分の口から出た言葉は、らしくないもの。

何を言ってるんだ、俺は。まるでおもちゃを取られて駄々をこねる子供みたいだな。

自分を省みるとはこのことか、と妙に腑に落ちて、椅子に座り直す。目の前の膨大な仕事を横目に、どうしても思考が別の方へ行ってしまう事実がそこにはあった。

ネイと出会ってから、大分日が経つ。夜の時間はお互いのことを知るのには最適な環境だった。

それに、ネイのあの艶やかな髪にも触れられる。見た目だけでなく、細くてサラサラと手からこぼれる髪は、本当に触り心地がよく、いつまでもな出ていたい気分にさせるものだ。

ネイに楽しみを奪うなと言ってしまうほど、気に入った時間。今日からそれがどうなる事やらと、いつもよりも進まない仕事に対してため息をついた。

とりあえず進めないと。今日からネイが屋敷に住むことになるんだ。夜遅くまでなど待たせてはおけんな。

気合を入れると、目の前のものに向き合った。

ハンコだけのものをすごい勢いで終わらせ、椅子の背もたれに寄りかかる。今日一日で大分疲れた様な気がしていた。

ノック音。それからドアが開いた。

「失礼いたします。お茶の用意をしてまいりました。一休みしてはいかがでしょうか？」

期待していた人物とは違い、もう一度背もたれに寄りかかる。普段ならば誰かに見せる姿ではないはずなのに、どうも力が入らない。

どうかしたんだろうか？普段の俺ならばこんな醜態見せたりしないのにな。

半ば自嘲気味に笑いを溢すと、調度いいタイミングでおかれたお茶に手を伸ばした。

「うまいな。」

「恐れ入ります。」

「…ネイはどうした？」

そう聞くと、さっそくですか、などと言われた。何か間違った事

を聞いたのだろうか？

「私が入室した際も、あからさまに残念な顔をしておりましたわ。」

そう…だったのか？意識していたわけではないのだが。

それよりも、元々は顔に出にくいと言われていたはずなのに、ネイが関わるとそうもいかなくなるのだな。

そう思い、自分に呆れる羽目になった。

「ネイさまは現在精神統一をすると言って、固まってらっしゃいます。」

何かあったのか？

そう思っただけのつもりだったが、口にしていたらしい。

ミリアの呆れた顔。いつもなら俺に向かってそのような表情はしないはずの完璧な女官だ。

そんなに変だったのだろうか？

「ネイさまはクーン魔道師さまのお言葉で心を乱しておいでです。それにしてもクーン様、ネイさまをあまりお苛めにならないで下さいまし。」

頼まれたようにそう言われても、身に覚えはない。

俺の言葉で心を乱す?何か変な事でも言ったか?思い返してみても、見に覚えがない。

分かることは、普段よりも格段に自分に正直になって、真っ直ぐ思った事を伝えていた、ということだけだ。

何がいけなかったのだろう?

「でも、私は応援いたしますわ。ようやく心をお砕きになれる方に出会えたのですね。

しかし、私からの忠告をお許しくださいませ。」

…なぜ、いろいろばれている?

疑問に思うことばかりだ。俺は顔に出にくいとみんなから言われていたはずだ。

と、言うことは。…ネイか?

「お察しの通りですわ。」

何故表情を読まれている?!半ば混乱に近い。

「ネイさまのこととなると、本当に分かりやすいほどお顔に出ております。

ところで、ネイさまのことですが、色恋に大分疎い方のようです。

クーンさまのお言葉で、この辺りがかゆいとおっしゃられておりました。その時にすべてお話になって行きましたわ。

クーンさまの事も、ご自分の事も。」

やはり、ネイだったか。あれほど分かりやすく、素直な娘はいないからな。

「…それで？」

先を促す。それはネイが自分の事も話したと言うから。

「私が言えることはここまでです。」

その思いはミリアには知られていたようだ。すぐに口を噤んでしまった。

「それでも、私は応援している事をお伝えしておこうと。何かあれば全て伺います。

ネイさまの内面を話すこと以外でしたら、何でも承りますわ。」

ミリアは丁寧に礼をすると、一度微笑んでから出て行こうとしてドアに手をかける。その途中でその動作を止め、俺に再び向き合った。

「ネイさまのはご自分の容姿に自信が無いようです。頓着がないとも言えますね。ですから、男性に言い寄られてもきっとお気づきになられないと思います。

クーン魔道師さまのお仕事を手伝いたいという熱意は、是非ともお受け下さい。

あと、リュクスさまが言っておられましたが、ネイさまは一度クーン魔道師さまの剣さばきを見てみたいそうですわ。」

どこで息継ぎをしたんだ…？

早口なミリアに驚く。

それよりも、ネイは自分の容姿に自信がない？

ありえない。あれほどまでに可憐であるのに。

気に入っている黒髪はもとより、あの黒い瞳は神秘的で惹かれる。吸い込まれそうになるほど透き通った純粋な色実を見せるそれは、とても大きくて愛らしい。

唇は果実のように艶やかで、赤い。

白い肌は触れると消えてしまうと思うほど儚く繊細で、華奢な身体は守りたいとつい思ってしまう。

身長が低く細いために最初は未成年かと思ったが、もう成人年齢は当に超している。

初めて砂漠でネイを抱き上げた時に、これほどまでに儚い少女がいるのかと思ってしまうほどだった。

男なら放っておかないであろうに、本人は自信が無いらしい。しかし、それは逆に役に立つ。

邪な思いは、そのまま顔に表れていた。当の本人は気付いていないが。

明るい性格、突っ走る癖。これは男から迫られても、天然攻防が期待できる。それに加えて色恋に疎いのであれば尚更だ。

そう嬉しく思いながらも、自分もその中に含まれていることに少し気を落としてしまった。

さて、どうしたものかと気にしつつも、目の前の仕事が終わらなければネイの髪に触れられる時間もやって来ない事を意味している。

…早いところ片付けよう。

そう思い、またネイのことで走らせるペンを止めた。彼女は成人している。あれだけ愛らしければ、元の世界に恋人がいたのではないのか？

…これは盲点だ。

そう気付き、もう一つ気になることができた。レークにニホンのことを話してはいるが、一向に寂しがるところを見ていない。

普通ならば、帰りたいと思うのでは？自分の故郷を思うことは当たり前だ。

その行動を一度も見せないとは、一体どういうことなのだろう？

何か事情があるのかもしれない。

今夜はこれを聞くことにして、そのためにも目の前の仕事を終わらせようと躍起になった。

おかげで捗ったのは無理もない。

閑話？（後書き）

彼が一番純粋でイイ奴なのかもしれません。

温かい家（前書き）

お気に入り登録が１００件をこえました！
ありがとうございます！！

「よし、終わった。」

クーンさんの一言にホッとする。

今日は私が初めて働く日だったから、大分迷惑かけちゃってたから。終わらなかったらどうしようかと思ったよ。

『いつもより早く終わりになったみたいですね。』

めまぐるしいほどのスピードだった。

私はと言えば、ミリアにお願いして各省までの道のりを教わって、書類を届けたり、お茶を入れたり、そんなことで一日が終わってしまった。

もっと、役に立つことしないと。そう意気込んで、やる気を明日へ持ち越すことにした。

「ネイがいたからな。よし、帰るとするか。」

さっと立ち上がると、エスコートをするかのように私に手を差し出してきた。

と、ここで戸惑う。いや、日本人としては戸惑って当たり前だと思う。

それに、私はクーンさん専属の女中だし…そのままフリーズしていると、ノック音、それからドアが開いた。

「ネイさまのお荷物をお持ちいたしました…何をなさっているのです？」

明らかに呆れたようなミリアは、半眼で見てきた。そんな事言われても、と心の中で言ってみたものの、それはもちろん届くことはない。

一時停止したかのように立ち止まっていた私とクーンさんは、ここでさっきの動作を止め、再生された。

「外に馬車のご用意はできております。ネイさま、また明日お会いしましょう。」

そう言うと、さっさと踵を返す。

ミリアらしいけど、いくらなんでも要点しか述べなさすぎじゃないですか？！って、混乱してるのは、さっきの微妙な空気の所為なんだけどね。

気を取り直して、何事もなかったかのように振る舞う。それはクーンさんも一緒。私は促されるまま馬車に乗り込み、お世話になるクーンさんの家へと向かった。

馬車は１０分足らずで止まり、到着した事を伝える。

クーンさんに続いて降りようとすると、慣れないものの所為か、バランスを崩してしまった。さっきと同じように手を差し伸べられ

たけど、今度は素直にその手を取ることができた。

ほわー、いかにも、なお屋敷ですなぁ。

古く、しかしどこか風情があって、造りがしっかりしているお屋敷を、私は馬鹿みたいに感心して眺める。

ほら、都会に初めて来た人が、街並みとか電車に驚く、あれと一緒。今までの生活からしてみれば、あり得ない家の造り。

本気で、中世ヨーロッパに送り込まれたんじゃないかって思っちゃうほど。

「ネイ?」

馬車から下りてからいつまでも突っ立っていた私に、どうしたんだ、と声がかかる。

どうしたもこうしたも、圧倒されてるんデスヨ。とか、言える暇もなく、私は促されて中に足を踏み入れた。

広い玄関、吹き抜け、正面の螺鈿階段。…映画のセットみたい。

どうも現実味がない。緋現実的過ぎるのかもしれない。

本当に、ここで生活してるの?

見慣れた無機質な部屋の造りが面影もないそこは、壮大過ぎる作り物のように感じた。

クーンさんのお屋敷の中は、城よりも生活館が漂っている。豪華だけど豪勢とは言えないそこにある調度品の数々は高そうだ。使いこんであって、逆に好感を持つ。

それに触れてみたい好奇心に駆られつつ、目の前の人物たちによってそれは阻まれた。

「お帰りなさいませ。」

うわ、リアルメイド！城にもいたけど、こっちの方が本当にご主人さまに仕えてます、的な感じ。私もこれからのために見習わないと！

「クーンさま、こちらのお譲さまは？」

不躾にもじーっと見つめていると、視線を交わすことなくクーンさんに疑問をぶつけている。

私、そんなに不審者っぽいのかな？

何だかいたたまれなくなって、視線を下へ向ける。こう言う時は大人しくして、クーンさんに任せておくのが一番だ。

「今日からここに泊ることになったネイだ。俺の部屋の隣が空いていたな？そこをネイに充てて、取り急ぎ湯あみの用意をさせてくれ。」

疲れているだろうから、と付け足された言葉に突っ込みたくなった。

それはクーンさんの方でしょ、って。あれだけ働いといて、私の心配って。自分の休息も考えて欲しい。

「まぁ、それならば先に申しつけておいてくだされば、お部屋をネイさまに合わせた可愛らしい飾り付けにできましたのに。

シュリキスさまはそんなことをおっしゃられませんでしたが、この事はお知りで？」

「…私は知っている。」

…宰相さま？！どうしてここに居るんだろう？

一人訳が分からない私に、クーンさんは後で話すと耳打ちした。

「ネイ、よく来たな。自分の家だと思って寛ぐといい。また後日ゆっくり話すとしよう。

私もネイの料理を食してみたい。その時はぜひ私も預かりはかりたいものだな。」

そう残すと、さっさとどこかへ行ってしまった。

…この世界の人たちはいつも急に現れて、いつもすぐに消える。心臓、びっくりしちゃうから。

でも、帰り方が見つからない今、ここでの生活を考えるべきだから、慣れなきゃいけないと思う。

…なんか、どっと疲れた。

それを顔に出さないようにしていると、さっきのメイドさんは私を部屋に案内してくれた。

『うわー…・・』

お屋敷についた時にも呆けちゃったけど、ここでもまた呆ける。

だって、広過ぎ…今までの価値観が崩壊しそう。

くるくる部屋を見回す。ここまでくると現実なんだって思うしかない。

「お気に召しましたか？」

私を面白そうに眺めて、そう尋ねてきた。一瞬ハッとして、一人じゃなかった事に気づいて急に恥ずかしくなる。私は動きを止めて、メイドさんに向き直った。

『あの…こんなに広い部屋を使わせてもらってもいいんでしょうか？』

「お嬢さまはとても謙虚な方なのですね。」

さっきの笑顔と違って、優しい微笑み。私はおばあちゃんを思い出してしまった。今、思い出したくなかったのに。

私は俯く。そうするしか対処法がなかったから。

いつも見たくないものから目を背ける癖は健在らしい。こうやって私はいつも逃げている。何かを察してくれたのか、声色に少しだけ変化があった。

「もう少ししたら湯あみの用意が終わります。これからしばらく滞在するようなので、このお部屋も少し飾らせて頂きますね。」

『あっ、いえ、私なんかのためにそのような事をしていただくわけにはいきません。』

語尾が小さくなる。メイドさんの目力に負けたから、目をそらしてしまった。

『ここに居させてもらえるだけで、十分なんです。』

私は多くを望んじゃいけない。他人の迷惑になるべくならないよう、他人の役に立つようにしなくちゃいけない。

「まぁ、本当に謙虚な方なのですね。しかし、クーンさまの命ですもの。おもてなしさせてくださいな。」

でも、という私を止め、さらに話し出す。

「謙虚な事はお嬢さまの美徳だと思います。しかし、他人の家に世話になる事を考えてみてください。

おもてなしとはされるもの。それを受けなくては失礼にあたると言う事を覚えて下さいまし。」

『…はい。』

私にとってその言葉は重くのしかかった。言われた事は的を射ている。私は、失礼なことをしてるんだってこと、考えてもいなかった。

それに…ここはあの場所とは違う。きっと、考え方だって違うはず。

「そんな顔はなさらないでください。女中どもはお嬢さまがいらして下さったこと、実に喜んでおります。

この家のお譲さまは早くに嫁がれてしまったので、物寂しく感じたいたのです。」

にっこり笑顔はやっぱりおばあちゃんを彷彿とさせた。

「男だらけではむさくるしいか？」

ひ！急に声が？！

と、思ったら、クーンさんが入口に立っていた。

いつの間に来たんだろう？

着替えたらしく、公務の時よりもラフな格好。それでも現代的なものとはだいぶ違っていた。

「いいえ、そのような事は申しておりません。ただ、楽しみが増えた、と。」

一触即発?

主従関係が成り立っているはずなのに、どうも火花が散ってるように見えた。

腕を組んでいるクーンさんは、若干威圧的。一方、女中さんは相変わらず微笑みを浮かべたままだ。お互いに纏っている空気に温度差がある。

どうしたものか、仲裁に入るべきか、と考えていると、一言声をかけて女中さんは出て行ってしまった。

もちろん残されたのは二人。クーンさんはお風呂に入るように言うと、一時間ほどしたらくると残して出て行った。

部屋に、今度は一人ぼっちで残る。

とりあえず荷物を抱えてソファーに座っていると、奥の扉から女中さんが数人出てくる。どの人も30代ほどで、やわらかい笑顔を浮かべているから好印象だった。

「湯あみのご用意ができました。」

私ははい、と立ち上がる。そこへ向かうとその人たちは笑顔を浮かべたまま、その場を動かない。

どいてもらわないと入れないんだけど…?

え？と思っていると、一瞬で服を剥ぎ取られた。

『えっ、ちょっ、まっ……！』

止めようとした声を遮られ、お手伝いしますの一言。ひ、一人で入れますー！

温かい家（後書き）

感想を頂けると嬉しいです。

ネイの心、クーンの思い

…疲れた。お風呂に入ったはずなのに、疲れた。

一人では入れるのに、花の浮かんだお風呂に入れられ、隅々まで洗われた。良い匂いがするから、その点に関しては嬉しいけど、死ぬほど恥ずかしかった記憶しかない。

髪にもなんか塗り込もうとしてたけど、クーンさんがいつも乾かしてくれる事を述べたら、違和感の残る笑顔をして早々に切り上げて行った。

全て済んだことの安心感から、白いキャミワンピのようなものを着せられてるけど、そんな事を気にすること無くソファーにだれる。

身体がぽかぽかする所為か、うとうとしてきた。でも、クーンさんが後で来るって言ってたから、まだ寝ちゃいけない。

そう思ってはみたものの、ついうとうとする。夢半ばになったとき、ノック音が聞こえ、いけないと思って姿勢を正して返事をした。

「悪い。起こしたか？」

いえ、と一応。顔から半分寝てたことなんてばれてるんだろうけど、それでもやっぱり一応。

当たり前のように私の所へやってきて、いつものように髪を拭っ

てくれる。これにはホッとした。

さっきまで、3、4人に囲まれてお風呂に入ってた。恥ずかしいったら無い。

でも、クーンさんに髪を乾かしてもらうのは、最初は恥ずかしかったけど、今は心地いい。眠りを誘う心地よさを押さえながら、今日も話をした。

「ネイ、聞きたいことがあるんだ。」

神妙な面持ちであろうことが、雰囲気からして分かる。私は何を聞かれるのかと身構えた。

「ネイは…どうして元の世界に帰りたいと言わないんだ?」

その言葉はずっしりと胸の奥に圧し掛かった。

それは今まで黙ってきたこと。…触れられたくなかったこと。

俯いて、何も言えない。それは私の黒い部分だから。

『聞いたらきっと、私のこと嫌いになります。』

だから、聞かないで欲しいと願う。ここに来てからの私を、今の私を知ってくれてる人だから。私を嫌って欲しくない。

嫌われたら、今度こそ立ち直れない。

「何を聞いても、俺がネイを嫌いになることなど有り得ない。ネイ

こそ、俺の話を聞くと、きっと俺を嫌いになるさ。」

話したくなければ話さなくていい、と言われ、迷う。

私を嫌わない？

…でも、それは“絶対”じゃない。

だけど、私もクーンさんの事情、気になってた。昼間のおデブさんが言ってた事もあるし。

『私が私のこと話したら、クーンさんもクーンさんのこと教えてくれますか？』

それにＯｋを貰えたから、私は正直に話すことにした。

『私…いらない子なんです。』

つい最近までのことだったんだけど、何とかその輪から脱した。それでも、関係性は切れないから、この世界に来れたこと、実は心から嬉しく思ってる。

『私の両親、離婚してるんです。その時、どっちが私を引き取るのか言い争ったの。

…二人とも、私のことといらないから。お互いに押し付け合って、別れてからもずっと喧嘩し続けてました。

結局、父方の祖父母に引き取られました。』

そこまでは辛かったけど、捻てた訳じゃない。おじいちゃんもおばあちゃんも優しくて、私は両親のどちらかに引き取られなくて良かったって思ったし、今まで生きてた中で幸せだった。

でも、問題はその後のこと。

『祖父母が事故で亡くなって…私はまた行き場を失いました。結局父に引き取られたんですけど、それは世間体があったからで。

本当は新しい家族がいたから、私は邪魔者だったの。』

ここまでくると、自嘲気味に笑うしかない。泣かないようにするためには、そうすることで紛らすのが一番だから。

『高校生になって、家に居辛くなってバイトばっかりして。早く家を出たくて、遠くにある大学に合格を貰って、家を出たんです。』

いつの間にか髪を拭っていた手は止まり、頭をなでる動作に変わっている。

クーンさんは何も言わずに、ただそうしてるだけだった。それに身を任せるように、私はクーンさんの胸に背を預ける。体温が、少しだけ私の心をほぐしてくれる気がした。

『非行に走らなかったのは、多分心のどこかで期待してたから。でも、やっぱり私はいらない子に変わりなかった。

昔から、何をするのも苦にならない性質だったんです。勉強も、運動も、努力とかしなくても簡単にできちゃうから、不器用な妹と

比べる対象に必然的になる私は邪魔者。

妹は慕ってくれたけど、あの人たちは自分の娘より何でもできる私が嫌いだったみたい。』

あの時の目。私が何をしても褒めてくれなかった。だから、途中で諦めたの。半分血はつながってるけど、赤の他人。

腹違いの妹だけど、年の離れた知り合いの女の子。

ただそれだけの関係で、私は単なる居候。そう考えるようになってた。

『そんな人たちと縁を切りたくて、遠くの学校に入ることを決めました。離れたいと思って遠くへ逃げたけど、知らない世界に来たんだったら、もう会う事もないから。だから、帰りたい、って言わないし、思いもしてないんです。』

ここまで言って、やっぱり根っ子の部分はいつまで経っても変わらないな、と思った。

クーンさんは何も言わない。逆に言われなくて良かったって思う。それに、何を言うにしても困る内容だって分かってる。

次は俺の番だ、というクーンさん。だから、俯いてた顔を上げて、クーンさんを見た。

「宰相殿がここに居たことに驚いていただろう?」

その問いに、正直に頷く。クーンさんは、私の頭をなでる手を休

ませること無く、口を開きだした。

「俺は…宰相殿の養子だ。」

随分気心が知れた仲だと思ってたけど、そう言うことだったのか、と思った。思っただけで、口は挟まない。

「俺の元々の名はクーン・リッキンデル・デューク。現国王陛下は俺の腹違いの兄にあたる。」

?!

ってことは、だ。

…クーンさんって、ひょっとしなくても王族の血が流れてるってこと?

うん、なんか分かる気がする。纏ってる空気とか、品の良さが滲みだしてるから。

「母上は身分が低かった。先王は単なる遊びだったみたいだが、母上に手を出した。そんな関係だったために、先王は俺の認知を拒んだ。」

私と、少しだけ似てる。親に拒まれた時、クーンさんは何を思ったんだろう?

「母が亡くなってから、俺を引き取ったのが王家の親せきにあたる宰相殿だ。幸い兄上との仲は悪くなく、俺は兄上の役に立ちたいと

思って今の役職にこぎ付けた。

実際は余計な仕事や貴族たちの小言で精一杯だが、これから努力して、兄上の片腕くらいにはなってやるつもりだ。」

…すごい。私は捻てるっていうのに、クーンさんは目標すら持ってる。

さっきクーンさんが私の話に触れなかったのと同じように、私もクーンさんの話には何も触れなかった。

それから他愛もないことを話してたら、いつの間にか寝ちゃってたみたい。朝目が覚めたら、ベッドに横たわって布団がしっかりかかっていた。

きっとクーンさんが運んでくれたんだよね。お礼、後で言わなくちゃ。

さて、どうしたものか…

今日も一日頑張るぞ、と意気込んだはずなのに、その途端から力が抜ける。私は昨日初めてここに来たわけで。何がどこにあるか、とか、昨日来てたカスタムメイド服がどこにあるのか、とか。諸々知らない。

つまり、どうしていいのか分からないってことにつながる訳だ。
と、タイミング良く昨日のメイドさんがやって来た。

「よくお眠りになられたようですね。本当ならばもう少しお休みしていただきたいところですが、クーンさまと共に城へ行くようですから、失礼ながら起こしに参りました。」

私なんかに敬語使わなくても、って思うけど、おもてなしは受けるもの、だから。私はありがとうございます、と礼を取った。

顔を洗って着替える。やっぱりカスタムメイド服は目立つらしく、気にしていた女中さんにどう作ってあるのか教えて欲しいと頼まれ、それに了承した。

そのまま誘導されて大広間へ。

朝ごはん、らしいです。

でも！やっぱり広すぎ！

みんなでご飯を食べるには、少々（大分）広い部屋。パーティーを催す際に、この位の広さがなきゃダメなんだってさ。貴族って大変なんだね。

お誕生日席に宰相さま、その向かいにクーンさん、右手に奥さまがいる。私は失礼ながら、空いてる席に腰を下ろした。

「ネイ、よく眠れたか？」

おはようございます、と言ってから質問に答える。挨拶、大事だからね。最優先。

『はい、とても。』

宰相さまは満足げに頷き、奥さまを紹介してくれた。

奥さまは、まさに貴婦人、そのもの。微笑みも言葉遣いも、所作も。全てが柔らかくて優雅。

「クーンが女性を連れてきたと聞いて、とても驚きましたけど、とても愛らしい方で嬉しく思いますわ。」

クーンさん、モテそうなのに、女の人連れて来たこと無いんだ。

あ、でも、生活してて中世ヨーロッパ的な雰囲気（映画情報）だったから、私のいた現代とは違って、簡単に交際するってわけにはいかないのかもね。

「これからも、クーンをよろしくお願いしますね。」

頭を下げられて私もつられる。

『私、クーンさんにお世話になりっぱなしなので、少しでも力になれるように頑張ります。』

頭を上げるように声をかけられる。だから、ゆっくりと上げると、微笑み続けている奥さまがそこにはいた。

「母上、公務の時間が迫っています。ネイを苛めるのはそのくらい

にしてあげて下さい。」

いつの間にか宰相さまとクーンさんはご飯を食べている。いつもクーンさんが私の所へ来てくれていた時間を考えると、確かに時間ないかも。

私は慌てて手を合わせてから食べ始めた。

「まぁ、私は苛めてないわ。心外ね。情けない息子のことをお願いして何が悪いのです？」

あら？意外とおっとりしてないかも。

ズバズバ言う奥さまに、クーンさんはたじたじだ。面白いもの見れた気がする。

奥さまに口撃されているクーンさんを見て、私と宰相さまは目を合わせて笑った。

どうやらいつもの事らしい。

一方的な口論になっているその横で、私はのんびり宰相さまとお喋りしながら朝食を取ることができた。

口撃

『奥さま、意外と毒舌なんですね。』

馬車に揺られながら、ぐったりしてるグーンさんに話しかける。
朝から随分とお疲れなようだ。

『疲れているようなので、後で甘い物でも用意しますね。あ、それと、今日のお昼ごはんも用意しますか？』

「甘いものはあまり好きではないのだが…」

甘いものが好きじゃない？！ダメダメ！疲れてるんだから、少しでも糖分とらなくちゃ。

「昼は任せる。ネイの作るものは面白いし、美味いからな。」

そう言われて嬉しくなって、いっぱいの笑顔でハイと答えた。

昨日、あんなこと話したのに、変わらない態度。嫌われてない気がして嬉しかった。

城に到着してまず出迎えてくれたのはミリア。ミリアに連れられて昨日の女中部屋へ。そこに居たマーサさんは笑顔で迎えてくれた。

「昨日はよく眠れたかい？」

『はい。』

それはよかった、と言い、クーンさんに早速お茶を持っていくように言われた。

カチャカチャを立てながら用意していると、今日も陽気なエルさんが鼻歌交じりで登場。朝の挨拶を交わしたのに、まだそこに留まって私を気にしている。不思議に思っていると、今日もクーンさんの昼食を作るのか尋ねられた。

「ネイの料理は興味深いし勉強になる。是非作るところを見せてくれ。」

なるほど。マヨのことごまかしちゃってたから、そりゃ得体のしれないもの作る人が気になるのも仕方ないよねぇ。

『了解しました。また後ほどここに参ります。』

カラカラとワゴンを押して向かう途中、やっぱりカスタムメイドは目立つみたいで、じろじろ見られたけど、たじろぐことなく丁寧に礼をとってから進む。

世の中気にしなくていいものは気にしない。人の視線なんて一番気になるけど、文化が違うとこに居るんだもん。気にしたら負け。

視線なんて素知らぬふり、を通してクーンさんの執務室に着くと、お茶を丁寧に淹れる。

仕事前だもんね。

美味しいお茶で心を落ち着けてからの方がいいはず。

湯気の上がる紅茶を持っていき、優雅に呑むクーンさんを眺める。

ほんと、いい男。恋人の一人や二人、いてもおかしくないだろーに。

クーンさんがお茶を飲み干そうとしたその時、ノック音が広い部屋に響き渡る。どうやら仕事の時間みたい。

私は急いでカップを下げる。扉は返事を待たずに開いた。さっきより慌てて昨日用意した机に着く。説明を任せてもらうことになってたから、ぐっと身構えた。

『おはようございます。』

丁寧にまずお辞儀。次に頭を上げて、笑顔を浮かべる。

『各省の名が書いてあるカードの所に書類を置いていただきたく思います。クーン魔道師さまに説明が必要な方は、そちらへお並びください。』

何ら訝しげな顔をされる。

うん、そんな気はしてたから、覚悟はできてる。だから、私は笑顔を絶やすことなくそうするように促す。それでも反発する人は必ずと言っていいほどいるわけで。

早速その声が上がった。

「なぜ我々がそのような事をしなければならない。」

おおっと。

一際高そうな生地で作られた服を見に纏っているおじさんに、お小言ちょうだいしましたー。

あの人はきっと、身分が高い人。

近づいてきて私の前に立ち、じろじろと頭のてっぺんからつま先まで見る。

…省の名前、見えた。だからこそ、この人がなんでこんな態度を取るのか、ここで納得した。

曲がりなりにも、クーンさんは省をまとめる筆頭くらいの地位に居るはず。若いからと言って、失礼な態度を取っていいはずがない。

昨日、ミリアにいろいろ聞いといて正解だった。

この省の人は元々議会に居た人が多く、王族に反発気味。今の王に代替わりした時に、失脚させられたのを根に持ってるんだって。

…自分が悪いことしたくせに。

いかん、いかん。

自分の黒い感情を心の引き出しに収めつつ、笑顔を引きつらせないように気を引き締めた。

『失礼ながら申し上げさせていただいてもよろしいでしょうか？』

そう言ってから、さらに続ける。言ったのは建前。返事を待たないまま自分の思った事を述べていく。

反論させない勢いで。

『クーン魔道師さまが毎日膨大なお仕事をなさっている事はご存知ですよね。

あのお方は大変勤勉な方で、自分の持てる力、全てを使ってこなそうとするお方でいらっしゃいます。

それ故に昼食を取る時間も惜しんで働いておられます。』

「だが…」

喋らせませんけど、何か？腹黒万歳ですよ。

こんなことで自分の性格の悪さが役に立つんなら、露見するのだって恥ずかしくない。だいたい、私が言ってるのは正論だもん。それを盾にするくらいの事はできるはず。

『立場的にそう言う方なのは存じ上げております。

しかし、どんなに努力を惜しまず、働き者である方も、人間は人間なのです。

体力的にも精神的にも、必ず限界があるのです。それに、クーン

さまは書類調整のお仕事に留まるだけでなく、騎士団長としても働かなければなりません。それにも関わらず、現在はそのお時間がございません。

夜中までかかって机に?り付き、翌朝には誰よりも早く登城して執務室に居らっしゃられる。食事もままならず、睡眠もままならない。

それでもこのお方が倒れないとでもお思いでしょうか?』

ぐっと押し黙る顔を満足して見つめる。その間も笑顔を絶やさない。

後ろの人、引かないでー。私は事実を述べてるだけだからー。

「…それでも、それが仕事というものだろう。」

まだ言うか。まだ言いくるめられなくちゃ気が済まないのか?そーか、それなら受けて勝つのみ。

またにっこり笑って続けた。

『先程も述べましたように、クーンさまの仕事は机上のみではないのです。

机に縛り付けられている時間を短縮できれば、クーンさまの身体を労わる時間が出来ますし、さらなる騎士団の強化にも希望が望めます。

それに、夜中に届く書類はそちらにとっても好ましくないのでは

ないでしょうか？』

訳が分からん、って顔すんな。いや、あんたは帰るんだろうけどさ。他の人たちは納得してくれてるみたいだから、夜遅くならない方がいいと思ってるんだって。

『ちょっとしたことで時間を取られない方がいいのです。何事も効率が大切ですから、今私とこうして言い争っている時間も勿体ないとは思いませんか？』

そう言った瞬間に、人々は並んで書類を置いて行ってくれる。一方、私の口撃を受けたおじさんは顔を真っ赤にしている。けど、私は素知らぬふり。

そして腹黒いですから、追い討ち掛けますよ、純粋っぽく、天然っぽく。

『書類、お預かりいたします。それと…出過ぎたことを申しました。どうかお許しください。』

書類を受け取って頭を下げる。おじさんはさらに顔を真っ赤にさせて、出て行ってしまった。

あら、もっと怒らせちゃった？…ま、いいか。

そのことで周りの人はより一層機敏に動き始め、書類を重ねていった。

書類が積まれていく机を見ながら、クーンさんが説明を受けたも

のを封筒に入れる。後で分かりやすくするために。

いつもよりも一時間も早く列が片付いたとクーンさんが言った時、ちょっとだけ嬉しくなった。

「その封筒は？」

ああ、これか。

『届ける書類用に作ってみました。一定量が済んだら、説明が必要なもの以外は私が配達しますね。』

ここまで用意して、やる気満々！なのは、よかったんだけど、もう書類の分類が済んでるから、やることなんて無くて。

『…ヒマ。』

思わず独りごちる。横目でペンを走らせているクーンさんを見て、嘆息した。

『クーンさん、何かお仕事ください。』

邪魔して悪いけど、暇すぎる。

昔から生徒会、バイト、勉強と忙しい事に慣れてたから、やることがないとどうも落ち着かない。

一昨日まではレークさんと話してたから、一応はやることがあっ

た。でも、今はこの部屋にはクーンさんと私しかいない。

それに、集中して仕事してるのに、雑談なんかしてうるさくするわけにはいかない。

『やることがないと落ち着かないんです。』

良く言えば働き者、悪く言えば落ち着きがない。

足をじたばたしてみる。さっき、クーンさんに椅子に腰掛けてろって言われた。本当は女中だからって断ったんだけど、許されなくて座らさせてんだよね。

…思ったけど、クーンさんって過保護?ってな訳で、手足がフリーな私は、とりあえず軽く暴れてみることにしたんだけど…

そんな事は敢え無くスルーされた。

「俺としては、届けに行かせるのも好ましくないんだが…」

え!これ以上やること奪うんですか?!やってられないよね、私。てゆーか、迷惑だったのかな。

そう思って質問してみても、そう言うことじゃないと言われて終わりだった。なのに、渋い表情が目に焼きつく。

どう言う意味なんでしょう…?

異文化

結局やることがなくてクーンさんの執務室を後にした。

とりあえず、女中部屋に向かう。もしかしたら何かやることあるかもしれない。と、思ったのに。

「ネイさまにやらせるなんて、いくらなんでもそれだけは聞き入れられません！」

頼みの綱だったミリアに、一蹴された。どれだけ懇願してみようとも、頑なミリアは折れてくれない。

最終的に、は私は客人だからと断られる羽目になった。

「今日もクーンさまの昼食を作るおつもりなら、早々に厨房へ向かわれたらいかがでしょうか？」

ミリアのアドバイスは私を閃かせたけど、どうもここで疑問。

『私が行ったら邪魔にならないかな？』

そうでなくても城内中の人の食事をあそこで用意してるらしいんだもん。流石に私的欲求を満たす為に使っちゃダメでしょ。

とか何とか言いつつ、昨日は使っちゃってるんだけどね。

「いつも紅茶を用意している場所なら、使用は可能ですよ。器具と

材料さえエルさんに用意してもらえれば、何とかなるはずです。」

…エルさん、何者？てゆーか、厨房で仕事しなくてもいいの？

不思議に思って訊ねると、続けざまに意外過ぎる答えが返ってきた。

「エルさんは料理長です。」

なに？！そんな偉い人だったの？！

『どうしよう！私、すごい気軽に接しちゃってた。失礼過ぎだよね？』

「大丈夫です。」

焦る私とは裏腹に、ミリアは至って冷静。

「エルさんは決して私たちを見下したりいたしません。“様呼びはやめてくれ”とおっしゃられて、今ではみんな気兼ねなく話すことができる、とてもよいお方です。」

そう、なんだ。うん、そっか。なんかそんな感じだよね。見ず知らずの私にまで気さくに話しかけてくれたような人だったし。

でも。

『…料理長パシらせちゃった……』

一番のしこりはこれ。

昨日全てを用意してくれた事を思い出す。あれは流石にひどかったよね。

“パシらせ…？”と呟くミリアに、こき使う事だと教え、うなだれる。確かに知ら言いものだったり、場所だったりしたし、無理もないんだろうけど…

「エルさんはネイさまの料理の興味がおありですし、むしろ手伝わせてほしいと言うはずです。」

そう言われて、厨房まで押しやられる。エルさんを呼んでおいて、ミリアは楽しそうに去って行った。

「今日は早かったな。で、何を作るんだ？用意するものは？」

キラキラした瞳にさっきの話を重ね合わせてみても、どうも料理長には見えない。

そんな失礼極まりない事を考えながらも、やることはやろうと思って、腕まくりをした。

『うーん、何作ろう…』

全く持って何も考えてなかった。でも、今日は昨日よりも時間できそうだし。がっつり食べる時間くらいあるでしょう。

なんて、無責任なこと考えたりして。それだけじゃなく、ちゃん

とお腹いっぱい食べて欲しいって意味もあるんだけどねぇ。

それに、さっきミリアからの言伝で、お昼はレークさんも一緒だって言ってたし。

うん、軽食じゃなくて、普通のご飯にしよう。

『エルさん、マヨネーズの作り方、知りたいですか？』

次の瞬間のエルさんは、まるで小さい子供みたいに大きく頷いていた。

そんなに首振ったら、もげるよ？と思いながら、昨日とほぼ同じものを用意してもらって、順を追って説明をしていると、やっぱり素人の私と違うエルさんは、料理人の手つきを披露してくれた。

『これ、生野菜にも温野菜にも合うんですよ。あとは炒め物、肉でも魚介類でもどんと来い、です。』

ほう、と目を細めて考え込んでいる。私は構わず先に進むことにした。

鍋で骨付きチキンを炒め、水と野菜とハーブを加えて煮込む。だけど、大雑把な料理に見えたのか、意識をこちらに戻してきたエルさんは心配そうにしていた。

「ネイ、本当にそれは大丈夫なのか？」

それ＝骨。こんな料理方法は未だかつて見たことがないらしい。

『ここから良い“ダシ”が出るんです！』

「だし？」

もう！なんでこんなに料理基準が高くないの？！

『ダシは料理の基礎を支えるものです。これが美味しくなくっちゃ、味に深みが出ませんから。』

とか何とか言いつつ、最近見た某テレビ番組の何とかタロウさんの作り方を思い出していた。

ホント、テレビって便利だよねぇ。

野菜やミンチ状の肉を練っていく。つまりはハンバーグなんだけど。

こっちでは、肉は単にステーキとしてしか出されないらしい。勿体ないよね。いろいろと食べ方があるのに。

今度、鶏団子が入ったお鍋でも作ったら、エルさんは驚いてくれそうだな、なんて、不敵にほくそ笑みながら企んだ。

今日は残念ながらソースもケチャップも置いて来ちゃったから、塩コショウのみ、って思ってたんだけど。

エルさんが、サルーテとかいう、こっちの調味料をかけたらいいと教えてくれた。

味見してみたら、美味しい。

こんなのがあるんなら最初から使えばいいのに、って思ったけど、どこかの民族のものだから、お貴族さまたちは好まないんだってさ。

食べ物にまで上流とかそんなモノ押し付けなくてもいいのにね。美味しいものは美味しいって言えばいいじゃん。

こっちにはチーズもあるって分かったんだけど、これもまた民族のもの…後は省略。ハンバーグにはチーズが合う。高カロリー万歳な感じだけど、美味しいものに目がない私には、関係ないよね。

お昼にはまだ早いから、それはひとまず置いといて、今度は甘味に移る。食材は何となく揃ってそうだけど、食感が珍しいだろうと思ってプリンを作ることに決めた。

とか思ってたまご割ったら失敗。赤いの開けちゃったから。赤い卵は、何ともグロかったけど、温めたミルクを入れた時点で、ピンクになって安心した。

普通のには、カラメルを下に入れた。これなら、甘いのが苦手だって言ってたクーンさんにも食べられると思って。もう一つは、昨日迷惑をかけた人たちに渡す分。これは、上に砂糖をかけてブリュレまがいのものにしよう。

言葉が悪いのは、私の表現力のせい。まずいものは作ってない、はずだから、安心して欲しいところだ。

蒸し焼きにするようにオーブンに入れ、今度はスープへと意識を向ける。

灰汁を取って、ハーブやら野菜やらを取り除く。新しく切った野菜を入れ、塩コショウで味を調えた。

うん、コンソメスープの素を使わないで初めて作ったけど、なかなかのできだ。野菜が柔らかくなるころには、いい匂いが辺りに立ち込めていた。

「…良い香りだ。」

覗き込んで、興味津々な様子を隠しもしていない。

『味見、しますよね？』

いいのか、って聞いてきたけど、どう見てもそうしてみたいって顔に書いてあるし。それに、私も味見くらいしなくちゃ、今回は保証できないしね。

小皿に少し掬うと、私とエルさんは同時に味を見る。…少し薄いかな、と思って塩を足し、もう一度味見をしてみると、今度はちょうど良かった。

「…ネイ、こんな上手いもの、初めて食べた。」

呆然としているエルさんに、この国の料理の発展がどれほどなかったのか、確信を得た。

思ったけど、（この世界の人って言ってもまだ数人にしか会ったことないけど）ここの人は新しい事に挑戦することをしない。それは、私にとっては一つの怠惰に思えた。

『何事も挑戦することが大切ですよ。未知の発見ほど面白い事はありません。

…私のいた世界では、宇宙や過去に対して以外はたくさんの事が解明されて、子供たちはそれを学んでいました。それじゃ、つまんない。分からないことが分かるようになるのが、楽しい事なのに…』

「ネイ?…思い出したのか?」

は!そうだった。私、記憶喪失（設定）だった!

今さら難しいだろうと思ったけど、何とか濁す。

『…私、今なんて言いました?』

言い訳、きつかったよね。どうしよう、なんて考えていると、タイマーが鳴った。

…助かった。私は急いでオーブンを開けると、天板を取り出して、固まり具合を確認。そして、満足。後は冷やすだけだ。

けど。

『エルさん、これって冷やせますか?』

「ああ、厨房の方に、少しだけだが、魔道を使えるものがいる。冷却の魔道をかけてもらえば、すぐにでも冷えるさ。で、それは食べられるのか?」

プルプルしているその動きを訝しげに見ている。それでもその動

きが不思議なのか、面白そうにも見える。

てゆーか、食べ物で遊ばないでよ。

『そうですよ。デザート、いや、おやつですね。クーンさんが随分とお疲れになっているようだったので、糖分を取っていただこうと思って。』

あれだけ働いてるのに、私の面倒まで見て。尚且つちゃんとした食事を取らなくちゃ、いつか、いや、近いうちに絶対に倒れる。それを回避することが唯一私にできること。

そう使命感を勝手に持った。

「…ネイ?」

一人の世界から呼び戻されると、そこには知らないおじさんがもう一人。いつの間に来たんだろう。

「で、どのくらい冷やすんだ?」

訊ねられて、困ってしまう。基準って言っても、ここの温度の単位なんて分かんないし。℃なんて伝わんないよね。

しばらく考えて、それから。

『抽象的な言い方になっちゃうんですけど、山に流れる川の水、くらいですかね。

室温よりも全然冷たくて、食べる時にひんやりするくらいがいい

んですけど…伝わりましたか？』

おじさんにおずおずと言った。自分の表現力の無さに嫌気がさしたのは。言うまでもない。あんまりにも言葉があいまい過ぎたから、心配だった。

「大丈夫ですよ。」

そう言って、にこやかな表情を浮かべたまま、冷却の魔法をかけてくれた。

魔法って便利！見た目は変わってないけど、器に触れると冷やっとしていた。

異文化 - その2 -

『あのー……』

調子に乗った私は、ピンクのプリンの表面に乗せた砂糖を焦がして貰った。本当に便利だ。

って、貴重な力をこんなことに使うなんて、やっちゃいけないんだろうけどね。

反省してるのかしていないのかはさて置いて、私は感謝を行動で表した。

『お二方とも、これ、たくさん作り過ぎちゃったんで、よろしければお一つどうぞ。』

手伝ってくれたお礼。これがお礼って言うのも、料理人の二人には失礼な話かもしれないけど、今の私にできる事はこれだけだから。

「いいのか？実はさっきから、どんな味がするのか気になっていたんだ。」

昨日のサンドイッチ、今日のスープの如く、エルさんは目を輝かせている。それを見て横に居るおじさんは、もっと優しく微笑んでいた。

「色が違うが、味はどう違うんだ？」

そっか。赤い卵なんて、使うの初めてだったから、味のこと考えるの忘れてた。赤いからって、辛い訳ないよね？

恐る恐る聞いてみたら、たまごの味自体はあまり変わらないけど、赤いほうが濃厚なんだとか…色は私的には受け付けられないけど、どうやら味の保証はされてるみたいだ。

『黄色い方は、下にほろ苦いカラメル、というものを入れています。クーンさんがあまり甘いものを好まないと言う事で、食べやすいように甘さを控えてあります。

もう一つは、表面の飴を割って食べていただく形になります。こちらは下にカラメルが入っていないため、少しばかり甘くなっています。』

私の説明を、エルさんはふんふんと腕組みをして聞いている。おじさんも興味を持ったのか、二つを見比べて、私の見慣れた方を手に取った。

「…ネイ、両方食してみたいのだが。」

迷いに迷ったのか、言い辛そうにそう言ってきた。

「相変わらず、料理長は食い意地が張っておられる。」

おじさんはやっぱり笑顔。しかし、言葉には確実にからかいが含まれていた。年の功ってやつかな。

「ち、ちがう！両方の食感を確認してみたいだけだ！」

焦ってるのか、噛んでるし。顔も赤い。おじさんがエルさんをからかうの、なんか分かるなぁ。反応が面白くて。

ほほえましく思いながら、私は両方勧めた。

『どうぞ。食べてみてください。私も感想が聞きたいですから。今お茶を入れるので…あ、時間大丈夫ですか？』

勝手に話を進めようとしてたけど、二人とも厨房に戻らなきゃいけないはず。でも、５分や１０分は大丈夫だから、と近くの椅子を引っ張ってきて腰掛けていた。

それを見て安心。今までで一番手際よくお茶を淹れ、二人の前に出す。スプーンを渡すと、二人は早速食べ始めた。

「ほう…これは。」

さっきまでは目が笑っていて細かったのに、今は真ん丸く見開かれていた。

「ネイ、流石だ。美味いよ。このプルプルとした食感。ほろ苦いカラメル。冷たさもちょうどいい。」

さっきまでの焦ったような姿はどこにもなく、しっかりと味を確かめるようにしている。料理をしている人のそれだった。

プロに批評されるのって、ちょっと不安。

次の言葉を待っていると、もう一方のプリンに手を付ける。上を

割っている姿は、何とも楽しそうだ。それから、一口含み、味わう様子を見せた。

「食べる前も楽しく、食べてからも二つの食感が楽しめるとは面白い。」

お気に召してくれたようですね。

その表情に私は安堵した。

「ネイ、悪いんだが、これを三つほど分けてくれないか？是非とも食していただきたい方がいるんだが。」

それは全然構わないんだけど、気になることが一つ。

さっきまでの砕けていた口調が、“食していただきたい”と丁寧になった事だ。身分の高い人に食べてもらうのかなって、不安になる。不安に思ったことは、見事に顔に表れていたらしい。

「量が減ってしまうのを心配しているのか？」

返事に困っている私は、そう思われていったのか、と弁解するために口を開いた。

『量は構わないんですけど、もしも高貴な方が口にするのなら、お口に合わないんじゃないかと思って。

クーンさんとレークさんと私、あとミリアとマーサさんと宰相さまにも上げたいから…最低六個残っていれば構いません。けど、新鮮なものを提供したいのであれば、もう一度作りますけど。』

「そうか！それならば、クェーカーの方で、下にあの苦いカラ…何んとかってのを入れてくれ！」

“カラメル”が言えなかったね。てゆーか、私は私で聞き取れない単語に戸惑うばかりだ。

“くぇっ…？”と、何かのない声みたいになっちゃったけど、私からしたら発音しにくいったらありゃしない単語だったから仕方ない。

「クェーカー。赤い方の卵だよ。」

ああ、またあの血みたいな卵を見ることになるのね。少し凹みつつも、食後のデザートだって事なので、すぐに取り掛かった。

付け合わせと、ハンバーグも同時進行でし上げつつ、赤い卵は目を逸らしながらかき混ぜる。

うん、いつか…要は“いつか”慣れることを目標に頑張ればいいよね。

クーンさんたちのお昼ごはんを仕上げ終わると、ちょうど良く昼時のチャイムが鳴り響いた。その時、いつの間にかエルさんもおじさんもいなくなっている事に気付き、驚く。集中してて、いついなくなったのかも分からなかった。

そう思いつつも、クーンさんもエルさんも待ってると思い、食事をワゴンへと乗せる。

温かいうちに持っていきたいから、急がなくちゃ。

けど、そこでエルさんに声をかけなくちゃと気付き、厨房に顔を出すと、とんでもない状況が広がっていた。

「おい、早くこれ片付けろ！」

「パンが出ていないぞ！」

うへぇ…まさに戦場。

私はここじゃ働けないな、と思った。

「ネイ！どうしたんだ？」

あまりの圧巻に、呆然としていた私に声をかけ、エルさんはさっきの女中専用の台所へと来てくれた。

『プリン、できました。後は冷やすだけになっていますから。』

「わかった。わざわざすまんな。後でまた話そう。今は落ち着かないからな。」

それは見たから知ってます。みんな忙しそうだったし、今はエルさんがいないからもっと大変だろう。

私は了解し、エルさんを厨房へと追い返した。それからワゴンを

カラカラ押して執務室に入ると、レークさんが目に入る。

もう来てたんだ…今って忙しいって言ってなかったっけ？あ、そう言えば、さっきレークさんを探してる声が聞こえたかも。

『レークさん、また逃げて来たんですか？』

書類をどけ、皿を並べる。ついでにお茶も淹れて、とやる事をテキパキとする。まだ二日目だけど、私って案外順応性高いのかも。

「そうしていると、本当に女中さんのようですねぇ。それよりも“また”とは聞き捨てならないです。

あの人たちは昼食の時間でさえ、私を神殿に閉じ込めようとするんですよ？」

必死な訴えに、それほどたいへんなのかと感心しつつ、用意が終わったので声をかけた。

『お仕事お疲れ様です。そのお話はひとまず置いておいて、食事にいたしましょう。せっかくですから、温かいうちに食べていただきたいのです。』

そう言うと、椅子にもたれかかっていたレークさんは姿勢を正す。一方のクーンさんは書類からまだ目を話していなった。

「放っておきましょう。一段落するまではきっと動きませんよ。それより、今日は何を作ってくださったんですか？」

『今日はハンバーグとサラダとスープです。昨日よりも時間があり

そうだったので、普通の食事の様式にしてみました。』

レークさんにハンバーグの説明をしていると、クーンさんがようやくこちらにやって来た。今日は昨日ほど疲れていないみたい。顔色がだいぶ良く見えた。

『私もご一緒していいですか？』

とか何とか言いつつも、実はちゃっかり自分の分も用意してきていた。ってなわけで、早速了承を貰って席に着く。と。

「「『いただきます。』」」

三人で手を合わせてそう言った。合わせた訳じゃないのに、タイミングがぴったりで吃驚。けど、私に合わせてくれてるみたいだったから、ちょっと嬉しかった。

『そう言えばミリアから言伝を聞きました。レークさん、私に何の話があるんですか？』

食事をしながらいつものように談話する。私はこの時間が大好きだ。

私の事、事情を分かってくれている人たちだから、なおさら安心するんだよね。

「ああ、ちゃんと伝わっているようで安心しました。」

一人、クーンさんだけが蚊帳の外で、眉間のしわを一層深くしている。そのうち、跡が付いちゃいそう。

「祭が近づいてきているので、そろそろ鏡盆に触れていただこうと思いまして。クーン殿、時期的にも良い頃合いだとは思いませんか？」

「…そうだな。人に紛れ、人知れず行うのが無難だろうな。夕方から夜に掛けてがいい。」

夜、人がいない時間。そんな時間のお城って怖そうだなぁ。なんて、自分の事なのに、他の事を考える。

てゆーか、鏡盆とやらに触れた時に何か起こらなきゃいいけど。宗教上のものって、なんかいわく付きで怖そうだよねぇ。

箸を進めながらも、心はここにあらず。脳内に留まって、自分だけ物思いに耽っていた。

触ると、元の世界に戻っちゃう、とかだったらどうしよう？…それだけは、マジ勘弁。

「ネイ？どうした？」

さっきよりも柔らかい表情のクーンさんを目の前にして、私はにへらと笑うしかなかった。

『何ともないです。さ、食べちゃいましょう。』

そう促す。だって、レークさんがいる前では話せない。何だか知らないけど、勢いでクーンさんに喋っちゃった、私の黒い内面の事

だから。

それに、これ以上私の暗いとこ見せたら、今度こそ嫌われちゃうかもしれない。そうしたら、私はこの世界でも生きていけない。

「…本当に？」

『ま、いいじゃないですか！』

明るく振る舞う。暗いと、本当に心配されちゃうからねー。それに、こう言うのを隠すのは、昔から得意だ。

悪魔の笑み

『今日は甘味も用意しましたよ。クーンさんも食べてくれますよね？』

もちろん念押し。“ね”は強調して言った。甘いものだけど、有無を言わさずに食べてもらいますよ、ってね。

まるで何も聞いていなかったかのように箸を進めるクーンさんを、レークさんと二人で見合って笑った。

お皿が綺麗に片付いたころ、私はプリンを出した。でも、生憎室温くらいになっちゃってて。がっかりした。

せっかく冷やして貰ったのに。

『すみません。これ、さっきまでは冷たかったんですけど。』

「冷やして食べるものなのですね。」

レークさんは面白そうに観察している。まだ、異世界の研究は諦めていないんだってさ。

『プリン、という名前のお菓子です。黄色い方は少し甘さを控えてありますから、クーンさんにも食べられると思います。』

笑顔で目の前に置く。やっぱり二人には珍しく映ったようで、不思議な眼差しを向けていた。

「冷やそうか？」

一瞬、何を言われたのか分からないかった。だけど、クーンさんが魔道師だった事を思い出す。だから、お願いして冷やして貰った。

やっぱり魔法って便利！

二人に食べるよう促して、私はお茶のお代わりを注ぎ入れる。でも、言われた訳でもなく、二人はすでに手を付けていた。

「これは…おいしいですね。」

にこにこ食べてくれるレークさんは、ちょっと子供みたいだ。お代わりを要求され、もう一つ追加。それも美味しそうに食べてくれている。

『クーンさん、どうですか？』

さっきから無言だし、やっぱり甘過ぎてダメだったのかも。そう心配になる。でも、そうじゃなかったみたい。

「下に入っているのがほろ苦くて、食べやすい。さすが、異世界の菓子は作り方も違うんだな。」

感心しているみたいなとこ悪いんだけど、反応が今一理解できない。あれほどお菓子を嫌がっていたのに、パクパク食べ進めている姿はどうも不自然だ。

ここのお菓子って、一体どんな感じなのかな。

「甘さ控えめなのがいいですね。これならクーンさんにも食べられて調度良いでしょう。」

やっぱり、全然違うんだ。だからエルさんが興奮してたのか！

てゆーか、エルさん、そう言うことならちゃんと教えといてよー。

ここまできたら、気にならないはずがない。

『ここのお菓子って、どんな感じのものなんですか？』

「何と言いますか、甘い、ですね。」

話をクーンさんに振った。でも、反応は二人とも同じものだった。

「甘い、な。」

なんすか、その一言で終わらせちゃう感じ。悪いけど、私には全然伝わって来なかった。

『もう少し詳しく教えてくれませんか？よければ料理の参考にしたいんです。』

「ここのお菓子、ですか…」

二人は顔を合わせて嫌そうな顔をしている。それから、遠くを眺めるように、視線が散った。

「俺はとにかく見たくもない。よく貴族の娘たちはあんなものを食

べられると思うな。」

眉間のしわは、今までで一番深かった。それほど嫌いなのがよく分かる。でも、そんなに、って思えるくらいの反応だった。

「私はクーン殿ほどではありませんが、1、2年に一度食べたいと思うか、思わないかというほどですね。たいてい食べてから後悔しますけど。」

それって、どういう意味？美味しいの？まずいの？

訳が分からなくてそう尋ねると、二人は声を合わせて言った。

「「甘いんだ（です）。」」

『甘い…？お菓子なんだから、当たり前ですよね？』

甘いお菓子なんていっぱいあるはず。文化が違うんだから、ポテチみたいなしょっぱいお菓子があるとも思えないし。

「いや、甘過ぎるんだよ。」

「そうなんです。何事もほどほどが大切だと、あれを食べると言うも思います。」

その反省は、どうなの？甘いって、甘いだけでしょ。そこまでつっぱねる理由でもあるのかなぁ。

「こう言われても、分からないのが当たり前ですよね。では、食べてぜひ一度苦痛を味わってください。」

…それは、笑顔で言うセリフじゃないと思う。てゆーか、敬語で言われると余計怖いって。

そう考えていたけど、笑顔だけみてると、レークさんはとっても優しそうに見えるから、正直本心が読めない。

結構長い間一緒に居たけど、掴めない人だってことだけはよく分かっていた。

自分の興味があることは、とことん追求する人だ。でも、そうでないことには淡白だとも言える。

同族のにおいがしないでもないけど、レークさんの方が大人だから、長い歳月をかけての底知れない深さがあの笑顔に垣間見えてるような気がした。

きっと、笑顔の分だけ、あっちの方が厄介なんだろうな、なんて思う。

「そんなに見つめてくれるとは、嬉しい事ですね。」

心から思ってもいないような歯痒い台詞をありがとう。私も笑顔で応戦して見たけど、やっぱり叶わないほど完璧な笑顔が板についていた。

「苦痛を味わってみるには、そのお菓子が必要ですよね。」

笑顔で言って席を立つと、廊下に出て女中の一人に声をかけてきたようだった。ここにそのお菓子を持ってくるように、って。

そこまでして、二人が言う苦痛を味合わなくてもいいんだけどなぁ、とは思ったけど、好奇心には勝てない。

それに、レークさんのお遊びにつきあってみても面白いんじゃないかなって思った。でも、私はMじゃない。日頃のお礼ってだけ。

5分も経たないうちに、ノック音が聞こえて、お皿がテーブルに置かれた。のは良いんだけど。

『なに、これ？』

そう思わず呟きが零れていた。

「ティレ・タータ、という一般的なお菓子です。」

目を背けるクーンさん、笑顔のレークさん。そして私は目が点になってるに違いない。

三者三様の反応がある部屋の中、一番注目を注がれているそのお菓子は、見事なまでのお色だった。

今までだった、食材とかで変な色は見慣れてた。だけど、これは流石に驚愕の域だ。

ピンク、黄色、水色、黄緑。見事なまでの蛍光色の塊が、お皿に並べられていた。

一口サイズの丸いそれは、食べるにはどうも抵抗がある色をしている。アメリカとかのお菓子みたいな色だ。

『これが…お菓子？』

無意識に出た呟きは、クーンさんが拾って、そうだと教えてくれた。でも、心は放心状態だ。

「さ、どうぞ。」

…悪魔の笑みだ。

神殿につかえている、力のある神官だと言うその人の笑みは、一見すれば天使の笑みかもしれない。

…だけど、今の私には悪魔の笑みにしか見えない。

これなら、常に無表情か、怖そうに眉を顰めているクーンさんの表情の方が、優しげに見えるよ、私。

「遠慮なさらず。」

してませんよ、遠慮なんて。そう言うのも戸惑われて、私はティレ・タータに手を伸ばす。一番手前にあったピンクのものを手に取ると、ひと思いに口の意放り込んだ。

『？？――…・・っ！』

それが失敗だったなんて、いとも簡単に分かること。声にならない叫びを上げて、お茶を飲もうとしたけど、カップの中にお茶は入

っていなかった。

さっき飲んじゃったんだった！

仕方がない方、必死に目で訴えてクーンさんのお茶を横取りする。私がそれを飲み下した時のクーンさんの表情は、憐れんでいるように見えた。

「大丈夫か？」

そんな訳もなく。私はワゴンまで行くと、新しいお茶を渋くなるくらいにして、カップに注いだ。

「人のお茶を盗って飲むなんて、ネイさんはお茶目さんなんですね。」

お茶目とか、そんな事言ってられるレベルじゃない。果たして、これをお菓子と呼べるんだろうか。

私は未確認物体をじとーっと半眼で睨みつけた。

「どうでした？」

相も変わらずニコニコしているレークさんは、腹黒さが全開だ。儚い感じの男の美人さんなのに、残念過ぎる。一本の図太い神経が見える気がした。

お茶用意した方がいいって、教えてくれてもよかったんじゃないの？

さっきのお菓子と同じように、今度はレークさんを睨みつけた。でも表情は変わらない。私は諦念の感を抱いて、深く嘆息した。

『砂糖の塊よりも甘くて、衝撃的でした。てゆーか、まだ歯が痒い気がします…』

そう言って自己確認をしちゃった所為か、歯を磨きたくなった。

「歯が痒いとは、あまりにも適切な表現ですね。で、これで分かりましたか？ネイさんのお菓子とこちらのお菓子はかなり違うのですよ。

ネイさんのものなら、毎日でも食べられますよね、クーン殿？」

クーンさんは小さく頷いた。でも。

…嘘だね、絶対。

いつか、クーンさんが気に入ってくれるようなお菓子を作れたらいいなって、今は純粋にそう思える。

それに、そんな行動一つにもクーンさんの優しさが見えた。そして、それが倍増して見えるのは、隣に居るレークさんの所為だと言うことは、絶対否定できないだろう。

てゆーか、まだしてるんだけど。レークさんを遠くからの声。

昼休みはもう終わってるころだろうし、声が悲痛そうに聞こえるのは、私の彼らに対する憐れみだけじゃないと思う。

でも、今日は昨日と違うことが起こった。

「さて、私はお暇いたしましょう。」

優雅に立って、綺麗な笑顔を浮かべて礼をとる。そして、片膝で立つと、私の手の甲にキスをした。

「また後ほど会いましょう。是非夕餉もネイさんの手で作っていただけると嬉しいですね。では、失礼。」

まさに、貴公子のように去って行った。

口撃、再び

なんだ、あれ。

見慣れないその姿に呆然としていると、クーンさんが来て私の手を拭った。

『どうしたんですか？』

「…いや。」

会話は続くことなく、クーンさんは定位置について仕事を始めている。

…そうか。今夜は神殿に行かなくちゃいけないからね。早く仕事を終わらせなくちゃいけないんだ。

私はワゴンを片付けて、昨日のうちにミリアに教えてもらっていた道のりを思い出しながら書類を届けた。

やっぱり格好とかにギョッとされたりもしたけど、若い人たちはみんな親切みたいだ。年老いた力のある人に逆らえないだけなのかもしれないけど、私みたいなのにも親切にしてくれるのは正直言って嬉しい。

それに、そう言う人たちはあまりクーンさんに反発を持っていないみたいだった。

こういう場所でも、やっぱり女のこの情報力はすごい。昨日のうちにミリアにいろんな事を聞いておいてよかったと安堵した。

ここにはルイス派とシェパード派という二つの派閥が合って、二分される。ルイスは過激、シェパードは温厚。温厚派の筆頭はその名の通り、宰相さまが筆頭だったりする。

王もどちらかと言えば温厚派寄りで、過激派の議会を追放したり、一斉排除に掛かったりと、結構手を妬いているみたい。そんな過激の一派は、ここの神様を強く崇拝しておられるんだそうな。

その厄介者に私は見つかったら大変なんだろうな、とか、頭の片隅に思いつつ、注意されたように、赤い羽根の小さな飾りを胸に付けている人たちを避けて通っていた。

それが過激派のマークらしい。こっちで赤い羽根と言えば、いい事の象徴だったりするのにね。こっちではルイス派の象徴で、一致団結している様を誇示する象徴なんだって。

道が分からなければ、その赤い羽根の人じゃない人に聞くのが得策だって言われてたから、その通りにするとみんな親切に教えてくれたし、書類も笑顔で受け取ってくれた。

でも、これから向かうところはそうもいかない。

『失礼いたします。書類を届けに参りました。』

ノックをしてからドアを開ける。でも、開けなきゃよかった、ってすぐに後悔する羽目になった。

ここはかの有名な議会部署だったから。

視線が一気に私に注がれる。それは、何か汚いものを見るような目で。

私はこんな視線を知ってる。向こうでも、毎日のように特定の二人から向けられていたから。

議会部署は融通が利かない。しかし、宗教上の敬虔な信者だから、神の御子の血縁だとされる王家には逆らわないらしい。

それなら、なんでクーンさんを目の敵にするんだって話だけど、御子は御子でも卑しい血との混血だから許されないとされてるんだって。

王は純血。クーンさんは混血。そこには雲泥の差があるらしい。だから、いくら王位継承権を放棄した元王族であるクーンさんが、いつか反旗を翻して王になろうとするんじゃないかって疑ってるらしい。（ミリア情報）

あれだけお兄さんの事慕ってるって語ってくれたもん。そんなはずないのに、勝手な憶測だけで流言するの、やめてほしいよね。

で、だ。ここからが問題。

ノックして声までかけた。なのに、誰も受け取りに来ない。

無視ですかー？いい大人がガキみたいな真似を。いい加減イライラするんですけど。何度声をかけても無視っていい度胸ね。

カルシウムが足りてないのか、イライラが最高潮に達した。

ふふふ、そろそろキレるぞー。

『すみませんが、どなたか書類を受け取っていただけませんか？』

これが最終警告。これで無視なら、自分の身分も何も関係ない。てゆーか、こっちには元々身分なんてもん関係ないんだから。クーンさんや宰相さまに迷惑をかけると思って我慢してるだけだもん。

「……」

ってな訳で、堪忍袋の緒がブチ切れた。ネイ、行っきまーす。

『いい加減にして下さい。そこに付いている耳は飾りですか？いい大人が言葉も理解できないとは、残念なことですね。』

もちろん挑発的に言った訳で。もちろん反応する人が出てくるわけよ。

「女中のくせにそんな口を聞いて、平気だと思っているのか。」

わざとやったことにこうも思い通りに乗ってくれるとは、アホ過ぎて怒る気も失せる。でも、言わせてもらう。言っても無駄だし、私を城から追い出そうとするとは思うけど、そんなの関係ない。

『私は当たり前の事を言っているまでです。仕事は仕事。書類を受け取ることすらできないとは、議会が聞いて呆れます。』

おじさんたちの困惑の表情は、面白い。こんな若い女に言われるようなことじゃないと思ったんだろうけど、こうなったらとことん言わせてもらいますよ。

「これが卑しい混血の専属か。主人が主人だからか、教育が成っていないな。」

そう言って、近くに居る人が近づいてきた。書類を受け取ってもらえるのか、と思いきや、伸ばされた手は、私の頬を思い切り弾いていた。

私の身体は揺れたけど、そこから一歩も動かない。口の中か端が切れたのか血の味がしたけど、私は泣く事もなくニヤッと笑ってやった。

『頭に血が上れば、女などお構い無しに手を出すんですね。』

悪いけど、こちとらこういう状況には慣れてる。殴られたくらいで取り乱したりなんかしてやらない。そして、そんな姿を何とも言えない視線で見てくるその表情も、もう何年来にも渡って見てきたものだ。

『大人はそうやって、子供に正しい事を注意されると怒りだす。』

自嘲気味にそう言ってやると、目の前の男は顔をもっと真っ赤にさせた。

この人は、クーンさんを侮辱した。これで私が怒らない訳がない。軽く言いくるめてやろうと思ったのに、そうはいかないほど冷静さを失っていた。

『身分など関係ありません。皆生活するために働いているのです。その頑張りに上も下もありません。同じように必死なのですから。』

動揺することなく、さっきと同じように手を前で小さく組んで、女中のそれらしく言ってやる。懇切丁寧に言ってやるのは、屈辱感を煽るため。そうでなければ、こんな丁寧な言い回しなんてしない。

『働かざる者食うべからず。ただ書類を受け取ると言う仕事にも満たない動作をすることすらできないのなら、タダ飯を食べているのと同じこと。給料をもらう資格すらないと言うことになります。』

目の前の男はぐっと唇を噛んでいる。それが自分の非を認めている事をよく表していた。

『書類を受け取っていただけますね？』

笑顔で再びそう言うと、今度こそ受け取ってもらえた。その時の議会の執務室は驚くほど静かで、私の姿に視線を、声に耳を傾けていることが一目瞭然だ。

丁寧に礼をして。

『失礼いたしました。どうか無礼な言動をお許しくださいませ。』

なんて、ちゃっかり自分の言動についてまで謝ってから、そこを

後にした。

廊下を進みながら頬に手をやる。

あーあ、思いっきり殴ってくれちゃって。一応うら若き乙女だぞ！顔に傷でも残ってくれたらどうしてくれよう。

そう考えたら、またイライラしてきた。

これ、腫れちゃうかなぁ。とりあえず、冷やした方がいいよねぇ。

だから、クーンさんの執務室じゃなく、女中部屋に戻ることにした。のは、いいんだけど。

「ネイさま！そのお顔はどうしたんです！」

悲鳴にも近いミリアの声がその部屋に響き渡ったのも無理はなかった。

「こりゃ腫れてるねぇ。ミリア、落ち着いて、冷やすものを持ってきな。」

あたふたするミリアに、その場にたまたま居たマーサさんが指示を出す。それくらいにミリアは驚いていたらしい。

「ここじゃ目立つ。食堂にでも行こうか。今の時間ならあそこには誰もいないからね。」

手を引かれて連れて行かれる。私は怒られる子供のように、黙っ

て着いて行った。

一番入口に近い端の席に座り、ミリアが濡らしてきてくれた布を、頬に当てる。ひんやりして気持ち良かったけど、ちょっとだけ沁みた。

心配そうな視線を向けて、違う布で唇の血を拭ってくれる。切れていたのか、それから消毒もしてくれた。

「何があったんだ、と聞いてもいいかい？」

私は怒られる覚悟で頷き、一言一句漏らさないように、丁寧にさっきの議会の執務室での出来事を話した。

けど、私が思っていた反応とは違って、マーサさんは大声で笑い出してしまった。

「マーサさん！笑いごとでは済まないわ！」

一方のミリアは顔が真っ青。やっぱり、普通ならあり得ないような事、しでかしちゃったみたいだね。

「いや、あんた変わってるよ！」

私の一連の出来事を笑い飛ばしてるマーサさんには言われたくないけど、ここの価値観と私が持っている価値観の違いを大きく知るきっかけになったには違いない。

『正論を言ったつもりだったんですけど、何か変なところありました？』

「無いから面白いんだよ。

とは言え、乙女のやわ肌に傷を作るなんざ、男の風上にも置けないねぇ。ネイの白い肌に傷が付くなんて、可哀相じゃないか。」

マーサさんが突いてきたそこは、時間が経ってさっきよりも赤く腫れていた。こりゃ、目立つな。ミリアが持ってきてくれた小さな鏡に映る頬を眺めて、諦めたようにため息を溢した。

『いえ、私もちょっと挑発してやろうって思ってたのに、イライラが最高潮に達してしまって。

もう少し考えれば顔に傷を付けないように言いくるめることができたのに、これは私のミスですね。』

淡々とそう語って、自分の中で反省した。

いつまでも相手がぐだぐだと言ってたからって、私が先にキレたのには変わりない。今度からは気をつけよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0585x/

異なる世界で

2011年10月12日09時45分発行